

傷寒論述義

傷寒論述義

多紀元堅 著
新谷哲一 訓讀

目次

傷寒論述義題辭	1
傷寒論述義目錄	2
傷寒論述義卷第一	5
敘述	5
陰陽總述	9
傷寒論述義卷第二	19
述太陽病	19
述少陽病	32
述陽明病	40
述太陰病	49

目次

述少陰病	55
述厥陰病	65
傷寒論述義卷第三	73
述合病併病	73
述溫病風溫	78
傷寒論述義卷第四	84
述壞病	84
述兼變諸証	86
虛乏	87
熱鬱	99
飲邪搏聚	106
飲邪併結	114
血熱瘀血	123
熱入血室	127
風濕	129
濕熱寒濕	131

目次

傷寒論述義卷第五	133
述霍乱	133
述差後勞復	137
附答問	140
傷寒論述義補	161

傷寒論述義題辭

從來 傷寒を注する家は、概ね是 想象 懸擬して、各々 私見に師ひ、竟に定論 無し。是に於いて先教諭 洽く諸家を搜し、是非を衡別して、著するに『輯義』の一書 有り。仍惜しむらくは繕次 僅に就くに、間々 細辨を欠く。元堅 童子時 嘗て講授を受け。奈せん質 鈍にして詳記すること能はず。弱冠に至るに及んで、日に『輯義』を取り之を読む。疑竇に遇ふ毎に、趨庭の期 無きを念ひ、未だ嘗て之を為すに戯歎 嗚咽せざることあらざるなり。遂に乃ち遺訓を遵奉して、至平 至易の処に就いて、涵泳 玩繹するは、蓋し亦 年有り。以為らく前輩に『類証』有り、『類治』有り、『類方』有るも、未だ病情 病機を求めて、能く剖判を加ふ者有らず。故に微言 大義、往往 湮鬱して明らかならず。仍自ら揣らず、其の要を疏ち、其の異を通じて、述べて五卷と為し、以て『輯義』の余意を拡充す。陰陽の略、兼變の殊を、参互攷究し、具へて條析と為す。而して更に答問數則を設け、以て其の大例を辨じ、之を卷末に附す。竊に恐る猶ほ是 想象 懸擬に過ぎざるのみかと。然し言 必ず体験を之に審徴す。諸々無稽の説は、断断乎として為すに 屑しとせざる所なれば、則ち之を浮辞 高談して、誇張を急ぐ者に較ぶれば、或いは日用の際に切ならんか。因つて憶ふに先友 軒邨 寧熙 字は世緝なる者有り。才敏に苦学す。深く力を此の経に用ゐ、多く濬発する所あり。亦 注解を志す有り。相与に商榷

を約す。且つ其の書を序す。今拙著稟を卸し、其の人已に謝す。惋歎の余り、遂に併せて此に書す。

文政丁亥嘉平月丹波元堅篋

傷寒論述義目錄

卷第一

叙述

陰陽総述

卷第二

述太陽病

述少陽病

述陽明病

述太陰病

述少陰病

述厥陰病

目錄

卷第三

述合病併病

述溫病風溫

卷第四

述壞病

述兼變諸証

虛乏

熱鬱

飲邪搏聚

飲邪併結

血熱瘀血

熱入血室

風濕

濕熱寒濕

卷第五

述霍亂

述差後勞復

附答問

傷寒論述義目錄終

天保戊戌歲審正癸卯歲開雕

敘述

『傷寒論』一部は、全く是 性命の書にて、学ぶ者をして病を見て源を知らしむる所以なり。是を以て深切にして著明、平易にして直達、誠に牽紐、艱隱の故有るに匪ざる者なり。蓋し仲景の旨は、先ず其の病を辨定す。病を辨ずる法は、脈証を察するに在り。故に必ず脈証に就いて、以て其の病を定め、而る後に治法を由つて設くること有り。謂ふ所の病なる者とは、何ぞや。三陽 三陰が是なり。熱を陽と為し、寒を陰と為す。而して表裏 虚実、互いに同じからざる有れば、則ち六者の分、是に於いて立つるなり。謂ふ所の脈なる者とは何ぞや。其の位は、寸口 关上 尺中 趺陽。其の体は、浮 沈 遲 數 緊 緩 滑 濇の類、是なり。証なる者とは何ぞや。発熱 惡寒、讖語 腹滿、下利 厥冷の類、是なり。脈に常變 有り。証に真假 有り。故に脈証 並示し、而して病の情機を尽くすなり。脈に常變 有ることは、卷末の答問中に詳し。病

情の字は、『素問』に多く見る。形の疾病は、其の情を知ること莫きの類の如し。情の言は猶ほ性のごとし。蓋し病の寒熱、虚実は皆之を情と謂ふなり。病機の字は『本草経』に見る。曰く、「病を療ぜん」と欲すれば、先ず其の源を察し、先ず病機を候ふ」と。蓋し邪の進退消長、勢の緩急、劇易は、皆之を機と謂ふなり。程氏は病人の苦喜を以て、指して病情と為す。柯氏は『論翼』に、又病に名証情機の別有ることを論ず。並んで此に称する所と異なる。謂ふ所の治なる者とは何ぞや。汗下涼温、及び刺灸の法、是なり。六病中に、自づと緩急劇易の等しからざること有り。故に方に亦大小緊慢の同じからざる有り。以て相對治す。之を加ふるに人宿恙相得ること無きこと能はず。医或いは誤措し、以て変逆を致すは、凡そ皆其の脈証に随つて、之を治法に備ふ。其の深切にして著明、平易にして直達なること、固より既に是の如し。始めて艱隠して知り難き者有るに非ざるなり。然りと雖も、其の書は実に三代の遺なり。是を以て高くして旨邃かしと言ふ。苟も其の義例に通ぜざれば、則ち未だ盲者の埒かを擽かつを免れず。塗もを索もとめて冥行するのみ。蓋し嘗て之を論ずるに、之を岐扁に取り、變じて之を通ず。此名稱の例なり。熱よりして寒、表よりして裏、実よりして虚、此篇第の例なり。六病の名は提綱に有り。而して次ぐに細目を以てす。又次いで本病来路、伝變証候、及び誤逆諸態、疑似各病を以てす。或いは其の正を挙げ、承くるに其の奇を以てし、或いは其の輕きを説いて、続いて其の重きを以てす。法有り按有り、戒有り論有り。参互

錯綜、縷分條析。此章次の例なり。語るに主客有り。辞するに詳略有り。或いは数條相參じて、其の義始めて悉くす。或いは一章の中に、文互いに照対し、証を方を以て省き、方を証を以て略す。理趣明白にして、複述を仮ざる者有り、事緒繁雜にして、須く人を引伸すべき者有り。此辞句の例なり。四者の例は、極めて謹嚴を為す。而して俱に是深意の存する所ならざる莫し。今 龔陋を憚らず、『輯義』の著に本づいて、諸四者の例を校じ、病の情機を推究し、以て其の大要を述ぶ。陰陽 総述に始まり、差後 勞復に終わり、脈証 治法を具へて辨析と為す。顧るに猶ほ未だ注家 更定の氣習を免れざることとし。然し其の派を分かたざれば、以て其の源に達する由 無く、其の類を疏とよらざれば、以て其の別を認むる由 無し。故に務めて拘鑿の談を去り、敢へて坦明の説に従ふ。庶くは其の通ずべきに通じ、其の疑ふべきを疑ひ、崑ら以て家庭の遺教を拡充し、性命上の神理を闡揚せん。後の読者は、或いは此に由つて手を入れ、其の病に臨み療を処するの方に於いて、未だ必ずしも小補 無しとせず。是の書の作すに、全経の大義を辨するを以て主と為す。故に每病 每証、必ずしも各章を具列せず。特に其の梗概を挙げ、以て人の隅反を俟つ。蓋し大綱を叙するには、則ち大書を用ゐ、而して説を為す所以、及び諸説を援拠するときは、則ち其の下に夾注す。要旨は『輯義』の余意を述ぶるに過ぎざれば、則ち『輯義』に既載の者は、亦 復びは録出せず。撰述の例の如きは、更に三端 有り。一に『輯義』の覆を發す。『輯義』は固より慎重を主とす。故に情機 伝變の委

に於いて、前人の説 具せざる者は、大抵 欠いて論ぜず。今 経旨を鑽研し、事理を覈核し、略して辨訂を加へ、以て貂続と為す。一に諸家の中を酌んで、『輯義』に引く所の諸説は、或いは一條にして異同兼臚し、或いは數條にして前後に其の義 異なる。今 則ち参互涵泳し、之を画一に帰す。一に『輯義』の遺を補ふ。前輩の確説、及び諸家の経旨を拡充せる者、或いは漏落 有れば、略取して之を附す。唯 拙著 別に『傷寒広要』有り。故に彼の採入せる所は、茲に復びは贅せず。之を要すれば仲景の書は、理 該ねざる無し。学者 河を飲む鼠の如く、各其の量を充たす。此 『輯義』の著は、亦 広蒐を厭わざる所以なり。今 斯の書は、則ち僅に一隅を述べ、見る所 特に隘せまし。然し既博なり。従つて而して之を約すに、固より亦 学を為すの方なり。覽る者 幸ひに僭越の罪を恕したまはん。○按ずるに諸注家、尤怡『傷寒論貫珠集』、黄元御『傷寒懸解』、『長沙葉解』の如きは、俱に先教論 世を下りて後に出づ。尤書は穩実にして、間々發明 有り。黄書は僻謬にて、殊に取ること少なし。又 近世 熊寿試『集注』有り。又郭雍『傷寒補亡論』は、『輯義』にては汪氏従り転引す。而し近日 吳船 新齋本 有り。今亦 採入す。皇国 注家の如きに至りては、則ち指すに憊る暇あらず。『輯義』一概に引かず。蕪雜なるを嫌ふなり。愚 亦 甚だ読むを厭ひ、姑く一二部を取り、略して之を摘録するのみ。○郭氏 曰く、「問ふて云ふ。傷寒 何を以つて之を卒病と謂ふかと。雍云ふ。是 説 無きなり。仲景 叙論に云ふ。『傷寒雜病論』合せて十六卷と為すと。而して其の目を標す者、誤つて書し

て卒病と為す。後学之に因つて、乃ち六七日にて人生死す。故に之を卒病と謂ふと。此の説非なり。古の伝書 怠惰なる者は、字画多きに因つて、偏旁を省いて字を書き、或いは二字を合して一と為す。故に雑を書いて親と為し、或いは再び省いて卒と為す。今 卒病と書くは、則ち雑病の字なり。漢の劉向は中秘書を校して、趙を以て肖と為し、齊を以て立と為すの説有り。皆 省文に従る。而して此に至り、雑病の卒病と書くと以て異なること無し。今『傷寒論』十卷存して、『雑病論』亡ふ」と。郭の此の説は甚だ是なり。但し末句に礙げ有り。○家丹州公『医心方』に、『養生要集』を引いて、高平 王熙叔和 曰の語有り。此に拠ると、叔和名は熙、字を以て行くなり。先友 山本讓 嘗て此の説有り。実に前人の未だ言ひ及ばざる所と為す。仍之を附拈す。

陰陽総述

蓋し仲景の陰陽の義を明らめんと欲すれば、必ず先ず『素問』熱論の旨を審かにすべし。三陽三陰の目の由つて出づる所なり。夫れ三陽三陰の目は、之を彼に取ると雖も、而し其の義は則ち自ら同じからざること有り。故に学ぶ者は胸次に必ず先ず此に了然として、而して始めて仲

景の書を読むべし。熱論を攷ふるに、黄帝は熱病を以て問ひを起こし、而して岐伯対ふるに人の寒に傷られて、則ち病熱を為すを以てす。是人真に寒に傷られて、陽氣怫結し、因つて熱証を為すを言ふなり。曰く、「傷寒一日、巨陽之を受く。故に頭項痛み、腰脊痛む云云」と。是は経絡に拠つて分を為す。三陽経は外を循り、三陰経は内を循ることを為すを以て、故に表熱証を三陽と為し、裏熱証を三陰と為す。而して表裏均しく熱するを以て両感と為す。定むる所の日期の如きは、略淺深次序を示すのみ。故に曰く、「其の未だ三日に満たざる者は、汗すべし。其の三日に満つる者は、泄すべし」と。以て見るべし。之を要すれば、『素問』の義は、是熱病に止まる。仲景の寒熱兼該する者と、判然たる両途なり。『素問』と仲景の異は、従来の注家、分辨清ならずして、往往牽混す。遂に徒らに頭緒を分かち、泛く統紀無きに至る。故に茲に首めに之を辨ず。王氏『溯洄集』に曰く。「夫れ『素問』に、人の寒に傷らるれば、則ち病熱と為ると謂ふ者は、常を言ひて変を言はざるなり。仲景の或いは熱を或いは寒を謂ひて、一ならざる者は、常と変とを備へて、遺す弗きなり。仲景蓋ぞ古人の未だ言はざる所を言ひて、大いに古人より功有るは、偏に廃せんと欲すと雖も可ならざらんや」と。程氏『後條辨贅余』に曰く、『素問』の六経は、是一病共に具はるの六経なり。仲景の六経は、是異病分布の六経なり。『素問』の六経は、是熱病に因つて、而して六経に原及す。仲景の六経は、是六経を設け、以て該ねて衆病を尽くす」と。一家の言は、特に其の要を得

る。又中西惟忠 山田正珍、亦並んで辨有り。稍確かなり。

仲景謂ふ所の陰陽は、寒熱の謂なり。曰く、「病に発熱 悪寒する者 有り。陽に発するなり。熱 無く 悪寒する者 有り。陰に発するなり」と。此 則ち全經の大旨なり。其の発熱 熱無きは、是 病熱 病寒の明徴なり。但 其の章は本邪の初犯に、表熱 表寒の異の分かちを為して設く。此の章の義は、『溯洄集』始めて其の蘊を発す。程 錢の諸家は、皆之を根拠とす。然して是に由つて推求すれば、則ち諸般の疾証、皆 自づから歴然たり。夫れ其の熱と為り寒と為る所以の理に原づくは、固より受くる所の地位を以てせず。注家、陽經 陰經を以て説と為すは、妥を欠く。亦 感ずる所の邪に、寒と熱と有るに非ざるなり。互いに卷末の答問を見て、宜しく併攷すべし。蓋し人には強弱を論ぜず、必ず一罅隙 有り。而して邪 乃ち入るに之に乗ず。罅隙なる者は何ぞや。或いは汗に涼を取り、或いは衣被 宜しきを失ひ、或いは食饑して房に入り出浴するなど、凡そ一時に適たま表 開くこと有り。皆是なり。評熱病論に曰く、「邪の湊まる所、其の氣 必ず虚す」と。是 氣虚する所の処に、邪氣 湊まることを言ふ。百病始生篇に曰く、「風雨 寒熱も、虚を得ざれば、邪 独りでは人を傷らず」と。謂ふ所の虚なる者は、虚邪の風と身形の虚とを言ふ。又 楊上善『太素注』に曰く、「風氣は之、之を得るに困る者なり。或いは飢虚に困り、或いは復た力を用ゐるに困り、腠理 開發すれば、風は毛腠に入り、洒然として寒く、腠理 閉塞すれば、内 壅がり熱悶す」と。皆以て証すべし。又 内藤希

哲 山田宗俊も亦嘗て之を論ずるも、精切を欠く。仍録さず。其の既に乗じて入るや、其の人の陽気の盛衰に随つて、化して病と為る。是に於いて寒熱の分有り。虚家にも陰虚陽盛の者有り。実人も亦内寒の者有り。蓋し陰陽盛衰の機は、一例にして言ふべからず。学者宜しく精思すべし。陽盛の人は、邪陽に化すに従り、以て表熱と為る。此陽に発するの義なり。太陽病中に詳述す。陽衰の人は、邪陰に化すに従り、以て表寒と為る。此陰に発するの義なり。少陰中に詳し。陽に発する者は、其の陽甚だ盛んなれば、邪と相搏ち、則ち伝はつて裏熱と為る。少陽陽明中に詳し。如し胃気素弱ければ、邪の為に奪はるる所なり。或いは内に久冷有らば、則ち變じて裏寒と為る。太陰少陰中に詳し。陰に発する者は、其の陽甚だ衰へ、邪に抗はず。則ち伝はつて裏寒と為る。少陰中に詳し。如し本伏陽有つて、更に能く撑持すれば、則ち變じて裏熱と為る。亦少陰に詳し。此陰陽の要なり。病を受くるの略なり。經に曰く、「邪氣盛んなれば則ち実し、精氣奪すれば則ち虚す」と。其の義を見るべきなり。經とは、『素問』通評虚実論なり。先教論に嘗て詳解有り。今愚の此の説は実に其の意に本づいて云ふ。従前の諸家、問々此に論及する者有り。或いは礙無しとせずと雖も、然し宜しく以て扱と為すべし。仍左に表出す。龐氏曰く、「凡そ人の稟氣は各々盛衰有りて、宿病には各々寒熱有り。傷寒に因つて宿疾を蒸起す。更に異氣を感じて變ずる者には在らず。仮令ば素寒在る者は、多くは陽虚陰盛の疾に變じ、或いは陰毒に變ずるなり。素熱有る者は、多く

は陽盛 陰虚の疾に變じ、或いは陽毒に變ずるなり」と。(此の説已に『広要』中に拈す。然し病の人に因つて化する者を論ずるは、実に麗氏を以て藍本と爲す。故に又茲に列す) 程氏曰く、「人の府蔵は、但 各々虚実 寒熱の等しからざること有るにはあらず。而して虚実 寒熱中に、更に剛柔 強脆の等しからざること有り。風寒 固より扱ばずして施す。府蔵は則ち材に随つて各々得る」と。柯氏 曰く、「夫れ病の寒熱は、当に其の人の陰陽の盛衰を審かにすべし。天氣の実熱に拘ることを得ず。必ず其の人の陰陽の多少 元氣の虚実に因つて、全くは時令の陰陽に憑いて転移を爲さざるなり」と。『金鑑』に曰く、「六氣の邪は、人感ずるに同じと雖も、人之を受けて病を生ずるに各々異なる者は、何ぞや。蓋し人の形に厚薄 有り、氣に盛衰 有り、蔵に寒熱 有るを以てなり。受くる所の邪は、毎に其の人の蔵氣に従つて化す。故に病を生ずるに各々異なるなり。是を以て或いは虚化に従ひ、或いは実化に従ひ、或いは寒化に従ひ、或いは熱化に従ふ。諸々水火に譬ふれば、水盛んなれば則ち火滅し、火盛んなれば則ち水耗る。物盛んなれば化に従ふは、理 固より然るなり。誠に此に知らる。又何ぞ陽邪の裏に伝はつて、寒に變じ熱に化すを疑はんや。而して遂に以て奇と爲さんや」と。又軒邨曰く、『靈樞』五變篇に論ずる所、能く邪を受くるの理を尽くせり。云く、「黄帝曰く、一時に風に遇はば、同時に病を得るも、其の病 各異なる。願はくは其の故を聞かん。少俞曰く、善いかな問ひ。請ふ論ずるに以て匠人に比せん。匠人の斧斤を磨くに刀を研いで、材木を削劉

す。木の陰陽、尚堅脆有り。堅なる者は入らず。脆なる者は皮弛み、其の交節に至りて、斤斧を欠く。夫れ一木の中にも、堅脆同じからず。堅なる者は則ち剛く。脆なる者は傷られ易し。況んや其の材木の同じからざるをや。皮の厚薄汁の多少、而して各異なる。云云」と。是なり」と。軒又曰く、「宋人に陽臟人陰臟人の語有り。其の人の體質に就いて言を為す。蓋し陽臟人は邪に感ずれば、則ち熱証と為り。陰臟人は邪に感じて、則ち寒証と為るなり」と。愚謂ふ軒説並に是なりと。又陶隱居曰く、「邪氣の人を傷るや、最も深重と為すは、経絡既に此の氣を受け、藏腑に転入し、其の虚実冷熱に随つて、結して以て病と成る」と。亦以て発するに足る。

寒熱なる者は、病の情なり。病に在る所の部位有り。人に体氣の強弱有り。故に表裏虚実相配するに、以て三陽三陰と為す。而して証状機變、是に於いて此を出づること無し。表は、軀殼の分、是なり。裏は、胃府是なり。中西惟忠曰く、「胃は、津液の原にして、生有るの本なり。飲食の入るや、前後の出と、頭然として之を外に度して、内の病む所を察すべし」と。愚又謂ふ、「陽氣の盛衰は、必ず之を胃に験す。而して倉廩の官は、邪最も陥入し易し。且つ外感の病は、倘し傷臟に及ばば、則ち薬の能く治する所に非ず。皆是仲景の専ら胃腑を主とする所以なり」と。虚なる者は、無形の名、氣虧の義なり。実なる者は、有形の名、氣盈の義なり。蓋し陽盛んなれば則ち熱す。故に実証多くは熱す。火熱は炎上す。故に表証多

くは熱す。陽衰ふれば則ち寒たり。故に寒証多くは虚す。水勢は沈下す。故に寒証多くは裏なり。然し事以て一定なるべからず。故に熱に亦裏有り虚有り。寒に亦表有り実有り。此分かちて六と為す所以なり。太陽病は、表熱の証なり。少陽病は、半表半裏の熱証なり。此の二者は未だ物に藉りて結を為さず。然して其の体気は則ち実なり。陽明病は、裏熱実の証なり。太陰病は、裏寒実の証なり。少陰病は、表裏虚寒の証なり。而も更に等差有り。厥陰病は、裏虚にして寒熱相錯する証なり。此三陽三陰の梗概なり。表裏に俱に寒熱有り。但し半表半裏には、熱証有つて寒証無し。蓋し寒は是潤下の氣にして、隙地に羈留すべきに非ず。其の理は辨を待たざるなり。諸家説く所の如く、一に経絡藏府の義に係る。愚豈前輩に異なるを求めんや。姑く見る所を據べて、以て後の識者を俟つのみ。諸家の説を攷ふるに、皆経絡藏府を主とす。而して各々異同有り。今其の略おぼやそを摘む。成氏は太陽を以て表と為し、陽明を胃と為し、少陽を半表半裏と為し、太陰を陽邪裏に伝はると為し、少陰を邪氣裏に伝はること深しと為し、厥陰を熱已に深しと為す。方氏は太陽を以て皮膚と為し、陽明を肌肉と為し、少陽を軀殻の内、藏府の外と為し、而して三陰は唯各藏を配す。張志聡及び錫駒は、則ち盧の頤を以て原と為し、氣化の説を牽合す。程氏は則ち以て六經実すれば即ち表裏藏府の別名と為す。汪氏は則ち仲景の意は、一に『内経』に同じと謂ふ。而して諸寒証を以て、自ら一書を為す。柯氏は則ち『素問』皮部論に拠つて、強ひて辨別を立つ。魏氏は則

ち陽を以て表と為し、陰を裏と為し、而して太陰を裏中の表、少陰を裏中の半表裏、厥陰を裏中の裏と稱す。（表裏中を更に表裏に分かつは、劉元素『保命集』に、既に其の説有り）尤氏は則ち三陽を必ず経腑に分けて、三陰を必ず経臟寒熱に分ける。夫れ皇国諸注の如きは、則ち経絡藏府を擯斥し、専ら病位を主とす。然し其の説多くは虚揣に出で、殊に実效少なし。之を要すれば三陽の病は從つて定論有るも、三陰病に至りては、則ち各注見を殊にす。未だ確核の説有るを見ず。

仲景の病を命するに、本定名有り。然し亦彼此を更に稱して、人に示すに拘執すべからざるを以てする者有り。曰く、「傷寒六七日、大熱無く、其の人躁煩するは、此陽去つて陰に入る故と為すなり」曰く、「傷寒三日、三陽尽きると為す。三陰当に邪を受くべし云云」此に謂ふ所の陰陽は、熱証中に就いて、表と裏とを標す者なり。曰く、「病陽に発して、反つて之を下し、熱入るに因つて結胸を作す。病陰に発して、反つて之を下し、因つて痞を作すなり」此に謂ふ所の陰陽は、太陽中に於いて、虚と実とを標す者なり。蓋し虚実表裏は、以て陰陽に配す。則ち表を陽と為し、裏を陰と為し、実を陽と為し、虚を陰と為す。然して経中の陽病も亦裏有り。陰病にも亦表有り実有り。則ち扱するに以て篇題の陰陽の称を解すべからず。経絡藏府の言に至り、経中間々或いは之に及ぶ。然し本自ら別義にして、全経の旨に非ず。閔氏は『行経等義』を積す。『輯義』に挙ぐる所の諸説と相発す。文繁にして録

さず。宜しく参攷すべし。軒邨曰く、「経中の経字は、皆当に表字と為して看るべし。猶ほ裏を指すに蔵と為す」と。亦備ふべき一説なり。方氏曰く、「六経の経は、経絡の経と同じからず。猶ほ儒家の六経の経のごとし。猶ほ部を言ふごときなり」と。程氏曰く、「経は則ち猶ほ界を言ふごときなり」と。又曰く、「経とは、猶ほ常と言ふごときなり」と。柯氏曰く、「仲景の六経は、是経略の経にして、経絡の経に非ず」と。愚謂ふ「本経中に、六経の字無し。則ち諸説殊に贅疣と為す。経絡蔵府は、全経の旨に非ず」と。卷末答問に辨有り。唯寒熱を以て陰陽を定むれば、則ち触処朗然たり。貫通せざること無きなり。成氏は傷寒例を注して、「若し或いは差ゆること遅ければ、病即ち伝変す」と曰く。伝には、常有るなり。伝は経を循つて伝を為す。太陽が陽明に伝はるの如きが、是なり。変は、常ならざるを之と變と為す。陽証が陰証に變ずる如きが、是なり。蓋し三陽三陰の次第は、陽なれば則ち表よりして裏、陰なれば則ち実よりして虚、寒極まつて熱、此其の概なり。病機は一ならず。定論を得難し。然し今之を経旨に原づくに、三陽病の如きは、太陽よりして少陽、而して陽明へ、陽明は復た伝はる所無し。又太陽の直に陽明に伝はる者有り。至陽變じて陰と為れば、則ち太陽が太陰に變ずる者有り。太陽が少陰に變ずる者有り。少陽が太陰或いは少陰或いは厥陰に變ずる者有り。三陰病の如きは、太陰の実が、變じて少陰の虚と為る。少陰自ら直中すること有り。少陰の寒極まつて、厥陰の燥熱と為る。至陰陽に變ずれば、則ち太陰變じて

陽明と為る者有り。少陰が諸陽証に変ずる者有り。三陰將に愈えんとする如きは、必ず須く寒去つて陽旺ずべし。此伝変の略なり。其の委曲の如きは、次卷之を悉くすなり。前輩の伝変諸説を詳にするに、唯王履のみ稍其の要を得る。然し言を立てるに猶ほ病有るを免れざるごとし。他は『内経』を湊合し、或いは再伝の義を論じ、或いは手に伝はり足に伝はらざるの説を立て、或いは循経越経等の目を分け、或いは陰証伝変せざるの説を為す。皆現に仲景の旨と背馳するなり。方氏の三綱伝変の説の如きに至りては、則ち後人の眼目を印定し、其の害最も甚だし。夫れ病表よりして裏、裏よりして表、実よりして虚、虚よりして実、熱よりして寒、寒よりして熱なるも、壊敗の如きも有り、兼挾の如きも有り。千態万状、端倪すべからず。然し其の情機は、則ち実は三陽三陰の範囲の外に出づること能はざるのみ。

述太陽病

太陽病は表熱証 是なり。蓋し邪の初めて感ずるや、必ず先ず表を犯せば、則ち正氣暢びず。併あつまつて熱と為る。山田正珍は提綱を注して曰く、「頭項 強痛とは、頭痛 項強を謂ふ。瓜帯散の條に云ふ、「病 桂枝の証の如くには、頭痛まず項 強ばらず」と。以て徴すべし。此の條は中風 傷寒を統論す。故に啻「脈浮」と云ひて、緊と緩とを分かたざるなり。惡寒は亦 惡風を兼ねて言ふ。惡風は軽く、惡寒は重し。輕きを捨て重きを取る。謂ふ所の大を挙げて小 從ふ者なり。其の發熱を言はざるは、或いは已に發熱し或いは未だ發熱せざるの異 有るを以てなり」と。此の説 是と為す。此の病に大きく端 二有り。一は則ち其の人 腠理 素疎なる者、倘し邪客を被り、其の表愈々開き、邪 内に迫らざれば、徒らに肌肉に泛漫す。故に衛 特り傷を受く。「衛氣、營氣と和諧せず」、及び「營弱 衛強」等の語を觀れば、則ち中風の邪は、營分

に著かざること明らかなり。是 表虚に属す。虚とは、疎洩の義なり。虚乏の虚に非ず。謂ふ所の名づけて中風と為す者なり。治するに桂枝湯を以て、営衛を調和して、汗して之を解す。尤怡『医学読書記』に曰く、「傷寒 発熱する者は、陽氣 鬱せられて伸びざるなり。中風 発熱する者は、陽氣 引かれて外に浮くなり。鬱する者は必ず之を發す。浮く者は徒らに解散せざるのみ。此 桂枝湯の、陰陽を兼ねて合散に通ずる劑と為す所以なり。一は則ち其の人 腠理素 緻こまかき者、邪正 相搏ち、更に緊閉を致し、遂に骨節に迫る。故に営衛俱に傷る。営衛俱に病み、骨節 煩疼すの條を觀れば、則ち傷寒の邪は、亦 衛分をも傷ること明らかなり。是 表実に属す。実は、緊閉の義なり。結実の実に非ず。謂ふ所の名づけて傷寒と為す者なり。尤氏 曰く、「無汗を言はざるは、脈 緊なるを以て之を該ぬるなり」と。治するに麻黄湯を以て、鬱陽を發洩して、汗して之を解す。麻黄は汗藥中の最烈なる者と為す。『金匱』 苓甘五味加姜辛半杏湯の條に曰く、「麻黄は其の陽を發す」と。蓋し發陽の二字は、實に其の功用を尽せり。李時珍の肺經の火鬱を發散するの説を待たざるなり。其の桂枝を得て、發表 更に銳きは、猶ほ大黃の芒消に於けるごときのみ。『金匱』に又 曰く、「其の人 形 腫るる者は、杏人を加へ之を主る。其の証 応に麻黄を内るるべきも、其の人 遂に痺するを以て、故に之を内れず」と。此に拠つて、杏人と麻黄と、唯 緊慢の別 有つて、其の鬱を開くは則ち稍均し。特に喘を治すると為して用ゐるのみならざるなり。且つ此の方の妙は、固より単捷なるに在り。姜 棗 等

の品を用ゐざる所以なり。柯氏の説は密なりと雖も、大青龍に至れば通ぜず。此其の分なり。此の二証を詳にするに、朱氏成氏は風寒營衛相配の説を主とす。爾來諸家、復た異議すること無し。柯氏に至る迄、辨駁殆ど尽く。而して張志聡実^ニ其の端を闡く。説は『集注』凡例、及び『侶山堂類辨』に見る。惜しむらくは語るに未だ詳ならず。尤氏曰く、「邪氣の来るや、皮毛より肌肉に入るは、中風傷寒を論ぜず。未だ衛に及ばざる者有り。其の甚だしき者は、乃ち並びに營を傷るのみ」と。郭白雲謂ふ所の衛を涉り營に中る者、是なり。亦明確と爲す。今攷ふるに郭氏猶ほ風寒を分かつ。然して其の言頗る精し。仍ほ左に拈^つむ。曰く、「問て曰く、太陽一經に、何ぞ其の或いは汗有り、或いは汗無きことあらん。雍曰く、營衛の氣を繋ぐなり。營は脈中を行き、衛は脈外を行く。亦内外に和諧するを以て、而る後に行くべきなり。風邪の氣、中ること浅ければ則ち衛に中る。衛に中れば則ち衛強く、衛強ければ營と相属さず。其の慄悍の氣は、空隙に随つて外に出づ。則ち汗と爲る。故に汗有る者は、衛氣が毛孔に遇つて出づる者なり。寒邪は中ること深ければ、則ち衛を涉り營に中る。一氣俱に病を受け、一強一弱の証無し。寒邪と營衛、相結びて行かざれば、則ち衛氣自づから出づること無し。必ず藥を用ゐて其の汗を發す。然る後に邪去つて營衛復た通ず。故に一經と雖も汗有ると汗無しとの二証有り。亦桂枝の解表と麻黄の發汗の治法同じからざるなり」と。○桂麻の二湯は、其の証一ならず。今僅に大較を挙げ。後の柴胡承氣等の類も、皆

此に准ず。なかにずく就中輕重に、更に等差有り。表虚にて日を経て愈ゑず、以て邪鬱を致す者有り。表虚重きこと一等にて、血氣俱に乏しき者有り。表虚重きこと一等にて、邪筋脈に著く者有り。表実輕きこと一等にて、邪筋脈に著く者有り。表実重きこと一等にて、熱勢更に甚だしき者有り。大抵は其の人の強弱に随い異を為す。今左に具論す。仲景既に風寒を以て表の虚実の目と為す。而して更に表虚に風寒を冒すること有り。表実に中風を冒すること有り。蓋し是互文として意を見る。人をして邪氣を實に講かまはざらしむ在り。故に今区分する所、一に其の証に就いて、虚実を以て等と為し、冒頭の義に至る。則ち卷末答問中に之を詳にす。○方氏は桂麻青龍の三証を以て、太陽の三綱と為す。諸家多く其の誤ちに沿ふ。特り柯氏は極めて之を排斥し、更に明辨有り。今之を摘出し、以て攷に備ふ。曰く、「按ずるに、許叔微云ふ、「桂枝は中風を治し、麻黄は傷寒を治し、大青龍は中風に寒脈を見ると、傷寒に風脈を見るを治す。三者は鼎立する如し」と。此は方氏の三大綱に由来する所にして、大青龍の証治は、此により世に明らかならず。仲景の表を治するは、只麻桂の二法に在り。麻黄は表実を治し、桂枝は表虚を治す。方治には虚実上に在る分がちにして、風寒上に在る分がちならざるを知らざるなり。蓋し風寒の二証には、俱に虚実有り、俱に淺深有り、俱に營衛有り。大法は又虚実上に在る淺深を分かつ。並に風寒上に營衛を分かたざるなり。夫れ汗有るを表虚と為して、桂枝湯を立て、汗有るの風寒を治す。而して更に桂を加へ、桂を去り、

芍を加へ、及び附子、人參、厚朴、杏仁、茯苓、白朮、大黃、龍骨、牡蛎等の剤を加ふること有り。皆是桂枝湯の変局なり。表虚中に更に内虚、内実、浅深の同じからざること有るに因つて、故に加減法も亦種々一ならざるのみ。汗無きを以て表実と為し、而して麻黄湯を立て、汗無きの風寒を治す。然して表実中に亦夾寒、夾暑、内寒、内熱の同じからざること有り。故に麻黄を以て主と為し、而して加減する者は、葛根湯、大小青龙、麻黄附子细辛、甘草、麻黄、杏仁、甘草石膏、麻黄、連翹、赤豆等の剤の若きは、皆麻黄湯の変局なり。表実中に亦各内外寒熱、浅深の殊なること有るに因つてなり。葛根湯は、肌肉の津液不足するに因つて葛根を加へ、大青龙は、内熱、煩躁するに因つて石膏を加へ、小青龙は、乾嘔して欬するを以て半夏、細辛、乾姜を加へ、麻黄附子细辛の二方は、脈沈なるを以て附子を加へ、連翹、赤豆、梓皮の若きは、湿熱、發黄するにして加ふ。諸剤は皆表実なるに因つて、麻黄湯、加減に従る。何ぞ独り大青龙を推して鼎立と為すことを得んや。蓋し中風、傷寒は、各浅深有り。或いは人の強弱に因つて異なり。地の高下にして異なり。時の和を乖るるにして異なる」と。以上柯説なり。攷ふるに『千金翼方』に曰く、「方の大意を尋ぬるに、三種に過ぎず。一は則ち桂枝、二は則ち麻黄、三は則ち青龙、此之の三方なり。凡そ傷寒を療ずるに、之を出でざるなり」と。然らば則ち三綱の説は、孫氏より其の備を作す。而して方氏の如きは実は朱氏、成氏の言に本づく。今柯氏は咎を許氏に帰す。之を検せざること甚だしきかな。又按ずるに大青龙條、『外台』

引く所の、中風に傷寒の脈を見る者は之を服すべしとは、恐らく王氏が章を断ち義を取る。唐時の旧本に此の文有るには非るなり。

表虚にて日を経て愈えず、以て邪鬱を致す者有り。桂枝麻黄各半湯、桂枝二麻黄一湯、桂枝二越婢一湯の証、是なり。其の証の軽重は均しからず。故に三方の設け有り。蓋し桂枝証にて、汗を失ふこと数日にて、邪は肌肉に鬱す。故に熱多く寒少なし。其の滯稍深し。故に瘧状の如く、発作に時有り。但し本是表虚なり。故に麻葛の発を嫌ふこと有り。今則ち鬱甚だしければ、桂枝の力、及ぶこと能はざる者有り。是を以て麻桂二方を酌量す。日に二三発すと言ふ者は、其の邪稍重し。日に再び発すと言ふ者は、其の邪稍軽し。発する数を言はざる者は、其の邪尤も重し。且つ桂枝二越婢一は、其の力緊なり。桂二麻一は、其の力慢なり。桂麻各半は、緊慢の間に在り。此の三條は、其の意互発す。各半湯は、其の証特り審なり。他の二條は、則ち文甚だ略す。蓋し各半湯の條の、八九日なる者は、約略して之を言ふの辞にして、二條亦之を冒す。「発熱惡寒」「熱多く寒少なし」は、三証とも疊言す。而して麻一湯は、「寒熱」を省き、但「瘧状の如し」と言ひ、越婢一湯は、「寒熱」を言ひて、「瘧状の如し」を省く。「其の人嘔さず、清便自ら可」は、亦二條に蘊る所なり。「瘧状の如し」は、少陽の証に疑はる。故に別つに「嘔さず」を以てす。「熱多」ければ陽明の証に疑はる。故に別つに「清便自ら可」を以てす。「自から可ならんと欲す」の欲字は、当に『玉函』に

従つて芟去するを是と為すべし。一日に二三度発すると、脈微緩なる者とは、文勢一串す。故に愈ゆる候と為す似し。然し麻一湯に照らし、実は是表鬱の致す所なり。宜しく「面色反つて熱色有る者」に接して看るべし。攷ふるに面赤の証は、一陽の併病、「面色縁縁として正赤」、及び陽明の病の「面合赤色」に参じて、当に是表鬱に裏熱を兼ねる者然らしむるべし。今但表鬱にして之有り。故に一「反」字を下す。「小しも汗出づることを得ざる」者とは、病を得て以来、未だ曾て小々も汗を発せざるを言ふ。故に此表鬱を致す。且つ身癢するなり。「更に汗を發し更に吐し更に下し」の、三つの「更」字は、当に今は「反」字と同義なり。桂二麻一湯の証は、嘗て大汗を経て、亦是治を失ひ、然し幸ひにも亡陽の変無く、亦陽明に転属もせず、猶ほ表分に纏滞し、累日解せず。但其の既に汗するを以て、之を二証に比すれば、則ち其の鬱は軽しと為す。龐氏は「脈洪大」の下に、「証候不改」の四字を補ふ。『玉函』の「但」字と、其の義相発す。桂二越婢一湯の証は、其の熱最も重し。猶ほ麻黄の大青龍有ることく、石膏の力を仮て、以て鬱陽を越散す。脈微弱なる者は汗を發すべからずとは、蓋し此の方の軽用すべからざるの戒めならん。各半湯の「脈微にして惡寒す」、大青龍の「脈微弱」と同例なり。乃ち倒筆法に係る。但此の條の文甚だ約む。故に諸家察するに及ばず。特り中西惟忠の注、稍之を近しと為す。惜しむらくは猶ほ明暢を欠く。之を要するに此の三條は、従つて未だ確解を見ず。方氏の如きは以て兩傷の輕証と為す。尤も錯謬に

属す。唯『内台方議』各半湯下に曰く、「桂枝湯は表虚を治し、麻黄湯は表実を治す。二者の均しく解表と曰くは、霄壤の異なり。今此の二方を、合して之を用ゆれば、乃ち其の表虚さず実せざる者を解すなり。八九日已まず、反つて瘧状の如き者は、乃ち先ず表を發して尽くさず、微かに経に滞つて、出づることを得ず。故に一日に二三度發するなり」と。斯の説殊に妥なり。然し猶ほ未だ精審を為さず。今経を以て経を積するは、敢へて異を好むに非ざるなり。唐不巖は三方を対論して云ふ、「総じて是一つ太陽の病なりとも、病に時日に与り、淺と深と有り、脈に形証に与り、応ずると否と有り。權衡劑量、銖黍を失せず。此に於いて古人の立方の妙を見る」と。此の言然りと為す。

表虚 重きこと一等、血氣俱に乏しき者 有り。何ぞや。傷寒 脈浮、自汗 出で、小便 数、心煩 微惡寒し、脚 攣急す、是なり。此の証は啻に表 疎ならず、其の人陽津 素 少なし。故に桂枝本湯と雖も、猶ほ其の当を過ぐ。蓋し少陰 直中と、稍 相近似す。而し彼の寒盛に比せず。故に誤汗を経ると雖も、僅に甘 姜を須ゆ。陽 回して後に、或いは胃燥に變じ、若し其れを重ねて誤治すれば、則ち變じて純陰の証と為るなり。此の條の本証を、次條にて擬するに桂枝に桂を増し附子を加ふるを以てする者は、殊に疑ひ無しとせず。何を以て之を言ふか。夫れ既に附子の宜しき所なれば、則ち誤汗して便ち厥する際には、ただ徑ちに四逆を与へざるを得ず。而し僅に単味 小方を用ゆ。竊に恐る万よす其の理 無きを。蓋し「自汗 出で、小便 数、心煩す」

等の証は、「傷寒二三日、心中悸して煩す」と稍其の情同じ。而して従前の虚乏邪を為すに凌虐せる者に係れば、則ち亦是小建中主る所なり。柯氏は未だ発汗せざる前を、擬するに芍薬甘草湯を以てし。尤氏は此を桂枝証と謂ふ。然し陰虚して裏熱す。当に甘辛を以て表を攻め、而して甘寒を以て裏を顧るべし。乃ち反つて桂枝湯を与へ、表を治して裏を遺さば、宜しく其の之を得て便ち厥すべし。二氏の説は、亦見る所有るなり。尤氏は次條に於いて曰く、「中間の語意に、殊に倫次無し。此豈後人の文なやんや」と。舒氏亦曰く、「此の條は許多益無き語を説出す。何ぞ之を用ゐる所ぞ。吾曲げて之を解と為すこと能はざるなり」と。並に柯氏の刪るに本づくなり。○趙氏は本條の薬を用ゐる意を論じて曰く、「以上の薬を用ゐる次第は、先熱後寒、先補後瀉の、逆に似て実は順なり。仲景の妙に非ざれば、孰くんぞ能く是に至らんや。後の学者、此を以て法と為し、推広して変に応ぜず」と。張卿子曰く、「此の條は、傷寒に証に随つて薬を用ゐるは、圓を転ずる如きの法と見るなり」と。先教論亦曰く、「『金匱』欬嗽に、小青龍下し已つての後、証を叙す五変は、変に應じて加減す。其の意は殆ど此の條と同じ。人に示すに變に通ずる法を以てするなり」と。趙の言は、汪氏『選録』に出づ。頗る辨覈と為すも、文繁にして具録せず。桂麻各半湯の「脈微にして惡寒す」、桂枝二越婢一湯の「脈微弱」、大青龙湯の「脈微弱、汗出で惡風す」は、蓋し此類証ならん。表虚重き」と一にて、邪筋脈に著く者とは、何ぞや。桂枝加葛根湯の証、是なり。其の証

一つは桂枝と同じ。啻項背強ばること凡几を異と為す。項背は大筋の束ぬる所なり。其の凡几然たるは、即ち是邪筋脈に著く微なり。葛根を加ふる所以なり。提綱に既に「頭項強痛」を言へば、則ち桂枝の証にも、本項強ばること有り。然し未だ背に及ばず。且つ凡几然たらざるなり。「凡几」とは、王氏は「赤烏凡几」に抛り解を為す。近来焦循『毛詩補疏』を撰し、亦其の説有り。然し短羽の鳥と作し釈するは、拘強の義に於いて、固より褫著と為す。二家の辨ずる所は、今敢へて従はず。「反つて汗出づ」の「反」字は、葛根湯の証に対して言ふ。蓋し邪筋脈に著くは、稍緊閉に属す。宜しく汗無きを以て正と為すべし。今表疎なる人、而して邪筋脈に著く。故に「汗出づ」を一「反」字に下す。煮法の「去上沫」の三字は宜しく削るべし。是後人が方中に麻黄有るに因つて、誤り添ふ者なり。陶隱居は麻黄の其の沫を掠去せざれば、人をして煩せしむと称す。又葛根芩連湯には、此の字面無し。以て互いに徴すべし。○上節の証は、此の節の証と、俱に表虚重きこと一等と為す。但彼は則ち病虚に近く、此は則ち病実に近し。又此の証は、宜しく各半湯等の証の前に次すべし。今此に列するは、人をして葛根湯の証と、相對して看せしむるに在るのみ。

表実 軽きこと一等にて、邪筋脈に著く者有り。何ぞや。葛根湯の証、是なり。蓋し其の人表氣稍実すれば、必ず麻黄の発を須ゆ。然し邪未だ骨節に迫らず、而して猶ほ筋脈に著く。是病桂麻二証の間に在り。故に二湯を酌量し、以て之を治と為すなり。葛根については、

柯氏の説が極めて当たる。然し以て裏を和する功有りと為すは、殆ど然らず。蓋し發表中の涼薬と為さん。故に能く津液を生じて、筋脈を舒ぶるなり。『本草図経』に云ふ、「張仲景の傷寒を治するに、葛根及び加半夏、葛根黄芩黄连湯有り。其の大熱を主り、肌を解し、腠理を開くを以ての故なり」と。

表実 重きこと一等にて、熱勢 加甚なる者有り。何ぞや。大青龍湯の証、是なり。其の候一つに麻黄の証と相同じ。喘を言はざるは、蓋し省文ならん。但し煩躁は彼に無き所と為す。

徐大椿曰く、「凡そ証を辨ずるに必ず独異なる処に著眼すべし」と。是なり。山田正珍曰く、「汗出でず」とは、麻黄を服すと雖も、而し汗出でざるを言ふ。汗無しと別有り」と。

攷を存す。此**表熱極めて鬱し、内気は宣達すること能はず。則ち麻黄湯の力の及ぶこと能はず。故に石膏の涼を加へ、藉りて以て之を発越す。**此の証は惡寒して渴無し。裏に熱有る者に非ざるを知るべし。石膏は専ら裏を治すると雖も、尙し麻黄と配用すれば、則ち相藉りて以て表分を走り、而して其の壅鬱を散す。越婢湯の如きも、亦然りと為す。此の湯の証を要すれば、太陽中に於いて、病最も重しと為す。故に用ゐる麻黄を倍にせざるを得ず。唯其の熱極めて鬱すること甚だしければ、単に麻桂を用ゆれば、必ず兩陽相格の虞れ有り。故に佐くるに石膏を以てすれば、則ち鬱開いて熱潰多、汗を作して解す。蓋し龍升つて雨降るの妙は、温涼相併処するに在り。柯氏解する所は、適かに前注に勝る。然し猶ほ未だ尽く

すと為さず。尤氏『医学読書記』に曰く、「大青龍は、風寒 外壅して、熱経に閉する者を治す。夫れ経に熱鬱して、石膏を用ゐざれば、汗熱と為り隔つ。寧ろ能く之を發する者有りや」と。此の説 王文祿に本づく。而して殊に協当すと為す。又 吳人駒 云ふ、「表邪を發散するに皆 石膏を以て同用する者は、蓋し石膏 其の性寒、寒は能く熱に勝ち、其の味薄く、薄ければ能く表を走る。芩連の輩の、性寒 味苦にして厚く、升達すること能はざる若くには非ざるなり」と。此の説亦 得る。○ 桉ずるに『元和紀用経』、陽粉散に、謂ふ病 当に汗を發すべし。而して汗 止まず。止まざれば則ち陽亡ぶ。当に之を温撲すべし。麻黄 藁本 白芷 米粉を用ゐ、之を末にし、以て粉すれば身の汗 止む。疑ふ是 龐氏 諸家の本づく所ならんと。又『三国志』華佗伝注に、称するに「婦人有り。長く病んで年を経て、世に寒熱注病と謂ふ者に、佗 寒水を用ゐ汲灌し、百灌に満ちて、佗 乃ち火を然やし牀を温め厚覆せしむ。良久くして汗 洽出す。粉を著けて汗 燥き便ち愈ゆ」と。然らば則ち漢時の神医は、多く粉法を用ゆべし。而し未だ両夫子の方の果して是 相同じか否かを知らず。○「復た服して汗 多き者」は、表陽 虚す。故に悪風す。裏陽 虚す。故に煩躁し眠ることを得ず。汪氏 以て邪熱 未だ除かずと為す。恐らくは然らず。如し脈 浮緩、身 疼まず但 重き者は、其の機 異なりて其の情 同じ者なり。蓋し邪 骨節に迫る、故に脈 緊身 疼痛す。今 邪 迫らず、故に脈 緩身 疼まず。然し身 重くして兼ねて前條 諸候を見れば、則ち是 均しく表鬱に属すことを知る。但し

脈緩にて身重ければ、少陰の遲脈身重に疑はる。故に徴するに乍ち軽き時有るを以て、更に少陰の証無き者と云ふ。而して精心体察し、輕試すべからざるの戒を示す。又麻黄湯の証、亦必ず邪緊迫せず、此と同機なる者有り。推して知るべきなり。

以上太陽の病の要領なり。此の他、病を得るの初めに、挟む所 有る者、停飲相触し、治するに驅利を兼ねる者有り。喘家、及び小青龍湯の証の類の如きなり。素稟虚弱にして、徑ちに汗すべからざる者有り。小建中湯、及び尺中遲、咽喉乾燥等の諸証の類の如きなり。又風湿相搏つ者有り。並に後卷中に類列す。其の伝変に至つては、則ち裏病を受くるに、皆表よりせざるは無し。故に其の類一ならず。或いは少陽に伝はり、或いは直に陽明に伝はり、或いは直に太陰に變じ、或いは直に少陰に變ず。以上伝變は、皆明文有り。蓋し本病變じて陰と為る者は、必ず多くは桂枝の証よりす。其の理何ぞや。既に是表疎なれば、之を表実の者に比すれば、陽氣稍弱し。故に其の重きこと一等なる者は、或いは須く温養すべし。則ち其の陰為るに變じ易きこと、明らかなり。但少陰直中は、太陽を経る者に非ず。而して厥陰は、則ち病の極まる所なり。蓋し此より遽かに変らざるなり。並に是經文を玩ふて自づから知れる。更に医薬誤投し、及び宿病相触し、而して變じて諸証と為る者有り。其の緒甚は繁なり。今亦後卷に類列して云ふ。方氏以来、太陽三綱の説を立て、諸變証を以て、其の来路を原として、桂麻青龍三等に分隸す。然し仲景の意は、蓋し是の若きを其れ幾

しとせず。且つ姑く一証を挙げ之を言ふ。太陽中篇、真武湯の証の如きは、或いは桂枝の証を、之を汗して水流離する如きより、或いは桂枝の証に、麻黄を誤用するより、或いは麻黄の証に、青龍を誤用するより。諸般過汗して、皆能く此に變ずるに、一定なるもの有り。方氏諸輩の如く、専ら偏見を持ち、以て聖法を縛縛するは、其の害殆ど尠なしと為さず。学者宜しく眩惑せらるる勿れ。

述少陽病

少陽篇は陽明の後に在り。戴氏『証治要訣』には、嘗て疑ふの詞有り。而し未だ覈あきらかならず。喻氏則ち曰く、「陽明の去路、必ず少陽に趣く」と。最も牽強に属す。愚亦嘗て篇次を後人の改と為して疑ふ。今を以て之を觀れば、殊に然らざるを覺る。蓋し少陽病は、仲景が以て半表半裏の目と為し、而して其の証の治を与ふ。既に太陽篇を拈みて、織悉し遺すこと無し。唯其の名は、則ち之を『内經』に取る。是を以て更に其の概を摘む。猶ほ之を陽明の後に列するは、殆ど羊を存すの意云ふのみ。今此に述べるに、之を陽明に先んずるは、人をして伝變の叙を知り易くせしめるに在るのみ。

少陽の病は、半表半裏の熱証、是なり。半表半裏は、即ち表裏の分界なり。其の称は蓋し成氏より昉あきらかなり。曰く、「病表に在る者有り、裏に在る者有り、表裏の間に在る者有り。此の邪氣が表裏の間に在るを、半表半裏の証と謂ふ」と。方氏之を演ばして曰く、「少陽は、邪肌肉を過ぎて又進み、則ち又軀殻の内、藏府の外に到る。謂ふ所の半表半裏なり。「半」とは、「不」なり。表ならず裏ならざる者、隙地なり」と。柯氏意亦同じ。並に是なり。程氏は半表と半裏とを分かちて説を為す。恐らくは之鑿ちを失す。○太陽下篇の第二十一條に曰く、「必ず表有り復た裏有るなり」と。又曰く、「此半ば裏に在り半ば外に在ると為すなり」と。蓋し謂ふ所の表と外とは、俱に少陽を指す。太陽の謂に非ず。故に小柴胡湯を与ふ。謂ふ所の裏は、即ち陽明を言ふ。故に曰く「大便鞭し」と。曰く「設し了たらざる者は、尿を得れば解す」と。其の表ならず裏ならずと、自ら其の義異なるを知るべし。柴胡加芒消湯の條、陽明中風の條、「外」字は並に少陽を言ふ。亦互いに証すべし。前注は彼の條に於いて、敢へて剖析せず。仍ほ此に附辨す。其の来路は必ず太陽よりして、中風傷寒を問わず。蓋し其の病、邪氣物に藉りずして結す。但其の人陽盛ん。故に邪正相持し、熱脇下に留まる。半表半裏の地は、蓋し専ら脇下に係り、而して連なつて胸脇に及ぶ。曰く「血弱く氣尽き、腠理開き、邪氣因つて入り、正氣と相搏ち、脇下に結す」と。曰く、「胸脇苦満」と。曰く、「脇下鞭満」と。曰く、「胸満脇痛」の類は、以て見るべきなり。且つ成氏曰く、「邪氣は

表より裏に伝はるに、必ず先ず胸膈より、已次心脇を経て胃に入る。然らば則ち邪の表を離れ未だ胃に入らざる者は、必ず胸脇に客すること明らかなり」と。其の証既に表候無く、亦裏実にも非ず。故に口苦咽乾目眩し、往来寒熱し、正気邪の為に斂束すれば寒たり。邪氣と正とが相搏てば熱し、邪氣遂に正氣を服すこと能はず。正氣も亦邪氣を逐ふこと能はず。更に互いに分争す。此往来寒熱の機なり。胸脇苦満し、苦満とは、物有つて填満せる如くにして、苦惱忍び難きを言ふ。此病人自覚の情なり。外測し得る所に非ず。『金匱』に、「苦喘」、「苦重」、「苦痛」、「苦冒」等の文有り。其の義相同じ。其の「胸満」と云ひ、「胸脇満」と云ふは、俱に省文なり。或いは謂ふ、「満」は「懣」に通ずと。果して然らば則ち胸懣は心煩と何ぞ別かたん。且つ脇にして懣もたえると云ふは、意義通ぜず。其の説従ひ難し。嘿嘿と飲食を欲せず、軒邨曰く、「嘿嘿とは、飲食を欲せざる貌なり。猶ほ鬱鬱微煩の例なり。厥陰篇に亦云ふ、「嘿嘿として食することを欲せず」と。心煩煩は、熱悶なり。詳しくは兼変熱鬱中に開く。喜嘔等に過ぎず。其の脈も亦数ならず大ならずして弦なり。本篇第三條に云ふ、「傷寒、脈弦細」と。謂ふ所の細とは、緊細の細なり。微細の細に非ず。『金匱』に曰く、「瘧脈は自ら弦なり」と。亦相互に発す。又陶華『六書』に、浮中沈の三法を以て、邪の浅深を候ふ法有り。中を以て少陽に属す。皆邪が隙地に客する驗と為す。是を以て汗吐下、俱に禁ずる所在り。而し白虎の寒は、薬力過重なり。其れ唯小柴胡湯を以て之を清解する

を、実に正対と為すなり。此の湯の意は、『明理論』積する所稍当たる。今更に之を詳にす。柴胡の物為る、固より芩連の寒に非ず。亦麻葛の発にも非ず。然して其の性微寒にして、能く壅鬱を豁く。故に少陽を清解するに於いて、適然相応す。但其の力稍緩し。故に黄芩を以て佐く。其の喜嘔するは、是派証の似し。然し胃氣安からざれば、則ち柴芩其の力を檀ほし半夏にし得ず。是半夏生姜を用ゐる所以なり。人參は動もすれば輒ち邪を住とどむ。故に前輩或いは去つて用ゐず。或いは曰く、「既に柴芩と相配し、且つ滓を去つて再煎すれば、則ち性味混和し、啻能く胃を助く」と。而して敢へて攔補せず。即ち七味相藉り、以て少陽の正方為り。此の言理に合ふ似し。徐氏曰く、「半夏生姜を兼ねるは、飲有つて嘔逆すればなり。參甘棗を兼ねて、其の陰陽を調ふ。小柴胡の和解の功を檀にし得るは、実に此に頼るなり」と。斯の説亦妥なり。又本湯は、成氏以来、称するに和解と為す。然し経中に和と曰ひ解と曰ひ、指す所一ならず。且つ此の方を謂ふに和解と為す者無し。此蓋し清剤中の和する者と為す。若し専ら和解と称すれば、恐らく允当せず。但相沿つて既に久しければ、得て改易し難し。錢氏曰く、「後人の補中益氣湯及び逍遙散の類と雖も、其の清陽を外発し、鬱結を開解するの義は、亦皆小柴胡の旨を離れざるなり」と。信に然り。又『金鑑』に、世俗此の方を濫用するの弊を辨ず。楊士瀛に嘗て其の説有り。既に拙著『広要』中に拈む。宜しく參ずべし。邪毒増々劇しく、耳聾目赤き者は、少陽中風と為す。少陽中風は、注家概ね

謂ひて太陽中風の伝来せる者と為す。然し中風の名は、經に定例無し。且つ病両耳聞く所無く、目赤きに至れば、則ち明らかには表既に解し、而して少陽の邪増々劇しく、熱氣上熏せる者にして、之を柴胡正証に較ぶれば、其の病更に一層を加ふ。近今此の証甚だ多し。必ず黄連解毒を併用して、方を合轍と為すべし。蓋し風を以て陽と為す。故に又以て熱盛の称と為す。其の兼ねて表未だ解せざる者の如きは、其の等三有り。病勢加進して、裏実を兼ねるにも、三等有り。具列するに左の如し。

兼ねて表未だ解せざる者に、其の等三有るとは、何ぞや。其の一は、小柴胡條に、謂ふ所の「或いは渴せず、身に微熱有り」、及に「傷寒四五日、身熱惡風す」、是なり。此表証既に軽く、將に少陽を併すべし。故に別に汗藥を須めざるなり。其の一は、柴胡桂枝湯の証、是なり。此太少二病の、軽重相均し。故に治するに双解を取る。柯氏の表証微なりと謂ふは、是なり。蓋し微嘔なれば、少陽の証も亦微なり。其の一は、柴胡桂枝乾姜湯の証、是なり。此嘗て錯治を経るを以て、邪氣未だ解せずして、更に津液足らざる者なり。互いに飲邪併結中を見、当に参すべし。

病勢加進して、裏実を兼ねる者に、亦三等有るとは、何ぞや。其の一は、大柴胡湯の証、是なり。此小柴胡証にして、邪熱壅実し、既に陽明を併す。故に清解中に、兼ねて以て裏を疎にす。此の湯の証は、最も多く之有り。必ずしも下後に拘らず。軒熙曰く、「過経」は、

猶ほ「過表」と謂ふごとし」と。攻を存す。「心下急」の「急」字には明解無し。柯氏曰く、「急は、満なり」と。猶ほ了たらず。「急」を攻ふるに、是「緩」の対なり。蓋し物有つて窘迫の勢を謂ふ。拘急の謂に非ず。李氏『脾胃論』に曰く、「裏急なる者は、腹中寛快ならず、是なり」と。蓋し謂ふ所の寛快ならずとは、以て裏急を積すれば、則ち未だ当たると為さず。而して心下急に於いて、則ち其の義甚だ褻し。桃核承氣條の「少腹急結」の「急」も、亦同義なり。此の方の芍薬は、蓋し之を通壅に取る。宜しく後の桂枝加芍薬湯を参ずべし。○陶氏『本草』序例に曰く、「枳実若干枚とは穰を去り畢つて、一分を以て二枚に準ず。此に拠れば、此の方の枳実四枚は、今の一分七釐七豪六絲に準ず。他薬に比して殊に輕し。大小承氣、枳実梔子湯は、並に幾枚と称す。而し其の分量を挙げる者は、麻人丸は則ち半斤、四逆散は則ち各十分なり。仍ほ知る仲景の枳実を用ゐるに、本々甚だしくは輕からず。陶説疑ふべし。○此の方再煎す。其の義晰き難し。攻を俟つ。其の一は、柴胡加芒消湯の証、是なり。此其の壅実稍前証より輕くして、丸薬の故を以て、裏邪膠固にて、殆ど壞病に属す。此の條読み難し。然し程注頗る明覈なり。但し此の実は之を攻後に得て云々は、殊に含混に似て蓋し此の証本々、是少陽陽明の併病を、下を用ゐて法を失するを以て、徒に腸胃を擾して、邪実と依然具存する者なり。程又曰く、「去る者は留る所に非ず。留る者は去る所に非ず。故に溏する者は自ら溏し、結する者は自ら結す。而して結する者は既に結し、溏する者は益々溏

す」と。此の説反つて直切を覚ゆ。又此の証既に是裏を兼ね、乃ち宜しく蚤はやく大柴胡双解の法に従ふべき似し。而して先ず小柴胡を用ゐる者は、蓋し丸薬を以て誤下し、続いて快薬を以てするを欲せず、仍ほ姑く清和し、以て胃安んずるを待つなり。且つ其れ下利す。故に壅実は大柴胡の証より軽くして、燥結則ち甚だしきこと有り。是を以て大黃の破実を藉りずして、殊に芒消の軟堅を取る。按ずるに此の方を以て大柴胡加芒消と為すは、原もと黃氏に出づ。而して『宗印』にも亦其の説有り。○軒熙曰く、「此の條今調胃の條に次ぐ。其の十三日と云ふ者は、亦是約略の辞なり」と。或いは以て十余日の譌りと為す者とす。殆ど未だ是ならざるなり。其の一は、柴胡加龍骨牡蛎湯の証、是なり。此誤下を以て、邪裏に陥り、加へて諸証錯雜するを以て、蓋し壞の甚だしき者なり。成氏曰く、「傷寒八九日には、邪氣已に熱と成つて、復た陽經に伝はる時に、之を下して其の裏虚して、熱も除かず。胸痛して煩する者は、陽熱胸中に客するなり。驚するは、心熱を悪みて神守らざるなり。小便利せざるは、裏虚し津液行らざるなり。譏語するは、胃熱なり。一身尽く重く、転側すべからざるは、陽氣裏に内行し、表に営らざるなり。柴胡湯を与へ、以て胸滿して煩するを除き、龍骨牡蛎鉛丹を加へ、神氣を収斂して驚を鎮め、茯苓を加へ、以て津液を行らし小便を利し、大黃を加へ、以て胃熱を逐つて譏語を止め、桂枝を加へ、以て陽氣を行らして、身重を解く。錯雜の邪、斯に悉く愈ゆるなり」と。尤氏曰く、「傷寒下後に、其の邪併に一处に帰する者

有り。結胸 下利の如きは、是なり。一身に散漫せる者有り。此の條に云ふ諸証の如きは、是なり」と。二説亦精當なる似し。喻氏は以て伏飲素積み、変を為すの最も鉅おほき者と為す。従ひ難し。又此の証の「一身 尽く重し」は、三陽合病の「身重くして以て転側し難し」と、其の機稍均し。○此當に兼變諸証中に入れるべし。然し類に附すべきもの無し。仍ほ斯に列す。

以上少陽病の要領なり。此の他、虚を兼ねる小建中湯の証有り。兼變虚乏中に出づ。其の愈ゆるや、振汗して解する者有り。成氏謂ふ下を経て裏虚し、邪氣出でんと欲すれば、内則ち振振然たり。蓋し辨脈法の「其の人本虚す。是を以て戦を發し云々」に原づくものならん。軒熙曰く、「太陽の病未だ解せず、脈陰陽俱に停なるは、必ず先ず振慄し汗出でて解す」は、諸注皆自愈の候と為す。恐らくは非なり。蓋し振汗は太陽に有る所に非ず。脈陰陽俱停とは、想ふに邪少陽に在る者に係り、其の病は表裏に跨がる。故に脈偏見せず。猶ほ是『金匱』の「脈両に出づるは、積中央に在り」の理なり。倘し柴胡を用ゐて、鬱邪窟を離れば、則ち振汗して解すなり。下文に、汗出づると云ひ、之を下すと云ふは、俱に薬治を指す。要は是三陰愈ゆる候を列挙せる者なり。故に三つの「而解」字を下す」と。此の説未だ当否を知らず。姑く録して攷に備ふ。其の陽明に伝はるや、白虎証と為る者有り。柴胡湯を服し已つて渴する者の條を、徴すべし。承氣の湯と為る者有り。經中に多く之を言

ふ。其の変じて或いは太陰と為り、或いは少陰と為り、或いは厥陰と為る。殆ど一定ならず。変じて三陰と為るは、經に明文無し。然し太陽既に太陰に変ずれば、則ち少陽も亦未だ太陰に変ぜざるべからず。其の少陰に変ずる者は、近世甚だ多し。厥陰の如きは、則ち其の部位、及び寒熱勝復、並に本病と、稍相類似す。乃ち其の変為り。固より其の分なり。蓋し其の表裏を界するは、係る所一ならざるを以て、而し医治を失すれば、多くは此の位に於ける。故に兼挾変壞の証は、少陽最も多し。而して經中に挙げる所は、數章に過ぎず。學者當に括して充つるべきなり。吳有性『瘟疫論』を著すに、疫邪が口鼻より入るの説を主とす。蓋し膜原とは実に少陽の部にして、達原飲、三消飲、地方の宜、或いは今に驗する者有り。然し其の主証を審にするに、猶ほ大柴胡の例を出づること能はず。竊に想ふ吳氏の時に当たつて、邪勢暴厲し、遽に半表半裏を犯す。故に遂に其の説を立てるか。董氏『西塘感証』に、『傷寒心法』を引き、見るに今世甚だ太陽の症少なしと称す。其の書適々吳氏と時世相近し。以て証すべし。世に偶々吳氏の法を墨守し、桂麻を用ゐるを忌み、柴胡を視て余熱の治と為す者有り。故に茲に附識す。

述陽明病

陽明の病は、裏熱実の証、是なり。邪熱胃に陥り、燥屎搏結す。即ち謂ふ所の胃家実なる者なり。胃家実とは、諸病胃に在つて宜しく下すべき証を該ねて称す。但正陽陽明の胃家実とは、専ら大承氣の湯を指すなり。又前注多く陽明經腑の別を立つ。実に經旨を失ふなり。○白虎の証は、胃熱にして実無き者に係る。即ち温病是なり。今自次卷に列す。又中風 中寒は、是胃家実上に於いて分別有るにあらず。則ち亦復びは具論せず。其の来路の如きは、或いは太陽より、或いは少陽よりして、其れ等一ならず。病の輕重も、亦随つて異なり。其の人胃に素熱有つて、邪勢亦盛んにして、相藉りて遽に実する者有り。其の病重しと為す。即ち正陽陽明なり。本篇の大承氣第一條の、語氣を玩へば、曾て誤治を経ずして、邪氣自づと実する者なり。太陽 桂枝の証、発汗過多により、胃液燥を為す者有り。其の病最も輕し。即ち太陽陽明なり。「脈陽微にして汗出づること少なき者」、「脈浮にして朮」、及び麻子人丸の三條、以て徴すべし。『脈經』脾病の証に曰く、「脾約なる者は、其の人 大便堅く、小便利し、而し反つて渴せず」と。成氏は「太陽の病若しくは吐し若しくは下し若しくは汗を發して後、小承氣を与ふ」の條を以て、脾約と為す。恐らく非なり。又「更衣せざること十日、苦しむ所無し」は、脾約と自ら別なり。少陽の病、誤つて汗を發し小便を利するによつて、以て胃燥を為す者有り。其の病頗る輕し。即ち少陽陽明なり。太陽陽明と少陽陽明は、喻氏誤

つて併病と為す。汪氏は方を擬すに、蓋し其の意に本づかん。然し誤治の後に、亦或いは正陽陽明と為るに、太陽の病、誤つて汗下し小便を利するによる者有り、問ふて曰く、何に縁つて陽明の病を得るや」の條の如きは、是なり。太陽の病汗を失するによる者有り。「本太陽初めて病を得るの時、其の汗を發し、汗先ず出でて徹せず」の如きは、是なり。次條相承け、亦汗を失して胃実するを謂ふ。蓋し傷寒發熱し汗無ければ、即ち是表実の証なり。其の嘔して食すこと能はざるは、亦風寒外束の故なり。此の証倘し汗を發して徹せざれば、則ち汗有るに宜しからず。而して反つて汗出でて澀澀然たる者は、邪氣内結し、以て陽明に属すなり。少陽の病誤汗による者有り。少陽篇の、「汗を發すれば則ち讞語す」、是なり。然らば則ち輕証由る所も、亦一端に止まらざるなり。仲景先ず三等に区ぎり、以て輕重を示し、更に以上の諸條を出して、以て其の変を尽くす。学者宜しく密察すべし。其の証為るや。惡寒せず惡熱し、澀澀と汗出で、汗出づるに二端有り。遍身に澀澀たる者は、裏熱蒸迫の故と為す。手足に澀澀たる者は、邪熱内結の徵と為す。巢源、『活人書』には、並に掌心汗湿の説有り。身重く短氣し、腹滿して喘し、潮熱し潮熱は、『明理論』の説く所が、穩貼なる似し。或いは日晡と言はざるは、蓋し省文ならん。讞語し、大便せず、「胃中に燥屎有り」の胃中は、猶ほ腹中と言ふごとし。必ずしも深講せず。經に部位を言ふは、往々此の類なり。且つ尿大腸に在つて、其の燥結下らざるは、実に胃熱遏住せるに由つてなり。王好古は以

て地道通ぜずと為す。火逆胃に至るとは、さか傾なり。脈は実大遲なり。大承氣條に曰く、「脈遲」と。小承氣條に曰く、「脈滑にして疾」と。是兩つ相對待の詞にして、遲脈は実は応に下すべきの正候と為す。『千金方』は、脈の朝夕はや駛きを以て、実癰下すべしと為す。疑ふべし。此胃実の正証なり。大承氣湯之を主る。若し人を識らず、衣を循り牀を摸り、おそ惕れて安からず、微喘し直視する者は、病加劇にして正亦虚す。其の猶ほ前方を用ゐるは、虚を畏れ以て病を養はざるなり。呉又可の補瀉兼施するは、蓋し即ち此の証ならん。且つ此の條本三等に分かつ。軽重異なると雖も、其の胃実為るは則ち一なり。故に大承氣湯を以て之を主る。或いは劇熱迅やかに伝はり、勢ひ危惡に近き者は、則ち急に之を下すの例有り。少陰急に下すの條は、其の来路異なると雖も、其の危劇なること則ち一なり。呉又可謂ふ所の急証急攻なる者は、亦此の類なり。又「急」字は成氏の少陰篇「急に之を温む」の解を參ずれば、其の義明らかなり。○大承氣の諸條に、其れ余義有り。今左に述ぶる。「陽明の病、潮熱し大便鞭き」者の條の、首段は既に潮熱有れば、則ち大便微かに鞭しと雖も、其の熱既に実するを知る。故に大承氣を与ふべし。倘し未だ潮熱せざる者は、恐らく其の熱未だ実せず。大便せざること六七日と雖も、其の燥屎の有るや否やは必ずとし難し。故に小承氣を与へ之を試みるなり。又周氏曰く、「其の後發熱するは、是必ず日晡時に作す。此又未だ尽きざるの邪復び結して鞭し。但既に攻むるの後なれば、結する所多からず。只小承氣湯

にて之を和すれば足るなり」と。錢氏曰く、「其の後又復び發熱する者は、乃ち潮熱の類なり」と。二説は『輯義』と意相合す。○「病人大便せざること五六日、臍を繞りて痛む」の條は、錢氏發作に時有ると解し、日晡潮熱の類と為す。此は柯氏に本づく。蓋し臍を繞つて痛み煩躁の發作時に有るは、猶ほ日晡潮熱の理のごときを言ふ。別に熱氣發作有るに非ざるなり。『金鑑』は程氏に本づき、曰く、「燥屎穢氣、上攻すれば則ち煩燥す。攻めざれば則ち煩躁せず。故に發作時に有るなり」と。亦通ず。○「病人小便利せず、大便乍ち難く乍ち易し」の條は、尤氏曰く、「小便利せざる者は、其の大便必ず溏すべし。而して燥屎有る者は、水液還つて胃に入ると雖も、猶ほ以て之を潤すに足らず。故に大便乍ち難き時有り。而して亦乍ち易き時有るなり」と。此は錢氏と義を異にす。姑く録して攷に備ふ。○「病を得て二三日脈弱」の條は、喻氏の注確かならず。此の條の二つの「雖」字は、其の眼目と為す。蓋し下すべき証は、食すこと能はざるを以て常と為す。然るに「太陽柴胡の証無く、煩躁し心下鞅く、大便せざること、四五日に至」れば、則ち能く食すること之胃和する似きこと有りと雖も、猶ほ小承氣を以て之に与ふ。「若し大便せざること六七日」にては、食すこと能はざること之胃実の似きこと有りと雖も、其の小便少なき者は、初め鞅く後に溏す。宜しく暫く其の実するを待つべし。遽に下すべからず。比の二証は対示して、以て人をして變に通ぜしめんと欲するなり。又大便初め鞅く後に溏するに、自ら二端有り。其の一は、寒

実の証に係る。是は終に結せざる者なり。其の一は、熱実の未だ成らざるに係る。是は終に結する者なり。宜しく分別して看るべし。如し**胃実正証**にして、**一等輕き者**なれば、**小承氣湯**之を主る。大承氣の証に、姑く是の湯を用ゐて探試する者有り。其の義を見るべきなり。又小承氣の湯の、「陽明の病、其の人汗多く、津液外出するを以て、胃中燥く」、及び「太陽の病、若しくは吐し若しくは下し若しくは汗を發して後」の條は、並に是津液傷を受く。是調胃の宜しき所の似し。然し多汗は本々陽明に固有の所なれば、則ち其れ満実有り。蓋し之を言外に寓する者なるのみ。如し**液燥き熱搏ち、其の實則ち輕き者**は、**謂胃承氣湯**之を主る。大承氣の湯に、液甚だ燥く者有り。但病急劇に属すれば、已むを得ずして之を奪ふのみ。此の方主る所は、則ち病勢稍慢なり。潤にして之を蕩するに非ざれば可ならざるなり。大抵之誤汗吐下して、津液虧乏を得る者多しと為す。「吐後腹脹滿する」者の如きは、亦是大実に似て非なる者なり。尤氏曰く、「設し庸工を遇して、其の脹滿を見れば、必ず枳朴を以て急と為す」と。是なり。又太陽中篇の「過経」二條は、其の証殆ど壞病に属す者なり。○成氏曰く、「大熱の結実する者は、大承氣湯を与へ、小熱の微結する者は、小承氣湯を与ふ。熱の大甚ならざるを以ての故に大承氣湯より芒消を去る。又結の堅に至らざるを以ての故に厚朴枳実を減ずるなり」と。又雲岐子『傷寒保命集』に曰く、「大承氣は、厚朴の苦温にて痞を去り、（按ずるに此の痞と云ふ者は、蓋し氣閉の義にして、心下痞の痞に非

ず）枳実の苦寒にて満を泄らし、芒消の味鹹にして能く軟堅し、大黄の味苦寒にして能く実を泄らし、痞満燥実の四証全ければ則ち用ゆべし。故に大承氣湯と曰く。小承氣は、大黄の味苦寒にて実を泄らし、厚朴の苦温にて痞を去り、痞実兩つ全ければ用ゆべきなり。故に小承氣湯と曰く。調胃承氣は、大黄の苦寒にて実を泄らし、芒消の鹹寒にして能く啞堅潤燥し、甘草の和平にて、其の中を和す。燥実堅の三証全き者に用ゆべし。故に調胃承氣湯と曰く」と。此の説頗る當る。陶氏の『六書』に至れば、則ち曰く、「病に三焦俱に傷らるる者有り。則ち痞満燥実堅全きなり。邪中焦に在れば、則ち燥実堅の三証有り。上焦の傷を受ければ、則ち痞して実す」と。拘鑿殊に甚だし。関芝慶は嘗て其の繆りを闢く。文繁なれば録さず。又呉又可曰く、「三承氣の功用彷彿す」と。又曰く、「功效俱に大黄に在り。余は皆標を治するの品なり」と。並に辨晰を欠く。又王好古は三方の主証を挙げるも、『輯義』に調胃の証を漏載す。仍ほ之を補出す。曰く、「調胃承氣湯は実して満ならざる者を治す。腹仰瓦の如く、腹中転失氣し、燥糞有り、大便せずして、讖語し堅実なる証には、宜しく之を用ゆべし」と。又大黄酒制は、程知の説是なり。然し抵当湯に、芒消を用ゐずして大黄酒洗し、大陷胸丸、大黄牡丹湯には、並に芒消有つて大黄を生用す。故に其の説疑ひ無きこと能はず。攷を存す。○『幼幼新書』惠眼観証の芍薬散、大小便下薬、通ぜざる者を治するは、調胃本方に芍薬、当归を加ふ。『保命集』の当归承氣湯は調胃方中に当归、姜棗を加へ、水煎

す。『三法六門』の玉燭散は、四物湯 承氣湯 朴消 各等分を以て、水煎し、滓を去り、食前に之を服す。『傷寒心要』に、「産後 如し血 尽きざれば、則ち涼膈と四物とを以て合煎し、経血を調理す。甚だしき者は、大承氣合 四物、乃ち瀉中に補 有るなり」と。又曰く、「大承氣に四物を合して、婦人一切の血積 血聚等の疾を治す。紅花を加へ尤も妙なり」と。脾約は則ち病 最も輕し。而して但 胃 燥く。故に麻子人丸にて僅に之を潤下す。『本草図經』を引くに、枳実 一斤と作し、十丸の下に、「食後 之を服す」字有り。曰く、「唐方七宣麻人丸も亦此の類なり」と。徐大椿 曰く、「此 潤腸の主方なり」と。又陶隱居 曰く、「梧子の如き者とは二大豆を以て之に准ず」と。又杏人 熬黒するに陶氏に説有り。宜しく參ずべし。熱 去つて津 竭き、而して大便 鞭き者は、蜜煎を以て之を導く。導法の、蜜を用ゐ、土瓜根を用ゐ、猪胆汁を用ゐるは、俱に潤肛に取る。設し更に皂角 諸品を用ゆれば、徒に多事を覚ふ。○『本草開宝』に陳藏器を引いて云ふ、「大便 通ぜざるを主る。猪羊胆を取り、葦筒を以て胆を著け、一頭を縛り、下部に内れ、入ること三寸にして、之を灌ぐ。腹に入れば立ちどころに下す」と。（此の方は、北齊道『興治疾方』に出づ。但 主治文 泐滅し攷し難し）又『梅師方』に、「肛門は肺が主る。肺 熱すれば即ち肛門 塞がり、腫縮し瘡を生ず。白蜜 一升、猪胆 一枚を相和し、微火にて煎じて丸とすべからしめ、丸長 三寸の挺と作し、油を塗り下部に内れ、臥して後重せしめれば、須臾にして通泄す」とある。此 陽明の病の要領なり。此の他、素 虚を兼ね

る者有り。汗無く身に虫行するが如き者、兼變の虚乏中に詳し。及び大便せず、脈微瀯なる者の如きが、是なり。『宗印』に曰く、「明日大便せずして、脈反つて微瀯なる者は、邪熱実して正気虚するなり。微は気虚と為す。瀯なれば則ち血無し。此胃氣は裏に虚す。熱実有り」と雖も、之を攻むるべからず。故に難治と為す」と。此の説汪と意相同じ。表を兼ねる者有り。半表半裏を兼ねる者有り。証は合併中に詳し。但し「脇下鞭満し、大便せずして嘔し、舌上白胎には、小柴胡を与ふ」此は其の実少陽に係り、而して陽明に似し者なり。血分に迫る有り。兼變の瘀血に列す。湿鬱を挟む有り。湿熱中に列す。亦宜しく隅反すべし。蓋し本病は復た伝はる所無し。經に明文有り。大抵下後清潤なれば、病日愈に就く。此呉氏に養宮清燥の諸湯有る所以なり。然し攻下過度にて、胃虚し熱ほとばし進り、以て厥陰と為る者有り。殆ど局外の変なり。古人に下すこと多ければ陰を亡ふの戒有り。蓋し下すこと多ければ胃亦虚し、陰を亡へば必ず内燥き、勢厥陰と為らざるを得ず。今の世往往此に致る者有り。○詳にするに本篇中に、文易くして義曉かにし難き者、凡そ五條有り。曰く、「初め食さんと欲し、小便反つて利せず。大便自ら調ふ」曰く、「反つて汗無くして小便利す」曰く、「但頭眩し悪寒せず」曰く、「脈浮にして緊なる者は、必ず潮熱発作時にあり」曰く、「太陽の病寸緩関浮尺弱」、是なり。○太陰の病と陽明とは、其の位と実有ると、則ち相同じ。而して自ら寒熱の異有り。故に本篇に点出し、以て照對に便とす。但し猶ほ題するに

陽明の病を以てす。是を以て注家察せず。多く論混を致す。今詳しくは次に開く。読者宜しく攷ふべし。

述太陰病

太陰の病は、裏寒実の証、是なり。蓋し其の人内に久寒有つて、倘し邪客に遇ひて、初めは陽証を得ると雖も、其の裏に入るに及べば、則ち遂に寒化に従ふ。而し胃氣猶ほ守り有り。故に能く搏実する者なり。『脈経』に曰く、「下利して腹痛し満するは、寒実と為す。当に之を下すべし」と。(此の語は、其の平下利中に出づ。前後諸條を攷ふるに、即ち『雜病論』の遺の似し)然らば則ち本病は寒実と為す。其の義甚だ明らかなり。蓋し雜病の寒疝寒脹の類も亦寒実に係る。故に『金匱』腹滿寒疝の証治は間々本篇と相發す。又「寒実」の字面は、三物白散の條及び腹滿篇第四條に出づ。其の受くる所の者は、太陽の病誤下により来る有り。則ち誤下せずに、亦或いは變成する者有り。及び或いは少陽より来る者有り。皆知るべきなり。成氏曰く、「太陽の病は、陽邪裏に伝はるなり」と。此の言味有り。豈三陰中に太陰特り桂枝の法有るに因つて、即ち發せんや。曰く「自利」、曰く「食を吐して下らず」、

曰く「時に腹痛む」、皆寒盛の徴なり。曰く「腹滿」、曰く「之を下せば胸下結鞭す」、俱に壅塞の驗なり。謂ふ所の「之を下す」者とは、蓋し承氣十棗の類を指して言はん。其の病少陰の脱に似ず。故に「胸下結鞭」は、猶ほ是崔氏謂ふ所の下後虚逆、毒相激の類なり。「胸下」は、蓋し即ち「心下」ならん。太陰は唯末條に脈候を言ふ。必ずしも其の正脈ならざる似し。然し要は沈遅細弱等を出でざるなり。其の初起に滿実し、陽氣能く持する者は、桂枝加芍薬及び加大黄湯を設け、以て和泄温利の法と為す。此の條に、「本太陽の病」と曰へば、則ち時既に表を離れるを知るべし。蓋し誤下の後に、胃氣寒を生じ、表邪陥実し、以て是の証を致す。顧みれば下後に便秘する者は、桂枝湯に芍薬を加倍す。既に發表に非ず。亦建中とも其の旨同じからず。攷ふるに小柴胡加減法に曰く、「若し腹中痛む者なれば、黄芩を去つて、芍薬三兩を加ふ」と。成氏曰く、「芍薬を加へて以て壅を通ず」と。又『明理論』に曰く、「宜しく通ずべきも而し塞れば痛を為す。邪氣裏に入り、裏氣足らず、寒氣之を壅がば、則ち腹中痛む。芍薬は、味酸苦微寒なり。酸の性なるは泄して中を利す。之を加ふれば則ち裏氣通ずることを得て、痛み自ら已む」と。愚謂ふ此の方の芍薬は、亦通壅に取る。次條の設し当に大黄芍薬の行くべき者の語氣を、以て徴すべしと。張志聡『侶山堂類辨』に曰く、「芍薬は氣味苦平なり。苦は血を走る。故に血分の薬と為す。苦は下に洩らす。故に『本経』に、「邪氣腹痛を主り、血痺を除き、堅積寒熱を破る」と。其の洩を破るに因

つて、故に太陰篇云云。今の人咸みな云ふ、「芍薬は酸斂を主る」と。而し大黃の功能有るを知らず」と。此の説則ち当を過ぐ。病勢更に劇しく、大実痛する者は、大黃を加へて以て之を疎すかす。亦猶ほ大黃附子湯の例のごとく、病寒に属するを以て、主るところ温利に在り。此の理を補充すれば、則ち大黃附子湯、及び温脾湯等は、皆宜しく本病を治すべきなり。○『脈経』に謂ふ所の「当に之を下すべき」者とは、亦加大黃湯の証なり。其の下利は、寒積有るに因つて、而して氣下墜して致す所にして、四逆の証の下利と自ら異なる。知を要すれば寒実を下を用ゐるは、脈の有力無力、腹痛の微甚に於いて著眼し、始めて襯切と爲る。○陳氏『三因方』に曰く、「太陰は脾に属す。中州は土なり。性は寒湿を惡む。乾姜附子に非ざれば、能く温燥せず」と。又曰く、「太陰脾經に至れば、温燥行らず。亦当に温利すべし。陽明より出づ。温脾に、大黃を用ゐる者の如きは、是なり」と。此の其の言曖昧明らかならずと雖も、稍太陰の寒実爲るを知る者の似し。如し其の脈弱き者は、斟量を加ふるを要す。「太陰の病爲る」の「為」字は衍かと疑ふ。提綱の諸條、及び風温の外に、經に此の語例無し。「續いて自ら便利す」は、恐らく是上條を承けて言ふ。医之を下して後、續いて自ら便利す。柯氏の意亦然る似し。太陽中篇の、「傷寒医之を下し、續いて下利を得て」と殆ど一例なり。蓋し此の條は、寒実の動じて陽虚に變するを、軽々に下すべからざるの戒を示す。病既に重き者は、則ち四逆輩を用ゐ、以て之を温散す。提綱の証、蓋し此を謂ふなり。渴せざ

れば、既に少陰と分別する処なり。彼は胃に液少なき故に渴す。此は寒氣壅閉し、津液猶ほ持するを以ての故に渴せず。成氏曰く、「自利して渴するは、寒下焦に在り。自利して渴せざるは、寒中焦に在り」と。恐らくは誤りなり。四逆輩と云ひて、四逆湯と云わざるは、意温散に在りて、厥を治するに在らざるによるなり。朱氏『活人書』以来、本病を療するに、理中湯丸を用ゐる者有り。蓋し能く経旨を得る者なり。蓋し寒実の病は、胃猶ほ閉持すると雖も、寒固より胃の忌む所にて、其の実極まれば、中氣必ず敗れ、熱証の久実に似ざるを以て、故に初起に温利を用ゐると雖も、其の重き者に至らば、則ち宜しく陽を扶け寒を散ずべきのみ。『玉函経』に曰く「寒は則ち之を散ず」と。此の謂なり。桂枝加芍薬の証に曰く「時に痛む」、加大黄の証に曰く「大実痛す」、提綱に曰く「時に腹自ら痛む」は、此を以て其の病機知るに足る。而して治に措けるの法は亦見るなり。此太陰の病の要領なり。他に表を兼ねる者有り。桂枝湯の條、是なり。少陰に太陽を兼ねるもの、治法は裏を先にし表を後にす。太陰は少陰の脱に似ず。且つ桂枝湯の、程氏謂ふ所の建中の体を胎み、温めるに碍すること無きは、此猶ほ其の表を先にする所以か。其の愈ゆるに、外従りの者有り。太陰中風、是なり。成氏「辨脈」首條を注して曰く、「陰病に陽脈を見て、而も生を主る者は、則ち邪氣裏より表に之き、汗して解せんと欲するなり。「厥陰中風、脈微浮は愈ゑんと欲すと為す。浮ならざれば未だ愈ゑずと為す」の如きが、是なり」と。此の説に拠れば、則ち三陰中風は、特

に其の愈ゆる候を言ふ似し。豈風が陽に属するを以て、仮に陽復するの名と為すものか。柯氏曰く、「脈の濇と長とは、是並に見ず。濇本病の脈なり。濇にして転じて長なれば、病始めて愈ゆるのみ」と。此亦一説なり。内よりの者有り。「暴に煩し下利す」、是なり。此の條は客を挙げて以て主を明かにす。「太陰は当に身黄を發すべし」以上は、是客詞なり。此の「太陰」は寒実本病を謂ふに非ず。唯是は中焦脾家を指さして言ふ。猶ほ「食穀を嘔さんと欲する者は陽明に属す」の例のごとし。即ち「脈浮緩、手足自ら温かく、小便利せざる」者を、中焦湿熱と為す。故に「当に身黄を發すべし」と言ふなり。「若し小便自利し」以下は、是主詞なり。寒実本病を言ふ。倘し「脈浮緩、手足自ら温」なる者は、陽復して寒去る兆しと為す。縦え首條の諸証、及び小便自利すること有るも、必ず暴に煩し下利日に十余行して愈ゆ。即ち是脾家陽実、寒積腐穢自ら去る徵なり。「若し小便自ら利し、發黄する能はず」の二句は、陽明篇に在らば、則ち燥結の驗と為す。本篇に在らば、則ち裏寒の故と為すなり。以上一に臆見に出づ。甚だ迂曲の似し。然し参互審攷するに、義は然らざるを得ず。何なれば則ち『金匱』黄疽篇には、「寸口の脈浮にして緩」なるを以て、其の正脈と為す。是と本條と相發す。浮緩は表邪に非ずして、裏熱に属することを知るべし。蓋し裏熱外熏して脈浮なる者は、白虎証が是なり。緩の熱為るは、『素』『靈』及び「平脈法」に見る。「手足温」の一証は、小柴胡梔豉の両條に之有つて、亦内熱の致す所に係る。是にお

いて此の脈証が陽病に在つて之を見れば、則ち裏熱の候と為す。陽明篇に挙げて以て胃実燥湿の分を別かつなり。今寒実に之を見て、何を以て謂ひて陽復の候と為すや。曰く。少陰篇に曰く、「少陰病 脈緊、七八日に至つて、自下利し、脈暴に微となり、手足 反つて温なり。脈緊 反つて去る者は、解せんと欲すと為すなり。煩して下利すと雖も、必ず自ら愈ゆ」と。此は明らかに「手足 温」なるを以て愈ゆる候と為す。而して錢氏は「緊 去る」と解して、緊峭化して寛緩と為ると謂ふ。此の意甚だ佳し。且つ少陰 厥陰にては、並に脈 浮を以て愈えんと欲すと為す。乃ち此の脈証の陰証に在つて之を見るは、固より陽証と同じからざるを知る。之を要すれば本篇 此の條は、此の脈証を掲げて、以て湿熱 發黄と寒実 愈ゆる候とを辨明するのみ。又太陽下篇と「辨脈法」にも、「手足 温」を以て愈ゆる候と為す者 有り。亦当に併攷すべし。抑も病 既に裏に在り。故に復た伝はる所 無し。唯 実よりして虚たれば、必ず變じて少陰と為る。義は上説の如し。更に寒 去つて実 存し、実は以て燥を生じ、仍ほ陽明に變ずる者 有り。陽明篇 第三十二條の「若し転失気せざる者は、初頭 鞭く後 必ず溇す」は、此蓋し「固瘕を作さんと欲す」る者と均しく寒実に属さん。故に之を攻めれば、則ち脹滿して食す能はざるなり。「其の後 發熱する者云云」は、乃ち寒 去つて後に、或いは熱結に變ずる者 有るを言ふ。厥陰の燥熱の如きに至つては、則ち恐らく寒実の遽に變ずる者に非ざるなり。太陰 一篇は、従つて確解 無し。愚 涵泳すること数年、之を病者に徴するに、定めて寒

実と為す。後に『脈経』中の語を得て、竊に謂ふ益々著切と為すと。因つて自ら揣はからず、説を立てるに右の如し。蓋し本篇は僅僅たる数條に過ぎずして、陽明篇中に反つて本病の証候多し。此は其の病に寒熱の異有ると雖も、而し部位と壅実なると則ち同じなるを以ての故に、人の錯認を恐れて、対挙して之を明らかにするなり。曰く「食す能はざるを中寒と名づく」、曰く「固瘕を作さんと欲す」、曰く「其の熱を攻めれば必ず嘔す」、曰く「穀疸を作さんと欲す」、曰く「水を飲まば則ち嘔す」、曰く「穀を食し嘔さんと欲す」、曰く「寒湿裏に在り」は、皆是なるのみ。然し猶ほ冒するに陽明を以てす。故に諸家未だ之を察せず。亡友世緝嘗て特に之を論ず。唯未だ断じて寒実と為さず。稍愚見と異なる。『金鑑』には、厚朴生姜半夏甘草人参湯を以て、移して本篇に入れるも、其の候類すと雖も、彼は則ち氣滯虚満なるのみ。実とは同じからざるなり。柯氏は三物白散を以て移入す。亦部位に殊なること有るを辨ぜざる者なり。

述少陰病

少陰病は、裏虚寒の証、是なり。直中有り、伝變あり。是の故に表に専らなる者有り、裏

に専らなる者有り。然し其の重きに至らば、則ち俱に無く表裏に涉らず。直中する者は、謂ふ所の陰に発する者なり。其の人陽氣素衰へ、邪氣に中るに、相抗ふこと能はず。其の爲に奪はるる所となり、直に虚寒と爲る者なり。而して軽重の分有り。蓋し裏未だ甚だしくは衰へず、表専ら虚寒する者は、邪氣を相得て、以て表に稽留す。故に猶ほ発熱有り。此の病は軽しと爲す。麻黄附子細辛甘草二湯の証の如きが是なり。柯氏曰く、「本條には、当に汗無く悪寒するの証有るべし」と。趙氏曰く、「少陰発汗の二方は、同じく麻黄附子を用ゆと雖も、亦加減に軽重の別有り。故に細辛を加ふるを以て重しと爲し、甘草を加へて軽しと爲す。辛は散じ甘は緩むの義なり」と。徐氏は甘草湯下に於いて曰く、「此を細辛を加ふる者に較ぶれば、甘草に易へて調停をなし、其の藥勢の緩きこと多し。因つて細かく立方の意を詳にす。「少陰病二三日」と言へば、「初めて之を得て」に比すれば、略はほ一二日多し。日数多くして裏証無ければ、寒邪の入る所尚淺し。是を以て陰象を驟発すること能はず。故に此の湯を將て微しく汗を發す。「微かに」と云ふは、病情即ち内入せざるに因つて、軽く外引を爲すなり」と。按ずるに三説並に妥なり。裏陽素弱もとく、表氣従つて虚なる者は、其の邪に感ずるや、表裏徑ただちに虚寒と爲る。蓋し謂ふ所の熱無く悪寒する者は、此の病重しと爲す。附子湯の証の如きが、是なり。附子湯二條は、伝變亦此の如き証有り。其の方に亦伝變在り、必ず須ゆる所なり。故に注家未だ敢て謂ひて直中と爲さず。但成氏は「熱無く悪寒

す」を引いて以て之を解す。見る所有る似し。今其の文を詳にす。曰く、「背惡寒す」、曰く、「身体痛み、手足寒く、骨節痛む」とは、俱に表寒の候と爲す。蓋し陽氣素虧かき、筋骨に液乏しく、寒邪因つて以て侵漬し致す所なり。故に麻附の証の發熱有るに似ず。設し裏虚に非ざるに自れば、何を以て此の寒盛に至らんや。然らば則ち其の兼ねて裏寒の証を見るは、亦推して知るべきなり。其の方と真武とは相近し。而して彼は主に内湿に在り、此は主に外寒に在り。何なれば則ち此は附子を倍用す。外を走らす所以なり。朮も亦倍用す。表を散ずる所以なり。蓋し仲景の朮を用ゐるは、多く表を治するに取り、人参を用ゐるは、固より以て素弱の陽を救ひ、併せて朮附の燥を制するなり。『千金』では此の方を用ゐて、湿痺緩風を治し、及び『指迷方』では、本方に甘草を加へ、蒼朮を用ゐて、朮附湯と名づけ、以て寒湿を治す。俱に互いに此の証の表寒爲るを徴するに足るなり」と。先兄曰く、「附子の性は、雄悍燥熱にて、沈寒を散じ元陽を壮んにす。生なれば則ち其の力特に猛く、裏陽の脱に垂とする際を救ふ。炮ずれば則ち其の性稍緩く、表分を走り以て経を温め寒を逐ふ。前輩の辨ずる所は、殊に踏駁に属す」と。此の言は能く未だ速とどえざる秘を發す。但率意に之を論ずれば、表を治するには宜しく力猛なるべく、裏を治するには宜しく性緩なるべき似し。此は殊に然らず。蓋し裏虚すれば驟に脱す。急に救ふに非ざれば則ち可ならず。生附を用ゐる所以なり。寒湿は纏綿す。過發すれば則ち功無し。炮附を用ゐる所以なり。伝変には、太陽の病よりの

者有り、少陽の病よりの者有り、太陰の病よりの者有り。大抵陽は陰に變ず。皆其の人胃氣本弱く、医回護することを知らず、汗下法を失して、陽虚胃寒し、以て此の病と為る。更に錯治を被らざると雖も、遂に邪の為に奪はるる所、因つて而して變成する者有り。其の少陽の病より、及び錯治を経ざる者は、並に多く驗見する所なるも、然し經に明文無し。豈意言外に在る者ならんや。又桂枝の証多く變じて陰と為る。義は太陽中に述ぶ。更に盛人初め太陽を得て、遂に本病に變ずる者は、賤役勞形、最も多く之有り。殆ど陽外に余り有つて内に足らざる故を以てか。其の變ずるに太陰よりするは、前に詳述す。倘し其の太陽よりして、表熱仍ほ在る者は、先ず其の裏を救ひ、後に其の表を救ふ。四逆桂枝の二湯各々施す証の如きが是なり。厥陰篇の、「下利清穀するは、表を攻むるべからず」も亦表裏併に有る者と為して言ふ。又桂枝人參湯は、其の輕証に係る。程氏に説有り。宜しく參ずべし。桂枝加芍藥生姜人參新加湯は此と稍異なる。並に兼變中に録す。既に表証無く、一に虚寒に係る者は、宜しきに隨いて治を為す。乾姜附子湯茯苓四逆湯芍藥甘草附子湯等の証の如きが是なり。上の二方の証は、従つて確解無し。柯氏は分つに緩急と為す。実に叶当する似し。其の陽を救ふと陰を救ふとの異有ると云ふ者は、恐らく然らざるなり。今文勢方意を玩ぶに、臆を以て之を測れば、其の病軽くして急に來る者は、乾姜附子湯に属す。何なれば則ち「昼日煩躁して、眠ることを得ず」、之を「躁して暫くも安き時無し」の孤陽絶陰に比すれ

ば、夜にして安静なるの異有り。況や未だ厥逆に至らず。其の方亦薬単捷にして剂小なり。蓋し単味なれば則ち其の力專一にて、以て咄嗟に奏效すべし。而し剂小なれば則ち以て大敵に対するに足らず。其の病重くして来ること緩なる者は、茯苓四逆湯に属す。何なれば則ち「病仍ほ解せず」と云ふ。蓋し是緩詞なり。其の方亦薬重複して剂大し。蓋し重複すれば則ち其の力泛く応ず。直搗の勢ひ少なし。而して剂大なれば則ち以て倒瀾を廻すべし。芍薬甘草附子湯は、互いに兼変中に挙ぐ。又甘草乾姜湯は虚寒の軽証と為す。亦列するに兼変中に在り。○茯苓を前輩は称して陰を益すと為す。愚謂ふ滲利の品にて、恐らくは其の功無しと。蓋し脾胃は燥を喜びて湿を惡む。其の燥なれば必ず煖なり。陽氣以て旺ず。其の湿なれば必ず冷なり。陽氣以て衰へ、水穀淤溜し、津液行らず。苓の滲利は、能く水湿を去る。此姜附を佐け、以て内寒を逐ふ所以なり。理中の朮と其の理は相近し。伝変するに、表寒を専らにする者無し。伝変は必ず表熱を経る。則ち其の理明かなり。直中の麻黄附子の証は、或いは其の法を差たがへば、必ず裏寒と為る。太陽中篇の四逆湯の証の如きは是なり。此の條は、周氏の注が優ると為す。又曰く、「若し差たがえざれば」とは必ず曾て汗薬を服すなり」と。亦是に似たり。蓋し太陽中に列すと雖も、実は少陰に係る。顧るに是其の初めに「発熱頭痛し、脈反つて沈」なる者は、麻黄附子の二湯を、宜しく酌用すべき所なり。而して医は其の法を失す。故に「身体疼痛」に至る。其の証は殆ど附子湯と相同す。而して四逆を用ゐる

は、或いは是其の既に誤治を経て、陽虚殊に甚だしくして、更に厥冷等の証有るのみ。「三陰に頭痛無し」とは、是経絡に就いて言ふ。戴原礼既に其の正法に非ざるを辨ず。頭痛には固より陰寒上冲するに因る者有り。此即ち是なるのみ。又其上條の四逆桂枝先後の証は、表裏に病異なる者を謂ふ。此の條は、虚寒の表熱に似し者を謂ふ。其の意互発す。陽明篇の小柴胡に亦其の例有り。之を要すれば、病重き者に至らば、則ち直中と伝変と、証治に二つ無し。俱に皆脈微細沈、心煩寐ねんと欲し、自利して渴し、此の渴は津脱の故と為す。程氏の「上熱す」と謂ふは、誤りなり。厥冷外熱等を以て、其の正証と為す。而して四逆湯を以て経を温め陽を回らすは、實に対治に係る。本病は僅に「脈微細、但寐ねんと欲す」を提綱と為す。四逆の主る所は、本篇に於いて、則ち唯是「脈沈」と「膈上寒飲有つて乾嘔す」る者と二條のみ。然し其の証は各條に散見す。則ち宜しく会して之を通ずべし。四逆湯の如きは、實に是温補諸方の祖にして、其れ少陰の正治と為すは、誠に辨を待たず。○陶隱居曰く、「附子烏頭若干枚とは、皮を去り畢つて、半両を以て一枚に準ず」と。按ずるに、半両は今の一分七殊輕に充つる。陶説は疑ふべし。其の重きこと一等なる者は通脈四逆湯の証、是なり。下利甚だしき者は、更に其の内を温む。白通湯の証、是なり。而して重きこと一等なる者は、猪胆人尿を加ふ。加猪胆湯は、成氏注するに反治を以てす。是に非ず。蓋し加猪胆の意は、通脈四逆加猪胆湯の呉氏の注が尤も切実と為す。其の尿を用ゐる者は、亦

類推すべし。又猪胆汁は或いは急遽に辨じ難し。若し胆無ければ「亦用ゆべし」の語有る所以に、必ずしも重ねる所人尿に在らざるなり。○陶隱居曰く、「薤白葱白は青きを除き尽さしむ」と。此少陰病の要領なり。四逆の変方には、更に当帰四逆湯の滋養を兼ね、通脈四逆加猪胆湯の和陰を兼ね、四逆加人参湯の救胃を兼ねるの如きもの有り。皆本病に在つて亦酌用すべきなり。此の他、水気を兼ねる者有り。真武湯の証が是なり。此の條には既に「自下利」と曰ふ。而して又「或いは下利し」と曰ひ、語意重複す。中西惟忠曰く、「或」字の下に「不」字の脱するかと疑ふ」と。此の説是なり。曰く「小便利せず」、曰く「或いは小便利し」も其の例は一なり。○程知は附子の生熟を論ずるに、張兼善に本づく。蓋し此の方証は四逆証の陽脱に似ず。故に附子を炮用す。寒逆を兼ねる者有り。呉茱萸湯の証が是なり。「死せんと欲す」の二字は煩躁の状を形容するに過ぎず。「奔豚の病、発作し死せんと欲し復た還つて止む」と同語例なり。陶隱居曰く、「呉茱萸一升は五両を正と為す」と。○『肘後』の卒に厥し上気し、淹淹として死せんと欲す。此を奔豚の病と謂ふを療するは、本方より大棗を去り、桂半夏甘草を加ふ。『千金』は奔気湯と名づく。『千金』呉茱萸湯、脾中積冷し、心嘈煩満し、汪汪飲食下らず、心胸背に応じて痛むを治す方は、本方に半夏桂心甘草を加ふ。大腸滑脱する者有り。桃花湯の証が是なり。按ずるに裏寒し便膿血するの機なり。蓋し下利数日、大腸滑脱し、氣益々内陷し、血随つて下溜するによりて来る。巢源曰く、

「血腸に滲入し、腸虚し則ち泄す。故に血痢を為す」と。以つて見るべきなり。錢氏「大腸傷損す」と謂ふは、恐らく其の理無し。又便膿血するは、真に腸癰の膿血雑下の如きには非ず。蓋し腸垢の血と同出する者なり。『巢源』痢候に、「膿涕」及び「白膿涕の如し」の語有り。徴すべし。○按ずるに此の三証は、兼ねる所有りと雖も、然し虚寒に外ならず。故に敢て此に列す。其の変に至れば、則ち變じて陽と為る者有り、或いは表寒より、此は臆揣に出づ。蓋し表寒にして陽裏に鬱する人は、其の始めて邪を得るや、直中の輕証と為る。而して其の裏に伝はるに及んで、變じて熱候を為す。是なり。但し表寒裏熱の理は疑ふべきに似たり。然し附子瀉心湯の証は固より表陽虚と為す。而して裏に熱有る者なり。其の機は此と相近し。堅嘗て数人を見る。冬月に薄衣にて寒を犯し、始め麻附細辛湯の証を得て、之を用ゐて五六日にて、變じて胃実と為り、以て承氣を与へて愈ゆ。是に於いて病の変を為すに、有らざる所無きを知るなり。或いは裏寒より、亦臆揣に出づ。蓋し病未だ篤からずして温補過ぐることに甚だしく、或いは陽既に復して仍ほ姜附を用ゐ、遂に閏熱を生ずる者が是なり。孫兆曰く、「本是陰病に温藥を与ふること過多にて、胃中熱実を致し、或いは大便鞭く、狂言有る者有り。亦宜しく下すべきなり」と。以て徴すべきなり。而して熱の半表裏に墮る者は四逆散の証、是なり。此の証に小柴胡を用ゐざるは、其の壅鬱が枳実芍薬に非ざれば能く開洩せざるを以て、大柴胡を用ゐざるは胃に実結無きを以てなり。蓋し邪の半表裏に墮

つて厥と為る者は、何ぞ昔に少陰 変来ならん。其の本篇に掲ぐるは、亦人をして寒厥と对看せしむるに在るか。胃家熱実する者は大承氣湯の証、是なり。郭雍に初め四逆を与へ、後に承氣を用ゐる按有り。及び孫氏の云ふ所は即ち此なり。愚を以て之を測るに、此の証は表寒より変来せる者多しと為す。如し裏寒の者は、政に温補 太過せしむるも、恐らく遽には變じて胃実とは為らざるなり。周氏曰く、「自利して清水に至り、而して渣滓 無きは、明らかに旁流の水に係るを知るべし。痛み心下に在つて。口且つ乾燥す。其の燥屎 脾を攻め、而して津液 尽く爍くを又知るべきなり。故に当に急に下し、以て陰津を救ふべし」と。此の解頗る妥る。中西惟忠曰く、「自利 清水」の「清」は、当に「清穀」「清血」の「清」と均しく「圍」字に為して看るべし。始めて色 純青と文 順となる」と。飲熱 相併する者は猪苓湯の証、是なり。更に兼變の飲邪 搏聚に出づ。熱 血分に併せる者は、便血 及び便 膿血し刺すべき証、是なり。「熱 膀胱に在り」とは即ち熱が下焦に結すの義なり。是は淨府を斥言せず。桃核承氣 抵当 二條を徴すべきなり。然らば則ち便血は亦 大便の血なること明らかなり。○陰の陽に變ずるは、王履 既に曰ふ。或いは直に傷れ即ち入りて寒 便ち熱に變じ、及び始め寒にして終に熱する者 有りと。其の言 是と雖も、猶ほ未だ明瞭ならず。注家の伝經 熱邪の説の如きは、則ち『輯義』既に其の謬ちを辨ず。或いは以為らく本篇の熱証は本々 陽病に係り、必ずしも變成に自らず。其の相似るを以て、仍ほ之を対示するのみ。然し承氣 三條を以て之

を言へば、口燥咽乾、自利清水の如きは猶ほ爾りと云ふべきも、腹脹り大便せずに至りては則ち少陰に豈此の証有らんや。其の説従ふべからず。變じて厥陰と爲る者有り。蓋し少陰の極なり。更に二端有り。陰陽俱に敗れ、以て暴脱に就く者有り。下利し陰を亡ひ、而して孤陽上燔する者有り。心中煩して臥することを得ず。咽痛咽瘡の如きは、並に上焦燥熱に係る。故に黄連阿膠猪膚苦酒諸湯は皆潤法と爲す。蓋し病既に厥陰に渉る者なり。此は実に懸料の言なり。然し此の諸方の証は皆潤を以て主と爲す。変陽諸証の必ず清涼を要する者に似ず。知る是亡陰虚燥にて、稍厥陰に近し。『医学読書記』に曰く、「少陰陽虚し、汗出でて厥する者は慮り足らざるなり。若し並びに其の陰を傷れば則ち危し。是を以て少陰厥逆は、舌の乾かざる者を生くるとし、乾く者を死するとす」と。斯の言稍是なり。然し少陰變じて厥陰と爲るを知らざる者の似し。黄連阿膠湯は梔豉と一類なり。然し此は潤を以て主と爲す。蓋し邪熱壅鬱に非るを以ての故のみ。程氏曰く、「少陰に之咽痛有り。皆下寒上熱し、津液搏結の然らしむ。厥陰撞氣無し。故に痺と成らず。但氣勢の微甚を視て、或いは潤し或いは解し或いは温む。総て涼薬用著せず」と。此の説頗る当る。蓋し咽を治する諸方は、要するに是標を治する法なるのみ。又劳瘵病極まつて咽痛を爲すは、其の理則ち一なり。徐大椿は苦酒湯を注して曰く、「疑ふに即ち陰火喉癰の類らん」と。当ると爲す。○猪膚は諸説一ならず。按ずるに『儀礼』聘礼に、「膚鮮魚鮮、腊は肩鼎を設く」

と。注に曰く、「膚は豕肉なり。唯燂る者膚有り」と。疏して曰く、「豕は則ち膚有り。豚は則ち膚無し。故に土の喪礼に、豚は皆膚無きは、其の皮薄きを以ての故なり」と。又『礼記』内則疏に曰く、「麋膚魚醢は、麋膚、麋肉の外膚、之を食すに魚醢を以て之を配すを謂ふ」と。今合わせ之を攷ふれば、則ち膚は是肉の外に近く脂多き者と為す。古義了然たり。別解を庸すること無し。又錢氏は、熬香を以て猪膚に属す。誤なり。○苦酒湯の「刀環」の「刀」は即ち古銭なり。今猶ほ世に伝はる。其の形狭長にして、柄端に環有り。以て鶏卵を安んずるに甚だ適好なり。

述厥陰病

厥陰の病は、裏虚して寒熱相錯する証、是なり。其の類二つ有り。曰く上熱下寒、曰く寒熱勝復なり。其の熱は俱に相結すること有るに非ず。而して上熱下寒を以て、之を正証と為す。提綱に掲ぐる所、其の義見るべきなり。注家多く混合して説を為す。誤りなり。蓋し物窮すれば則ち變ず。是を以て少陰の寒極まり、而して此の病と為る。其の機は既に少陰中に詳し。然し亦陽より變ずる者有り。少陽の病を誤治すれば、最も多く之を致す。其の位稍

同じなるを以てなるのみ。少陽の邪は胸脇を壅ふさぐ。本病は熱上焦に在り。柯氏曰く、「少陽の咽乾は、即ち厥陰の消渴の機なり。胸脇苦満は即ち氣上つて心を撞く兆しなり。心煩は即ち熱の初めに食すことを欲せず。是は饑ゑて食すことを欲せざるの根なり。喜嘔するは即ち虻を吐するの漸なり。故に少陽解せざれば、転じて厥陰に属して病危し。厥陰の病衰へ、転じて少陽に属さば、愈ゑんと欲す。傷寒熱少なく厥微にて、指頭寒く、食を欲せず、数日に至つて、熱除き食すことを得んと欲するは、其の病愈ゆる者の如きは是なるのみ」と。此の説稍当る。蓋し平素陰虚し、上盈下虧する者は多く遽に厥陰に變ず。更に陽明の病過下による者有り。陽明の病中に開く。又麻黄升麻湯の條の証は、明らかに上熱下寒に係る。而して「傷寒六七日大下して後」と云へば、則ち陽証過下して、變じて厥陰と為るを知るべし。蓋し彼の條は、其の方疑ふべきも、其の証は疑ふべからず。其の証為るや、消渴、氣上つて心を撞き、心中疼熱し、饑ゑて食すことを欲せざる者は、上熱の徵なり。「氣上つて心を撞く」は、邪火上迫の為す所、「心中疼熱す」るは、懊憹の甚だしきなり。「饑ゑて食すことを欲せざる」は、熱上焦に壅るを以て、故に腹中饑ゑると雖も食すことを欲せず。瓜蒂散の証に、亦饑ゑて食すこと能はざる有り。蓋し涎と熱と其の因異なると雖も、其の情は則ち相似る。食すれば則ち虻を吐し、之を下して利止まざる者は、下寒の徵なり。下寒は中下二焦を謂ふ。楊氏謂ふ所の熱上焦に在りて、中焦下焦虚寒し熱無きのみとは、是なり。『金

匱』湿病に、「丹田に熱有り、胸上に寒有り」の語有り。先君子寒熱の字を錯易し、之を説と為し曰く、『巢源』に「冷熱不調の候」有り、云く、「陽が上に并べば則ち上熱す。陰が下に并べば則ち下冷す」と。而して上冷下熱の証無し。其の故は何ぞや。蓋し火性は炎上し、水性は下に就く。病冷熱調はざれば、則ち熱必ず上に浮き、寒は必ず下に沈む。是下熱上冷の候無き所以なり。凡そ誤下の証は、下焦の陽驟に虚し、氣必ず上逆す。則ち上焦の陽は、反つて下に因つて実と成る。火氣は下行せざるを以て、故に上熱下冷の証を為す」と。此の言誠に本病の理蘊を發す。故に今更に茲に拈す。又嶺南『衛生方』に、載せる李待詔『瘴癘論』に云ふ、「余は嶺南の瘴疾の証候を觀て、或いは一ならずと雖も、大抵陰陽各升降せず、上熱下寒する者は、十に蓋して八九なり。況んや人の一身の、上焦は丙丁火に属し、中焦は戊己土に、下焦は壬癸水に。上は固より常に熱し、下は固より常に冷ゆ。而して又此の陽燠陰湿和せざるの氣に感じて、自ら上熱下寒の証多きなり」と。此亦一理なり。仍ほ之を附存す。是は寒熱二証が一時に併見する者なり。故に治法も温涼兼施を以て主と為す。烏梅丸の如きは、實に其の对方と為す。吐蚘の機は、従つて詳釈を欠く。意を以て之を揣るに、蚘は寒を去つて温に就く。故に上つて其の膈に入り、蚘は膈に在る。故に心煩す。然し膈上は蚘の宜しく久留すべき地に非ず。故に旋めぐつて胃に下る。故に須臾に復た止む。胃陽に権無ければ、食を得ると雖も徒らに濁壅を増す。故に嘔す。而して蚘も亦随つて動ず。故に又煩す

るなり。蚘は食臭を聞いて出づる者なり。言はば蚘は食入を為し、而して其の所を安んぜず。復た上膈に出づ。乃ち勢ひ嘔に從つて出でざるを得ず。此其の人当に蚘を吐すべき所以なり。再び按ずるに食を得るとは、食し畢つて後を謂ふに非ざる似し。或いは是稍筋を下せば、則ち嘔し又煩するなり。此を蚘が食臭を聞いて、膈に上出する故と為す。之を病者に驗するに、往往然りと為す。上説未だ必ずしも是ならず。然し提綱に「食すれば則ち蚘を吐す」の語有れば、姑く之を両存す。○陶隱居曰く、「椒は実を去り、鎗中に於いて微かに熬り、汗を出さしめれば、則ち勢力有り」と。又当帰は『本草』に中を温むと称して古方にては多く散寒に用ゆ。蓋し此の方に用ゐる所は亦温散に取る。且つ本病虚燥なれば、特に姜附を用ゐるに、殆ど其の僭なるを畏る。故に更に参帰を配す。是は潤養の功も亦自ら其の中に寓すなり。乾姜黄芩黄连人参湯も亦宜しく適用すべし。此の條は必ずしも本病の正証を謂はず。然し其の方は固より上を清し下を温む。故に用ゐて本病を治し、屢々応驗を見る。喻氏曰く、「本自ら寒下し」は、是其の人の平素胃寒し下利するなり」と。張氏曰く、「本自ら寒下し」は、其の人下虚するなり」と。並に未だ穩やかならず。要するに其の譌脱を強解することを得ず。然し大旨は本々、是は胃虚膈熱なるに過ぎず。医誤つて吐下す。故に熱は上に搏つ。而して冷は下に甚だしきなり。「医復た吐下す」の「復」は、当に「反」義に為して読むべし。黄元御曰く、「本々自ら内寒あつて下利し、医復た之を吐下すれば、中気愈々敗れ、寒邪

阻隔し、胃氣 更に逆し、脾氣 更に陥り、吐下 止まず。若し食 方まきに口に入れれば即ち吐するは、是中脘の虚寒なり。上焦に熱 有れば、乾姜黄連黄芩人参湯に宜し。乾姜 人参は中脘の虚寒を温補す。黄連 黄芩は上焦の虚熱を清泄するなり」と。此の説稍 妥なり。又 黄仲理曰く、「翻胃の初めに亦 用ゐて逆を止めて中を和すべきなり」と。柯氏 曰く、「凡そ嘔家で熱を夾む者は、香砂 桔 半を利せず。此の方を服して晏如たり」と。○更に上熱下冷の軽証有り。兼変の熱鬱に出づ。又 滞下 劳瘵 痘癘 等で、其の病の極に上熱下冷を為す者は、多くは治し難し。寒熱 勝復する者は、其の来路 大約して前証と相均し。而し勝復 有る所以の者は、人身の陰陽の消長と邪氣の弛張とに在るのみ。本篇第九條は、汪氏 注するに、寒熱 勝復の証を以て、分かちて自愈、陽脱、陽復 不及、陽復 太過の四等と為す。殆ど詳覈を為す。魏氏は則ち程氏の勝復の説を哂ふ。多く其の量を知らざるを見る。張兼善 曰く、「陽 極まれば則ち陰 生じ、陰 極まれば則ち陽 生ず。此 陰陽 推盪、必然の理なり」と。『易』に云ひ、「窮すれば則ち変ず」と。窮するとは至極の謂なり。陽 至極して陰を生ず。故に陽病に厥冷の証有り。陰 至極して陽を生ず。則ち厥逆する者に発熱の條 有り。凡そ厥 深ければ熱 亦 深しと言ふは、万事の極にして変ずるの常なること亦 篤論なり。○第七條に、錢氏は「復た発熱三日にて利 止む」の七字を補ふ。其の説 甚だ精し。或いは曰く、「按ずるに、上下の文は必ずしも補はずして義 自ら通ずるは、何ぞや」と。「厥して反つて九日にして利す」と云ふ。故

に承けるに「凡そ厥利する者云云」を以て、文脈相連接す。蓋し「食するに索餅を以て」して熱来る者は、必ず「厥して九日」の後に在る是一日。「後日之を脈す」が、即ち其の翌を指さす。是一日。「且日夜半愈ゆ」るが、是一日。併せて三日と為す。故に下文に結して「復発熱三日」、前の六日と併せ、九日と為すと云ふなり。果して錢の言の如ければ、則ち冒首より「三日利止む」に至り、自ら一截と為す。殊に語意の重複するを覺ゆ。此の説或いは理有らん。按ずるに此の証は「索餅を食して後」に、分ちて三証と為す。一は発熱せずして自ら愈ゆ。此は胃氣に守有り。食を為して泄らさず。能く食す乃ち佳兆と為す。一は除中と為す。暴かに熱来出して復た去る。一は熱来たつて続いて在る者と為す。錢注は瑩あきしらかさを欠く。故に『輯義』には汪魏を引き、以て之を糾補す。尤氏曰く、「不発熱」の「不」字は当に「若」に作るべし」と。謬りなり。○第十條の「厥する者は必ず発熱す」は、程氏は「厥は必ず発熱従り之を得る」と曰く。恐らくは然らず。軒熙曰く、「本経の「必」字は多くは定日後を預沢する辞なり」と。此の言是と為す。蓋し此の章は熱内に伏して厥外に見る証を言ふ。或いは前に厥する者有り。是は熱先ず裏に鬱し、後日必ず熱外に発す。或いは前に熱する者有り。是は熱先ず外達し、後日必ず熱内に閉じて厥す。「必ず発熱す」「後必ず厥す」の二句は是双関法なり。且つ既に厥すれば当に之を下すべしと言へば、則ち此の厥は明らかに熱鬱の致す所に属す。実に外厥の微甚を以て、裏熱の浅深を卜ふなり。其の証

厥熱は各々発するに、一時に相兼ねず。故に治法は、其の発熱に方りては、則ち涼薬を用ひ、其の発厥に方りては、則ち温薬を用ひ。調停 審酌し、始めて轍を合すと為す。倘し其の機を失すれば、必ず偏害を為す。秦氏『傷寒大白』に曰く、「厥 少なく熱 多く、熱 除かざれば必ず便 膿血す。熱病は陰を回し、陰証は陽を回し、均しく過と不及とを怕るるを見るべし」と。是なり。喻氏 曰く、「按ずるに厥陰篇中、次第 一ならず。純陽にて陰 無きの証 有り。純陰にて陽 無きの証 有り。陰陽 差多 差少の証 有り。大率 陽脈 陽証には、当に三陽経の治法を取用すべし。陰脈 陰証には、当に少陰経の治法を合用すべし。厥陰の病に陽を見るは愈ゑ易しと為す。陰を見るは痊え難しと為す」と。喻の此の説に拠れば、本篇の清涼の諸方は、恐らく其 陽勝と為して設け、温補の諸方は、陰勝と為して設くるなり。唯 中間に必ずしも本病に係らざる者 有り。豈 類を以て之を隸するに過ぎざらんや。○当帰四逆湯の條は、錢氏 柯氏の注 固より是なり。或いは曰く、「此の條の厥は、当に厥熱 勝復の厥なるべし。蓋し其の寒は本々輕し。但 一時 血氣 通ぜず、仍ほ厥寒を致し、而して亦 熱内に伏する有り。故に姜 附を用ゆれば、則ち恐らく後日 喉痺 口爛 便膿血 等の変 有らん。此 別に一方を立て之を主治する所以なり」と。此の説 従ひ難し。又 程氏 曰く、「血虚 停寒とて、特に下すべからざるにあらざるなり。並びに亦 温を用ひ難し。蓋し姜附輩の僭にして燥なるを慮るなり。須く以て経を温め、而して潤を潤し陽を和するを兼ねて、却つて陰を益するを兼ねて治と為すべ

し」と。周氏曰く、「通草に至つては、『本経』其の九竅及び血脈關節を通利すと称すれば、則ち諸藥亦通草の功を得て、阻滯を破つて厥寒を散ず」と。両説亦当を失す。姑く録して攷に備ふ。此厥陰の病の要領なり。仲景の死証を挙ぐるは、少陰特に多し。而して厥陰反つて少なし。此の理甚だ妙なり。人身は陽を以て重しと為す。厥陰は則ち寒熱相錯す。用藥に顧忌する所有り。然し之を少陰の純寒に比すれば、猶ほ陽存して有るのみ。周氏は陳氏の少陰厥陰の辨を載せるも、其の説覈を欠く。故に録さず。之を要すれば、上熱下寒と寒熱勝復とは、均しく伝はる所無し。其唯陰陽和平すれば、病当に快瘳すべし。

傷寒論述義卷第二終

述合病併病

合病 併病とは、表裏 俱に病む、是なり。其の邪に感ずるに方り、表裏 同時に病を受くる者、之を合病と謂ふ。表 先に病を受け、次いで裏に伝はり、而して表邪 猶ほ在る者、之を併病と謂ふ。合病は則ち劇しく、併病は則ち易し。此合 併の略なり。此は成氏に本づく。諸家の論ずる所は多く穿鑿を失す。徐大椿 曰く、「同起する者を合病と為す。一経 未だ罷まざるに、一経 又病む者を、併病と為す」と。亦 約当ると為す。張介賓 曰く、「今時の病は則ち皆合病 併病のみ」と。概論と謂ふべし。

合病 総じて四証 有り。曰く太陽陽明、曰く太陽少陽、曰く少陽陽明、曰く三陽、是なり。太陽陽明は熱 表に盛んにして、勢 裏に迫及し裏氣 擾動す。下奔すれば則ち利し、上逆すれば則ち嘔す。治するには其の表を発すれば、則ち裏は随つて和す。此の証の蓋し胃実の候を見ざ

るに、其の陽明と稱するは、唯是裏氣擾動を指して言はん。方氏曰く、「下利せず」は、乃ち「必ず自下利す」に對して言ふ。兩つ相反の詞なり。彼此互いに相發明すと為す所以なり」と。斯の説は妄の似し。又此の病は邪熱頗る劇しく、裏氣随つて擾るみだ。蓋し表裏に非ざるに自らば、此の如くに至らざらん。是は桂枝湯を用ゐざる所以なり。或いは下利し、或いは嘔し、氣機稍内より泄れる。是麻黄湯を用ゐざる所以なり。是を以て特に葛根に取ること有らんや。○汪氏曰く、「成注は、裏氣虚して即ち和せずと為す。真虚と作して看るべからず」と。又曰く、「成注に云ふ、「裏氣上逆して下らざる者は、但嘔して下利せず」と。愚以て其の人胸中に必ず停飲有る故とす」と。更に喘して胸滿する者有り。亦表裏裏壅に過ぎざるなり。中西惟忠曰く、「此邪胃に実すと雖も、先ず其の表を發し、然る後に之を下す者なり」と。参を存すのこ。太陽少陽は、太陽を輕しと為し、而して少陽を重しと為す。故に治を清熱通壅に取る。蓋し此の証に敢へて柴胡を用ゐざるは、病勢下迫し、邪必ずしも本位に鬱せざるを以てならん。多く芍薬を用ゐるは亦通壅に取るなり。陽明少陽は少陽の邪輕くして、陽明の病重し。下利する所以の者は、猶ほ是熱結傍流するによる。故に治するに快薬に宜し。經文を攷ふるに、必ずしも主るに大承氣ならざるに似たり。然し『明理論』には、斷じて其の對する所と為す。當ると為す。此の三証は、兩位の病は相均齊せず。故に治を施すに其の重き所を責むるなり。軒邨曰く、「疫毒痢証の治は合病の下利の機に外ならず。善く其

の趣を広むれば、則ち他求を仮らずして左右原に逢う」と。此の言は誠に千古の秘を發す。蓋し本病に亦疫痢の理を參ずれば、則ち其の義更に昭らかなり。唯合病は必ず更に數証有り。今は大抵下利を以て的と為す。愚未だ其の故に達せず。且つ後攷を俟つ。三陽の合病は其の証二つ有り。其の一、周身に熱熾んに、邪の陽明に聚る者多しと為す。故に主るに白虎を以てす。陽明篇に掲げる所是なり。其の一、邪の少陽に聚る者多しと為す。少陽篇に掲げる所是なり。此の説尤氏に本づく。曰く、「此の條は熱の少陽に聚る者なり。太陽陽明を視るに較ぶるに多し。設し治法を求むれば、豈白虎湯の能く尽くす所ならんや」と。攷ふるに錢氏は主るに白虎を以てす。故に尤に斯の言有り。愚意おもうに恐らくは是は小柴胡加石膏の宜しき所ならん。又風温は此の二証と相似る。詳しくは彼の條を見よ。此の他に、「陽明中風、口苦く咽乾き」と「陽明の病、脈浮にして緊に、咽燥き口苦く」とは証候恰も合す。而して實に三陽合病に係る。其の脈候に拠れば、則ち表に専らなる者なり。「陽明中風、脈弦浮大」も亦是三陽合病にして、殆ど少陽に専らなる者なり。此合病の要領なり。『素問』に謂ふ所の兩感即ち三陽合病なるのみ。朱氏は太陽中篇四逆桂枝の條を以て附湊し説を為す。殊に深き誤りに属す。故に劉完素趙真に既に詳辨有り。宜しく閱すべし。三陰の病は、則ち機各々異なると雖も、而し其の位相同じ。此合病無き所以なり。龐氏曰く、「三陽に皆合病有り。惟三陰に合病無し」と。此の語然りと為す。而して李梴『医学入門』には之を

非とす。反つて謬りなり。

併病は僅に二証。曰く二陽、曰く太陽、少陽、是なり。二陽なる者は、太陽の病を發汗して徹せず、邪氣進んで陽明に入り、而して表証仍ほ在る者なり。治法は先ず其の表を解し、表解し已つて其の裏を攻む。此の條は竊に攷ふる所有り。今左に陳ぶ。曰く。此は当に三截に作して見るべし。蓋し二陽併病にて、其の等同じからざるを示す。條首より「此の如く小しく汗を發すべし」に至るがは一截なり。此は邪既に裏に属し、而して表僅に存る者なり。故に須く小しく汗を發すべし。「設し面色縁縁として正赤」の三句までが、は一截なり。此は表の熱鬱甚だし。故に裏氣益々壅ぎ、相併に以て面赤と為る。陽明篇に謂ふ所の「面合赤色」なる者は即ち一類なるのみ。然し此の他見証は必ず数端有り。殆ど意を言外に寓するなり。熏法は、陳廩丘張苗は並に「連に汗を發し、出でざるに之を用ゆ」と謂ふ。是は汗法中に在つて最緊なり。乃ち其の病の重きこと見るべし。「若し汗を發して徹せず」より條末に至つてがは一截なり。此は前証に比べ稍輕し。「言ふに足らず」とは、猶ほ未だ言ふに至らざるごとし。「腹滿減らず。減ると言ふに足らず」と同義なり。此の三字は当に下文に接し十字一句と為して讀むべし。上文の「表に在り」の二字は、『玉函』には「越することを得ず」に作る。以て互いに証すべし。但し煩躁の状は病稍重き似し。然し「乍ち腹中に在り、乍ち四肢に在り」れば、恐らく未だ必ずしも煩憤躁擾の謂ならず。嘗て一人、汗を失して表鬱し、

兼ねて胃実を以てする者を療ず。胸腹攪刺し、走注定まらず、正しく此の証と吻合す。汪氏曰く、「短気す」るは、邪熱壅つて気促急するなり。「但坐す」るは、臥することを得ざるなり。汗出だして徹せざれば、營気は條達することを得ず。則ち「脈洪る」。『條辨』は洪脈を以て血虚と為し解す。大誤なり」と。此の説是なり。此の三等の証は、強ひて其の方を擬すれば、則ち「小しく発す」るに桂枝を以てし、「之を解す」るに程氏に拠つて大青龍を用ゐ、「汗を発す」るに龐氏に拠つて麻黄を以てして可ならん。陽明篇の桂枝麻黄の二條及び桂枝承氣の條の如きは亦是此の証なり。其の治は則ち先表後裏の法なり。太陽少陽は、其の二條は俱に刺法を用ゆ。而して其の一條は誤下結胸と為す。然し柴胡桂枝湯の如きが実に其の正方なり。而して柴胡桂枝乾姜湯は其の兼ねる所有る者なり。少陽と陽明との併病は則ち其の称を見ること無し。然し大柴胡湯は其の對方為り。而して柴胡加芒消湯は其の奇治なり。「陽明の病、潮熱を發し、大便溏し云云」の小柴胡湯の証も亦即ち是なるのみ。此の條は是胃実にして邪猶ほ少陽に存する者なり。其の次條は是少陽にして胃実の似き者なり。兩條対示す。乃ち太陽中篇四逆湯の條と同例なり。此併病の要領なり。三陰に併病の無きこと、理は合病と同じ。唯太陽厥陰の桂枝四逆各施及び太陰の桂枝の証の如きは、即ち是表熱裏寒相兼ねる者なり。殆ど併病の変局ならん。鄭端友『全嬰方論』に痛に半陰半陽の合病有るを論じて、即ち寒熱相兼ねる者と言ふ。○按ずるに裏兼証の治は、表熱裏寒すれ

ば則ち裏を先にして表を後にするは何ぞや。先ず裏を実するは、脱候たつこう 倏たちち至り、邪亦従つて陥るを恐れるなり。裏既に実すれば、而してことを表に従ふも亦遅しと為さず。設し先に表を救はば、則ち虚耗の陽は汗に随つて益々奪はる。豈邪氣の外散を望まんや。表熱裏実なれば、則ち表を先にして裏を後にするは何ぞや。先に表を攻めるは、表邪併入し裏熱壅重するを恐れるなり。表既に解すれば、而して事を裏に従つて亦遅しと為さず。設し先に裏を攻めれば、則ち胃空しく邪乗じ、遂に壞病と為る。豈邪氣の内解を望まんや。此仲景の明律なり。○六病正証の外に、表裏の証有る者は、葛根芩連湯 五苓散 桂枝人參湯等の証、其の類甚だ多し。然し之を併病と謂ふはかた匡し。仍ほ此に列せず。

述温病風温

温病は、熱結裏に在り、表裏俱に熱する証、是なり。即ち陽明の病の一証なり。此の病は前注『内経』温病の義と為す。間々謂ひて白虎の証と為る者有り。猶ほ彼と強合す。特に王氏柯氏は以て傷寒中の一証と為す。惜しむらくは辨微覈らかならず。今因つて其の説を演じて曰く。『内経』に謂ふ所の温病は、冬に寒に傷られ、寒邪内伏し、春温を得て方に発するの謂

なり。本經の三陽三陰及び中風傷寒等は、其の名は則ち之を『素』『難』に取れど、而し其の証は則ち自ら異なる。豈特に温病に至り、既に其の名を取り、又其の証を併せて之を取らんや。況や全經本々時に従つて病を分かつの説有らざれば、則ち仲景謂ふ所の温病は、傷寒中の一証爲ること明らかなり。且つ『素問』瘧論を攷ふるに、先熱後寒を以て温瘧と爲す。而して仲景は則ち身に寒無く但熱するを以て温瘧と爲す。其の「骨節疼痛」有るを以ての故に白虎湯中に桂枝を加へ、以て裏を清くし表を發す。見るべし温病の温は温瘧の温と均しく是熱盛の謂なることを。温熱は互称にて、猶ほ冷と寒とのごとし。『素問』には「春必ず温病たり」、『靈樞』論疾診尺篇には「春必ず瘧熱を生ず」と作し、『太素』には「春乃ち熱を病む」、又評熱病論の其の首節に病温陰陽交を説く。而して倉公伝に則ち曰く、「熱病陰陽交する者は死す」と。又熱病を刺すに五十九穴有り。而して叔和則ち曰く、「温病を治するに五十九穴を刺す」と。許氏『説文』に曰く、「熱は温なり」と。並に以て徴すべし。此の條冒頭の三字は蓋し来路を揭示せる者なり。曰く「渴す」曰く「惡寒せず」と。俱に是表解して裏熱するの候なり。則ち發熱は、其の初めは太陽の翕翕たる熱にして、今は陽明の蒸蒸たる熱と爲る。然らば則ち「熱結裏に在り、表裏俱に熱す」と何の差別あらん。愚故に以為らく温病は即ち白虎の証を称して謂ふなりと。○温病の條は之を太陽に列するは、亦猶ほ小柴胡の例のごとし。然し其の表証に非ず、而して叙するに篇首に在るは、豈叔和『五十八

難』に拠り、徒に其の名を執り、以て中風 傷寒と相排比を作す者ならん。傷寒例第一節に、列して傷寒 温病 暑病 等を辨ず。其の意を知るべきなり。愚 固より撰次の得失を議するを欲せず。特に此の條に於いては、則ち疑ひ無きこと能はざるなり。其の来るや必ず太陽如しくは少陽よりし、其の少陽よりなるは、謂ふ所の「柴胡湯を服し已つて渴する者」に、寓して其の義有り。大抵 白虎の証は之を得て其の人 陽氣 偶々擾れ、而して邪氣 乗じて入り、進勢殊に急なる者なり。今 多く之を見る。經に云ふ所は恐らく其の機ならん。然し亦 未だ誤治に因つて致す者 無きこと能はざるなり。而して毒邪 暴進し、直に裏に陥入し、内灼 外熏し、勢ひ原を燎く如し。故に其の脈は浮滑 洪大なり。『呉医彙講』に薛雪 曰く、「傷寒 脈 浮滑」は、此表に熱有り、裏に寒有り。表の熱は寒の用、裏の寒は熱の体なり。言ふに熱病は寒に本づく。寒は既に病みて熱と為る。則ち体用 皆熱なり。漢の文法 此の如し」と。是の説蓋し諸々方氏に本づかん。又『活人書』は、改め「表裏に熱有り」と作す。而して郭氏は之に従ふ。汪氏も亦 曰く、「斯の言乃ち定論と為す」と。然し未だ臆見を免れず。又黄氏には林氏に拠つて更に詳論有り。文繁なれば録さず。其の証は、蒸蒸 發熱し、自汗 出で、心煩 大渴し、白虎加人參湯、及び五苓散の條に言ふ所の「煩渴」は自ら余諸條を參ずれば、蓋し「煩して渴す」るの謂なり。成氏は以て熱渴と為す。爰らざる似し。舌上 乾燥し、冷水を飲まんと欲す。然し燥屎 搏結すること有らざれば、唯是 胃家 焦燥するなり。因つて白虎湯を立て、

以て之を清涼す。愚嘗て謂ふ此の湯の妙は粳米に在りと。何なれば、凡そ物の胃に慣れざるは金石を最もと為し、物の胃に慣るるは米穀に如くは莫し。今極めて慣れざる者を用ゆ。故に配するに極めて慣るる者を以て、其の中土を損なはざらしむ。竹葉石膏湯 桃花湯の粳米、厚朴麻黃湯の小麦、消石礬石散の大麦粥汁の如きは皆是なり。詳義は拙著『藥治通義』第十卷を見よ。又「石膏一斤碎」の下に、当に「綿裹」の二字を補ふべし。厥陰篇方中に之有り。陶隱居曰く、「湯酒膏中に諸石を用ゐるは、皆細く之を擣いて粟米の如くし、亦葛布を以て篩い調はしめ、並に新綿を以て別に裹んで中に内るる」と。如し其の太陽誤汗吐下により、而して液乏を加ふる者は、人參を加へ以て之を滋養す。或いは曰く、「加入參湯の証に二つ有り。其の一は本方の証にして更に液乏する者なり。其の一は液乏しからずと雖も、其の病稍軽く、本方に耐へざる者には、人參を佐にして以て之を調停す」と。未だ是否を知らず。又『千金』『外台』加入參の諸條に、一つは本湯を用ゆ。恐らく是に非ず。但白虎の脈証は本湯に略し。而し反つて加入參湯に詳し。殆ど疑ひ無しとせず。○太陽上篇の加入參の條、汪氏曰く、「此の條は当に是太陽の証罷み、転じて陽明に属す証なるべし。其の陽明篇に入れざるは、其の桂枝湯を服して後の変証なるを以てなり。且つ上條と脈証相同じ。但煩渴を加ふる薬を用ゐるの膏壤、前賢書に著くに、後学をして心を悉くすを体認せしむ」と。設し其の治を失すれば、則ち胃津枯竭し、遂に救ふべからず。其の変じて或いは胃実と為る。而し敢へ

て陰証と為らざるなり。白虎承氣の別は実の有無に在り。則ち變じて彼の証為るに宜しからざる似し。然し今に在りて之を驗するに、往往之有り。況んや三陽合病には既に腹滿譫語有れば、則ち其の理見るべきなり。

風温は温病の類証なり。「脈陰陽俱に浮」なるに拠れば、則ち表に邪有る者の似し。其の証は三陽合病と相近し。治法も亦恐らくは白虎の宜しき所ならん。此の條は解し難し。程氏の注は文理に於いて順と為す似し。然し愚竊に疑ひ有り。何なれば則ち表裏の熱盛んなるに、倘し誤つて之を汗すれば、必ず大いに津を傷り、恐らく更に「陰陽俱に浮」には至らざらん。成氏は以て傷寒發汗の後に、方に其の風温なるを知ると為す。是病理に於いて順と為す似し。今其の義に就いて別に一説を發す。此は太陽の病汗を發し、当に解すべきに解せざる者、特に表にのみ邪有るにあらず、而して裏に既に熱有るを言ふ。其の之を風と稱するは、猶ほ風家風湿の風のごとし。即ち表に邪有るの謂なり。然らば則ち風温は温病の表を兼ねる者と為す。故に一條中に併せて之を論ず。然し啻に汗して後に之を知るにあらず。自ら認得真的有り。故に下文に先ず「風温の病為る」の一句を掲げて其の証を尽くす。「若し下を被れば」、「若し火を被れば」は程氏に従へば、則ち是は温病の誤治に係る。成氏に従へば、則ち是は風温の誤治に係る。未だ何れの是なるかを審にせず。又成氏曰く、「先ず曾て火を被るを一逆と為す。若し更に火を以て之を熏ずれば、是は再逆なり」と。蓋し『玉函』に本づかん。程氏は則

ち「若し火を以て之を熏じ」を謬つて「体煙熏の如し」と為す。故に一逆再逆は汗下等の誤治と為す。又汪氏は「小便利せず」の字を疑ふ。然し太陽中篇に、「小便せんと欲して得ず、反つて嘔し失溲せんと欲す」の文有り。蓋し同例ならん。又此の病を三陽合病と相近しと謂ふは、何ぞや。彼は「脈浮大、関上に上り」と曰く。此は「脈陰陽俱に浮」と曰く。彼は「若し自汗出づる者」と曰ひ、又「目合すれば則ち汗し」と曰ふ。此は「自汗出づ」と曰ふ。彼は「身重く以て転側し難し」と曰ひ、此は「身重く」と曰ふ。彼は「但眠睡せんと欲し」と曰ひ、此は「多く眠睡し、鼻息必ず鼾す」と曰ふ。彼は「口不仁」と曰ひ、此は「語言出で難し」と曰ふ。彼は「遺溺」と曰ひ、此は下を被つて「失溲す」と曰ふ。但彼は胃寒を兼ね。故に「腹滿讞語」有り。其の他は則ち証証相合すこと此の如し。殆ど一病にして其の名を異にする者なるのみ。義は蠡見に出づ。姑く録して識者を俟つ。○『総病論』の「病人素々風に傷られ医之を殺すに至るのみ」とは、本々『玉函』『脈経』の不可発汗病中に出づ。「温風の病為る云云」は全く『千金方』に取る。但し『千金』は「温風の病」と作す。「温風」の二字は蓋し錯ならん。

傷寒論述義卷第三終

傷寒論述義卷第四

丹波元堅学

述壞病

壞病とは、誤治の後に、陰陽復び綱紀無く、証候変乱し、正名を以て名づけ難き、是なり。巢源の有時氣敗候に曰く、「此は病後に余毒未だ尽きず、形候変転し、久しく瘥多ず、陰陽復た綱紀無きを謂ふ」と。壞病の義は、之を得て蓋し益々明らかならん。蓋し壞は崩壞なり。猶ほ牆壁の壞れば、之を牆壁と言ふことを得ず。其の証候変乱し、以て正名とし難き者は、已むを得ず姑くは壞病を以て之を命ず。他意有るに非ず。方氏曰く、「血氣既に憊壞す」と。張志聡曰く、「自ら敗するを壞と曰ふ」と。二説失と為す。方氏又曰く、「壞とは、諸治を歴遍して愈多ざるを言ふ」と。此亦あたらず。一誤にても亦壞病と為す。必ずしも諸治を歴遍せず。三「若」字を玩へば自ら知る。程氏柯氏の解する所は極めて是なり。志聡又曰く、「已に汗を發すれば、則ち肌表の邪は已に去る」と。此の語亦病有り、發汗節を違へ、亦

壞病と為る。且つ壞病中に、表猶ほ在る者有り。桂枝加附子 去芍薬の類が是なり。○少陽篇の壞病の條は解し難し。「脈沈緊」を『金鑑』では改めて「沈弦」に作る。然し「沈」字遂に通ぜず。尤氏に説有るも、亦穩貼を欠くゆえ録さず。其の「讞語」の一証を掲げるは、豈唯邪の転じて裏に入るを謂ふ者ならんや。然し巢源に従つて「讞語」の二字を削らば、義は稍勝るに似たり。「柴胡の証 罷み」とは小柴胡の証 罷むを指す似し。必ずしも柴胡諸方を用ゆべからざるにあらざるなり。或いは之を誤汗に得、或いは之を誤下に得、或いは誤吐、或いは温鍼、而して營衛 乖錯し、邪熱 沈漬す。或いは上焦に著き、或いは血分に迫り、或いは陽氣 虚僊し、或いは陰液 竭乏し、或いは水飲 拍搏し、或いは湿熱 内蒸し、劇易 緩急、種種 同じからず。皆是 素稟の強弱、宿疾の有無と誤逆の輕重とに因り、而して異 有るのみ。謂ふ所の汗後の汗漏し 絳を動じ、胸滿 悸築、下後の結胸 痞鞭、協熱下利、吐後の内煩 吐食、火逆の驚狂 奔豚の類、其の証 多端にして、枚挙に勝えず。今 其の情機に就いて、之に区辨を為せば、諸兼証を併せ、以て後に述ぶ。故に茲に詳にするを得ざるなり。喻氏曰く、「陽明に何を以て壞病 無きや。曰く。陽明は之 誤治 最も多く、其の脈証 固より当に辨別すべし。但 壞病を以て之を名づくることを得ざるなり。蓋し汗下 燒鍼 屢々誤らしむるも、其の病亦 止 胃中に在らん。原々定法 有つて施すべし。壞証の定法 無きの例と微に協かなわざること有り」と。錢氏曰く、「六經の中、仲景 独り陽經の太少を以て言を為すは、蓋し表に在つての誤治

が多く居り、裏に在つての誤治が少なきを以てならん。且つ二経の表裏虚実は疑似して端多く、察識に於いて難し。其の誤治独に多く、変逆尤も甚だし。其の害勝多ると言ふべからざる者有り。故に特に此の一法を立て、以て其の事を重んずるなり。学者其の忽すべき諸々を、今攷ふるに陽明は壞病無きこと能はず」と。錢説優ると為す。三陰亦壞病を言はず。蓋し其の最も有ること罕なる者ならん。○『活人書』に曰く、「蓋し病中に又異気を感じ為るは、変じて壞病と為る」と。此は傷寒例の「若し更に異気を感じ、変じて他病と為る者は、当に後に壞病の証に依つて之を治すべし」の一語を謬読せるに係る。趙氏に辨有るも、未だ覈らかならず)

述兼変諸証

兼変とは兼挟変壞の謂なり。仲景の立つる所は唯是三陽三陰なり。今更に此の目を設くるは豈愆あやまちならざらんや。曰く。否。経は六病に分かつと雖も、而し特り六病の正証のみならず、彼の六病の兼ねる所変ずる所、皆其中に具列し、倘し甄けんべん辨を加へざれば、則ち正証を併せて明らかにすること能はざるに至る。今此の目を設くるは、即ち学者をして正証と兼変とに於いて、能く判然別白せしむる所以なり。然し毎証必ず何病の類変と称すは、以て病の

條理を見れば、三陽三陰六つの外に出でず。曰く。然らば則ち漏汗動経の類の如きは実に壞病に係る。而し今更に仲景の未だ言はざる所の名を掲ぐるは、何ぞや。壞病は是誤治の後の變壞せる者なり。今斯の諸証は未だ病せざる前に兼ねる者有り、誤治を経ずして變ずる者有り。此が壞病を以て題すること能はざる所以なり。而して自ら此の名を立つるなり。其の分類は八つ。曰く虚乏、曰く熱鬱、曰く飲邪搏聚、曰く飲邪併結、曰く血熱瘀血、曰く熱入血室、曰く風湿、曰く湿熱寒湿が是なり。火逆諸証は少しく余義を述べべし。故に闕いて録さず。抑も前の注家、錢氏尤氏及び徐大椿の如きも、既に正變諸法を分かつ。然し冗難にして統べるところ無し。今敢へて従はずして云ふ。

虚乏

虚乏は、氣血虚乏、是なり。蓋し人身の氣血は相藉りて以て形骸を栄養す。故に氣虚すれば則ち血も亦虚し、血虚すれば則ち氣も亦虚す。然し稟に素々或いは偏勝有り、而して誤治に亦偏害有り。是を以て其の証は一ならず。平素液少なく徑ちに汗すべからざる者有り。平素虚弱にて病を得て更に加ふる者有り。発汗過多、及び汗下錯行し、氣血俱に虚する者有り。汗下度を失し、胸中の陽虚する者有り。誤下し中虚する者有り。誤下し下脱す

る者有り。大邪已に解し、胃虚し寒を生ずる者有り。大邪已に解し、胃虚し熱を生ずる者有り。皆病の虚に属す者なり。中間に未だ必ずしも変じて陰証に為らずと雖も、猶ほ未だ之を真に陰証と言ふに足らず。仍ほ併ともに此に類列す。程氏曰く、「汗多ければ陽を亡ふことは、夫れ人之を知るなり。然し人身の陽は、部分に各々主る所有り。外を衛るの陽有り。周身營衛の主と為す。此の陽虚すれば、遂に汗漏して止まず、悪寒し身疼痛するの証有り。腎中の陽有り。下焦真元の主と為す。此の陽虚すれば、遂に発熱眩悸し、身騞動して地に壁れんと欲すの証有り。膈中の陽有り。上焦心氣の主と為す。此の陽虚すれば、遂に叉手し心を冒ひ、耳聾及び奔豚の証有り。胃中の陽有り。中焦水穀化生の主と為す。此の陽虚すれば、遂に腹脹満し、胃中和せず、而して心下痞と成るの証有り。皆発汗の後に得る所と雖も、誤を救ふに在つては、須く其の脈証を觀て、何れの逆を犯せるかを知り、法を以て之を治す。汗後に陽を亡ふの一語を以て混同するを得ず」と。此の説は生姜瀉心湯下に出づ。殆ど精鑿を覺ゆ。内藤希哲に三焦に各々陽虚有り陰虚有りの論有り。蓋し此に本づかん。

平素液少なく、径ちに汗すべからざる者有りとは、何ぞや。蓋し其の人縦え汗すべき証有つても、倘し平素血液虧乏する者ならば、要するに須く顧慮すべし。胆を放ち治を施せば、必ず変敗を致す。「身疼痛」「尺中遲」の如きは、即ち其の明律なり。柯氏曰く、「脈浮緊

の者は脈法を以て論ずれば、当に身疼痛すべし。宜しく其の汗を發すべし。然し寸口浮緊と雖も、而し尺中遅なれば、則ち此の法に拠ることを得ず。尺は血を主る。血少なければ則ち管氣足らず。汗を發すと雖も、決して汗を作ること能はず、正氣反つて虚す。特り身疼除かざるのみならず、而して血を亡ひ津液を亡ふの変起こるなり」と。此の解亦約覈らかなり。禁汗の六條の如きは、俱に之を宿疾に驗するの法に係る。咽喉乾燥するは上焦の液少なき者なり。咽喉は津液上潮の道路なり。人曾て某かの故に『金匱』に叙する所の肺萎の因る所の類の如き有り。乃ち乾燥を為す。錢氏は専ら少陰に属すとす。拘りに似たり。尤氏曰く、「若し強ひて之を發すれば、乾燥益々甚だしく、效を為し、咽痛を為し、膿血を吐するを為し、至らざる所無し」と。淋家は下焦の津乾く者なり。成氏曰く、「膀胱の裏熱すれば則ち淋す。反つて湯藥を以て汗を發すれば、津液を亡耗し、客熱を増損し（一つは「益す」に作る）、膀胱虚燥す。故に小便血す」と。瘡家は軀殼の血乏しき者なり。瘡家とは蓋し金瘡家を謂ふ。此は軀殼の血乏しく、其の傷寒を得るや、倘し過つて之を汗すれば、筋脈益々燥き、遂に瘡病と為る。破傷風と其の由稍異なる。但下條にも亡血家有り。乃ち相複する似きなり。然し『金匱』にも亦亡血と身に瘡有るとを對待する者有り。亡血は血の内より亡ふを言ひ、此は血の外より失ふを言ふなり。瘡を致ふるに、古くは瘡瘍の義なり。『説文』に曰く、「刃は傷なり。刀に从い、一に从う。創は或いは刀に从い、倉声なり」と。大徐曰く、

「今俗に別かちて瘡と為すは是に非ざるなり」と。此に拠つて『平脈法』には手を以て刃を把り、坐を瘡と作すなり。『金匱』の「若し身に瘡有らば、刀斧に傷られ血を失ふ故なり」と並に本條と互徴すべし。瘍腫も古くは亦或いは創字を用ゆ。蓋し仮借ならん。衄家は血の上せに燥く者なり。「脈急緊」を尤氏は以て寸口の脈と為す。是に非ず。亡血家は血を内に亡ひて外随つて虚する者なり。張志聡曰く、「此は吐血便血、及び婦人崩淋亡血する者を言ふ」と。是なり。又「下後に汗を發し、振寒して、脈微細」なると其の機は相似る。汗家とは液の表に竭く者なり。張志聡曰く、「夫れ汗家は則ち其の水穀の精虚す。中焦の津液は心に入り化し赤くなつて血と為り、下つて膀胱を挟み、而して膚表に運行す。水穀の津液虚するに重ねて其の汗を發すれば、則ち上は心主の血液を動じ、而して恍惚心乱するなり。下は膀胱の藏する所を動じ、則ち小便已つて陰疼くなり。此の方は伝を失ふ。或いは配合すること有らん」と。又。伊沢信恬曰く、「此の條は、前後の諸條を攷ふれば、亦禁汗の例に係る。須く自ら一方を主とすべからず。蓋し「禹余糧丸を与ふ」の数字は衍文ならん」と。両説には理有る似し。此の六なる者は、血液虧く所の処各々異なる。故に過汗の変も亦各々殊なる。蓋し此の諸証は皆陰虚陽亢なり。劇しければ則ち必ず燥熱を益す。敢へて變じて陰と為らず。但液少なき人は其の表証を得て、偷し汗を發せざれば、恐くは邪解の日無し。乃ち当に別に関防を設くべし。是活通に在るのみ。汪氏の擬する所の諸方、小建中湯黄耆建中湯は最も

切当の似し。魏氏の瘡家に於いて葛根芩連湯を処するも亦当る似し。攷ふるに『外台』范汪論に、「黄帝岐伯に問ふて曰く、「当に汗を發すべきに、而して其の人適々血を失ひ、及び大いに下利すれば、之を如何せん」と。岐伯答えて曰く、「数少なければ桂枝湯を与へ、体を潤し熱と汗を纒むすかに出ださしむ。連日此の如くすれば、自ら当に解すべきなり」と。今更に經文を審にすれば、麻黄の証の虚を兼ねるに姑く桂枝を用ゐる者有り。則ち此の諸條の証にも或いは宜しく遵用すべし。他に栝樓桂枝湯の潤を兼ね、桂枝加芍薬生姜人参新加湯の補を兼ねるが如きも亦必ず適すこと有らん。桂枝加附子湯の如きは、或いは汗家に宜しからん。陽旦湯の涼を兼ねたる如きは、或いは血分の燥熱に宜しからん。竹葉湯の清温合用の如きは、或いは陽虚液燥に宜しからん。蓋し後賢の方法も亦須く時に臨んで酌用すべし。『金匱』に曰く、「夫れ病痼疾に加ふるに卒病を以てすれば、当に先ず其の卒病を治し、後乃ち其の痼疾を治すべきなり」と。然らば則ち此等の諸証も亦重ねて邪を逐ふに在り。但其の宜しく顧慮せざるべからず。最も活意變通を要す。豈是仲景の一方を定めざる所以ならんか。張焯の『傷寒兼証析義』の如きは徒に之を筌蹄の末に求めて毫も實際を裨おぎなうこと無き者と謂ふべきなり。

平素虚弱にて病を得て更に加ふる者有りとは、何ぞや。小建中湯の証の如きは、其の人胃中虚燥し寒有り、病を得て更に甚だし。一は則ち二三日、一は則ち少陽の病にして其の候を

見る。俱に此の方を用ゐ、以て中蔵を温建す。「腹中急痛」の條を汪注に就いて之を攷ふ。其の少陽の証を挙げざるは蓋し省文ならん。此は裏寒 少陽の邪の為に鼓動する所なり。故に「腹中急痛」の治法に先ず此の方を用ゐるは亦 猶ほ先ず四逆湯を与ふるの意のごとし。而して痛み未だ止まざる者は裏寒 散ずと雖も而し邪氣の胃を犯して致す所なり。故に換ふるに小柴胡を以てす。○陶氏 曰く、「方家の飴糖を用ゐるは乃ち膠飴を云ふ。皆是 湿糖の厚蜜の如き者なり。建中湯に多く之を用ゆ。其の凝強 及び牽白なる者は薬に入れず」と。○仲景の中焦を温養する剤は、建中 理中を実に相對して設く。建中は潤を主とし、理中は燥を主とす。而して俱に陽を救ふに取る。其の人 胃津 足らず、陽虚して寒を生ずる者は建中を以て液を和して中を温む。胃氣 足らず、陰寒 内に盛んなる者は理中を以て湿を逐ひて寒を散ず。蓋し温養の法は実に二方の範圍を出づること能はざるなり。灸甘草湯の証の如きは、素々常に上焦の液乏しくして邪に任たえざる者なり。故に此の方主り、以て之を滋養す。「脈 結代す」とは、是の二脈を兼ねて見るにあらず。要は歇止の謂に過ぎず。成氏 曰く、「心中 悸動すれば、真氣内に虚するを知るなり」と。汪氏 曰く、「悸は心動なり。心中 動悸すれば、則ち營血 内に虚するを知る。真氣 已に餒うえて蔵神 寧からざるなり」と。並に是は悸を以て心動の悸と為す。『金鑑』と同じからず。『玉函』に拠るは殆ど備ふべき一説なり。又『金鑑』にある、「心下築築云云」の「心下」の字は妥らず。当に是は虚里 臘中の動築なるべし。此の方は『金匱』

附方の虚勞を治すに載る。又肺萎を治す。俱に其の潤養の功を見るに足る。且つ経中の薬を濃煮する者は、本湯及び桂枝加芍薬生姜人参新加湯に如くは莫し。豈陶氏謂ふ所の補湯は熟を欲すの義ならんや。張氏『類経』に虚里の跳動は純甘にて水を壯んにする劑を以て真陰を填補するを論ず。其の説甚だ精し。以て此の方の理を發するに足る。宜しく參ずべし。又『医学入門』に曰く、「十全大補湯 十四味建中湯など一切の峻補の劑は皆理中建中 四逆等の湯より之を變化するなり。單なる甘草湯 滋陰降下湯 生脈散 補中益氣湯など一切の滋補の劑は皆炙甘草湯より之を變化せるなり」と。陽明の病、汗無く、身に虫行くが如き」者の如きも亦素虚の致す所なり。趙氏曰く、「虫の皮を行く状の者が即ち經に言ふ身癢、是なり。久しく虚する者は表氣 足らず、津液 皮膚に充たざるを以て、腠理をして枯澁し、汗出で難からしむなり」と。此亦一説なり。四十八難に曰く、「癢する者は虚と為す」と。

汗を發すること過多 及び汗下 錯行し氣血俱に虚する者 有り。何ぞや。甘草乾姜湯 芍薬甘草湯の証の如きは是 氣血 素々虧き、今 過汗に依つて更に益々虚乏す。而して其の証 各々見る。故に薬 亦 別に行き、先ず其の陽を救ひ、後に其の陰を救ふ。成氏曰く、『内経』に云ふ、「辛甘 發散は陽と為す」と。甘草 乾姜 相合して以て陽氣を復す」と。又曰く、「酸は以て之を収め、甘は以て之を緩む。酸甘 相合し、用て陰血を補ふ」と。芍薬甘草附子湯の証の如きも亦 氣血 俱に虚す。而して其の病 頗る重く既に少陰に變ず。治するに宜しく急に救ふ

べし。故に単捷の劑を以て之を双補す。桂枝加附子湯の証の如きは汗多く陽を亡ひ、筋脈の津燥き、其の表未だ解せず、脱勢亦劇し。故に此の方を用ゐ、陽を復し液を斂む。『聖濟』の産後に榮血虚損し、汗出でて日夕止まず、形体困怠するを治す附子湯は、本方に生乾地黄を加ふ。桂枝加芍薬生姜各一兩人參三兩新加湯の証の如きも亦是汗後の虚燥にて、其の邪已に除き、脱勢稍緩し。故に治するには漸救を取る。新加の名、注家多くは曲解を費やす。特り程氏曰く、「新たに人參を加へて、姜芍を倍す」と。因つて知る「新加」の字は、専ら人參を為して言ふ。蓋し芍薬は本方に固より有つて、人參は本方に無き所なり。故に彼は但加と言ひ、此は新加と言ふ。以て其の別と為さん。山田正珍の説も亦然り。或いは桂枝加大黄湯を執つて、以て此の説を駁さば、則ち拘りなり。此の二方並に亦双補にして、専ら陽を救ふ者なり。大青龍湯の逆二証の如きは、俱に桂枝加附子芍薬甘草附子湯の法を出でず。而して厥逆筋惕肉瞤は、乃ち其の重き者なり。此真武の証と、其の機同じからざる似し。如し張介賓の法に遵はば、則ち六味回陽飲、其の対治を為さん。脈浮数にて之を下して、身重く心悸すの証の如きは、即ち誤下にて虚を致す。過汗と同轍の者なり。程氏曰く、「津液下に奪すれば、則ち機関利せず。故に身重し。津液下に奪すれば、則ち上奉すること能はず。故に心悸す。恃む所表氣未だ虚さず。津液全く亡ふには至らず。只是之を和することとを要す。蓋し陰は陽に生じ、陰液耗る者は、陽氣必ず重ねて虧くべからず。表裏実すれ

ば、則ち津液 自づから和す。正を養ひて邪 自づから除くの意に過ぎず」と。按ずるに尺中以て陰を候ふ。故に程氏に此の解有り。太陽の病、先づ下して復た汗を発して、因つて冒を致す証の如き、其の病本軽し。故に汗下序を失して、氣血俱に虚す。此の條、汗下 先後の例と為して設く。臆を以て之を測るに、此本兼ねて表裏の証有り。医裏を以て急と為して、先づ之を下し、後表 仍ほ在るを見て、以て其の汗を発す。然して下を被る際に、表邪陥らず、亦表裏の熱、汗下に従つて解する似し。乃ち其の病俱に輕きことを知る。但汗下當を過ぎ、先後序を失するとを以て、而して表裏俱に虚することを致す。下後汗を発し、小便利せざるの如きは、是幸ひにも変壞に至らざる者なり。此等逆治を経ると雖も、能く他変無き者は、其の人胃氣本強し。○下後汗を發して、振寒し脈微細、及び乾姜附子の証は、俱に是既に少陰に属す。故に斯に列せず。汗吐下の後 自づから愈ゆる者の如きも、亦甚だしくは虚せず。且つ邪既に清解す。薬すること勿れとす所以なり。汪氏曰く、「此亦是当に汗すべくして汗し、当に吐下すべくして吐下す。故に陰陽和して自づから愈ゆるの日有り。誤つて汗吐下薬を用ゐる者の能く比する所に非ず」と。軒邨曰く、「此の條辨脈法と相發す。云ふ、戦せず汗出でずして解する者有り、何ぞや。答へて曰く、其の脈自づから微、此曾て発汗、若しくは吐、若しくは下、若しくは亡血を経るを以て、内に津液無きを以て、此陰陽自づから和すれば、必ず自づから愈ゆ。故に戦せず汗出でずして解す」と。是な

り。且つ下條亦津液を亡すと云ふは、則ち亡血なり。是諸失血の謂にて、亡津液は、汗吐下亡血を総ずるの詞なり。亦通ず。

汗下度を失し、胸中陽虚する者有り。何ぞや。桂枝去芍薬湯の証の如きは、誤下胸虚するに因つて、邪氣乗じて入り、以て胸滿を為す。故に芍薬を去る。然し表邪猶ほ在あり。故に桂を用ゐる表を散じ、亦其の陽を扶く。虚稍甚だしき者は、附子を加へ之を救ふ。脈促なる者は、邪著くこと高きに在るを以てか。『金匱』の「氣分、心下堅く大いさ盤の如く、辺り旋杯の如く、水飲作す所、桂枝去芍薬加麻黄細辛附子湯之を主る」又『千金』の「桂枝去芍薬加皂莢湯、肺痿にて涎沫を吐するを治す」並に本方と趣を同じくす。蓋し芍薬、腹滿に之を用ゐて、胸滿之を忌む者は、其の味酸澁にて膈に泥むを以てか。尤氏曰く、「芍薬を去る者は、酸寒の氣味、以て胸中の邪を留むに足り、且つ桂枝の性を奪ふことを恐る」と。是に近し。

○「微惡寒」、「千金翼」は亦「惡」字を脱す。攷ふるに此の証は、上篇末條中に亦之有り。乃ち陽虚の驗の似し。然し未だ何の故か審ならず。『金鑑』に曰く、「当に是汗出でて微惡寒すべし。若し「汗出」の二字無くば、乃ち表未だ解せず。附子を取ること無し」と。此の説必ずとせず。桂枝甘草湯の証の如きは、是過汗胸虚し、然し其の邪既に解す。虚亦輕しと為す。故に治するに小方に宜し。而して師試むるに效せしむの條は、其の病重きを加ふ者なり。成氏曰く、「汗を發すること多くして亡陽し、胸中陽氣足らざる者は、病人手又し

自ら心を冒ひ、師外証を見て、陽氣 足らざるを知るなり。又試みに效せしめて、即ち效せざる者は、耳聾す。陽氣 虚すること明らかなるを知る。耳聾する者は、陽氣 虚す。精氣上つて耳に通ずることを得ざる故なり」と。按ずるに『靈枢』決氣篇に曰く、「精脱する者は耳聾す」と。

誤下して中 虚する者 有り、何ぞや。桂枝人參湯の証の如き、是なり。此数々下して胃虚し、邪氣 内に陥つて、協熱し下利す。故に双救を取る。蓋し殆ど陰に属さんと欲する者ならん。「脈沈滑なる者は、協熱利す」、及び陽明篇の、「協熱し便 膿血す」は、並に裏熱を言ふ似し。此の條と義を異にす。傷寒例の、「内 虚して熱 入り、協熱して遂に利す」も、亦然り。○此の方、桂 独り後煮す。猶ほ是 附子瀉心湯、附子 後に内るるの意、他の桂枝湯の方と、其の例自づから異なり。徐大椿の説くところ勝ると為す。

誤つて下し下脱する者 有り、何ぞや。赤石脂禹余糧湯の証の如き、是なり。比れ二三之を下し、下焦 約せず、以て瀉利を為す。故に治は收瀼を取る。桃花湯の類証なり。程氏曰く、「下脱し上 結すれば、理中 反つて堵截を成す。上下二焦、交通に由 無し。利益々甚だしき所以なり」と。錢氏 曰く、「之を益々甚だしと謂ふ者は、薬病に中らず、止むこと能はずして益々甚だしきを言ふ。理中 妨害する所 有つて、之をして益々甚だからしむに非ず」と。按ずるに錢説 優るる似し。之を要すれば此の條 法を設け病を禦すに、変に就いて例を示す。誤下の

後、下利止まざる者は、冷熱調はず、宜しく瀉心を用ゆべき者有り、又胃氣虚寒し、宜しく理中を用ゆべき者有り、又下焦滑脱し、宜しく收澁を用ゆべき者有り、又泌別職らず、宜しく滲利を用ゆべき者有り、証数等有つて、一概にすべからざるを言ふ。○此の方、分ち温め三服す。『本草図経』引いて、「分ち再びに服す」と作す。是に似たり。

大邪已に解し、胃虚し寒を生ずる者有り、何ぞや。厚朴生姜半夏甘草人参湯の証の如き、汗して後胃寒し、虚氣壅滯する者なり。此の証必ずしも停飲有らず。其の半夏を用ゐるは、蓋し猶ほ茯苓四逆湯に茯苓を用ゐるの意ならん。『千金』大半夏湯の類の如き、寒脹を温泄せる諸剤は、皆此の方自り脱胎せん。○鷄峰『普濟方』に、「殿中丞郭中妹十歳、病んで腹色変らず。之を按じて大いに陥らず、心腹の下痞満し、之を取転数多きに因つて得、病已に月余、兆按ずるに『甲乙経』に云ふ、「三焦脹る者は、氣皮膚中に満ち、殻然し堅からず」と。遂に仲景の厚朴生姜半夏甘草人参湯を与へて、其の服を小くす。凡そ二十日を経て、脹消ゆるのみ」と。病人脈数にして反つて吐するの証の如きは、汗多く胃虚し氣逆する者なり。病人寒有つて、汗を發して蚘を吐するの証は、宿寒陽虚を為して加ふる者なり。此の証、必ずしも邪解すと言ひ難し。姑く斯に列す。蓋し素寒有る人、偶々外感を得るものならん。宜しく桂枝人参湯、及び桂枝湯加乾姜の陰旦湯の類を用ゆべし。○『玉函』辨發汗吐下後病中に一條有り。曰く、「發汗の後身熱し、又重ねて其の汗を發すれば、胸中虚冷し、

必ず反つて吐す」と。『千金翼』も同じ。「胸中」を「胃中」に作る。疑ふ是 經文の遺ならんや。差後 理中丸の証の如きも、亦 胃 虚寒する者なり。差後の諸証は、詳に後に開く。然し 情機 相似するを以て、斯に其の概ねを挙ぐ。下も此に仿ふ。蓋し此の諸証、尤も 太陰 少陰と、 相近似せん。

大邪 已に解して、胃虚し熱を生ずる者 有り。何ぞや。太陽中篇の誤吐 両証は、俱に胃中の 液 燥き、虚して熱を生ずる者なり。錢氏は腹中 飢多、口 食すること能はず、及び糜粥を喜ばず、冷食を食せんと欲す等を以て、胃冷の致す所と為す。恐らく然らざらん。朝食暮吐は、即ち暮食朝吐の互詞なり。成氏 曰く、「晨に食して胃に入り、胃虚して克化すること能はず。即ち暮れに至つて胃氣 裏に近づき、邪氣と相搏たば、則ち胃氣 反つて逆することを知る」と。 拘りの似し。○此の証、蓋し橘皮竹茹湯、或いは『千金』竹葉湯の類を、宜しく取用すべき所 ならん。如し単に飲を驅るに従らば、恐くは相對せざらん。差後 竹葉石膏湯の証の如きは、 病後 胃液 復さず、虚熱 上逆する者なり。此の種の証状は、誤汗 誤下の後に、並に多く見ること有り。愚著『広要』中に之を詳にす。宜しく検すべし。

熱鬱

熱鬱は、邪熱裏に入り、物と相得ず、唯各位に鬱著する者、是なり。其の証一ならず。表未だ解せず、膈熱有る者有り。表既に解して、熱膈間に灼く者有り。心下熱結する者有り。腸中熱壅る者有り。皆是少陽の類変なるのみ。蓋し熱偏に一処に在らん。故に白虎の大寒に耐へず。且つ其の得る所無ければ、亦吐下の適ふ所に非ず。是を以て苦寒の劑を制して、之を治と為す。更に上熱下冷の輕証有り。併に斯に隸ぶ。

表未だ解せず、膈熱有る者有りとは、何ぞや。葛根黄芩黄连湯の証の如き、是なり。此表未だ解せず。故に汗出づ。熱上焦を犯す。故に喘す。喘して汗出づと言ふは、其の汗喘を為して出づる似し。然し其の病を推しはかるに、恐らくは然らざらん。且つ熱勢併んで下を経て之を胃に及ぼす。故に利遂に止まず。桂を用ゐざる所以の者は、裏熱を礙さまたぐるを恐るればなり。此の方、移して滞下の表証有つて、未だ攻下を要せざる者を治して、甚だ效あり。『内台方議』に曰く、「又能く酒を嗜む人の熱喘する者を治す」と。又『千金』の、「夏月傷寒、四肢煩疼し發熱し、其の人喜煩し嘔逆し、劇しきこと禍崇の如く、寒熱相搏ち、故に喜煩せしむを治す、七物黄連湯」は、本方に、茯苓芍薬小麦を加ふ。『聖濟』の、「胃の実熱、煩渴し吐逆するを治す、葛根湯」は、本方より、黄芩を去り、半夏生姜竹筴を加ふ。

表既に解して、熱膈間を灼く者有りとは、何ぞや。梔子豉湯の証の如き、是なり。太陽の病誤汗吐下し、邪氣乗じて入る。或いは陽明の病下すこと早く、熱上に迸る。俱に能く之

を致す。蓋し結胸の邪物に藉る實に比せざらん。啻に是邪熱上焦を熏灼する者なるのみ。其の証為るや。曰く虚煩して眠ることを得ずと。此其の軽き者なり。虚煩の虚は、恐らくは陽虚の義に非ず。蓋し是心腹実結無しの謂ならん。即ち結胸及び胃実の鞭滿に対して言はん。厥陰篇、「下利して後、更に煩し、之を按じて心下濡なる者は、虚煩と為すなり」の條、柯氏注甚だ晰らかなり。此の証鬱灼猶ほ軽し。故に未だ懊憹に至らず。曰く反覆顛倒、心中懊憹するとは、此其の重き者なり。張錫駒曰く、「即ち眠ることを得ざることを甚だしくして、之を為すが輾転反側なり。按ずるに心中懊憹は、梘鼓の正証と為す。陽明及び結胸に、並に亦之有り。然して別に真的有り」と。曰く胸中窒ぐとは、此其の鬱稍甚だしき者なり。徐大椿曰く、「煩熱して且つ窒がば、前の虚煩等の象に較べ稍実すと為す。按ずるに上條に発汗吐下の後と言ひ、此の條は汗下を言ひ吐を言はず。想ふに吐は最も胸を虚す。故に吐の後に邪陷らば、則ち此の鬱甚だしきに至らざらんか。否れば則ち上を承けて文を省くならん」と。○煩熱は、即ち虚煩眠ることを得ざるの互詞なり。攷ふるに煩は、本熱悶の義なり。故に三陽皆煩する者有り。又仮りに苦悩し忍び難きの貌と為す。疼煩煩疼の煩の如き、是なるのみ。少陰厥陰の煩の如きも、亦是なり。成氏誤つて煩熱を以て表熱と為し、煩疼を以て熱疼と為す。閔氏『明理論刪補』に至つては、則ち魛厥の煩を引いて、以て成氏を駁して曰く、「煩は、安静なること能はざるの状にて、躁に較ぶれば則ち稍軽し。寒熱を兼ね

て論ずべし云云」と。其の説頗辨なり。然し猶ほ未だ当ると為さず。曰く心中結痛すとは、此其の鬱最も甚だしき者なり。徐大椿曰く、「結痛は更に窒より甚だし。按ずるに此大下を以て、邪胸に激聚す。故に結痛を為す。其の汗吐を言はざる者は、吐最も胸を虚せしめ、発汗も亦外疎の意有るを以て、故に此の鬱甚だしきに至らざらん。否れば則ち亦是も文を省く者なり。又此の証最も結胸を疑ふ。唯心下の鞭濡分かちと為す」と。蓋し軽重同じからずと雖も、而し情機は則ち異なること無からん。故に均しく梔子豉湯を主として、以て之を涼解す。此の方、胸中の鬱熱涼解の正剤と為す。梔子の苦寒は、能く熱毒を清め、芩連と相近し。而し之を服すれば必ず膈に恋なすむ。是を以て上を清むるの功、最も長ずる所なり。故に以て君と為す。後人用つて胸痺を治すも、亦此の意なり。香豉は、『本草』には、味苦寒毒無く、又六畜胎子諸毒を殺すと称す。『金匱』には中毒を治すに、多く此を用ゐる者は、並に以て其の清涼の品為るを見れば足る。況や其の臭烈しく、膈に泥なすむこと殊に甚だし。故に梔子の力を任とどめ、久しく胸中に留む。是を以て二味相得て、能く証に対するの方と為る。『本草』豉條に、陶隱居曰く、「好き者は襄陽錢塘に出づ。香美にして濃し」と。然し古は臭香互称す。香豉の香は、恐らくは芳香に謂に非ず。(按ずるに臭を以て香と為す。『訓義』反覆して之を用ゆ、郭璞方『言注』に見る)抑も本湯之吐薬に非ず。既に詳辨有り。且つ吐は本々実を涌す。今此の証物相得て実すること無し。何ぞ吐を用ゐて為さん。是其の理

最も彰著なり。○崔氏 黄連解毒湯は、膈を清するの神方なり。実は梔子豉湯 自り変来せる者なり。其の煩熱、身熱 去らず、及び其の外熱 有り、手足 温なる等、並に内熱 外熏の候にして、表 未だ解せざるに非ず。此の諸証、成氏の注を妥と為す。宜しく参ずべし。注家 或いは以て表 未だ解せずと為す。又 汗を発して豉を用ゐる者 有るを以て、遂に上方を以て微汗を兼ねると為す。恐らくは然らざらん。其の兼ねること有る者、梔子甘草豉湯の証の如きは、是 胃氣 足らず。故に小氣す。梔子生姜豉湯の証の如きは、是 熱其の飲に迫る。故に嘔す。此 小柴胡の嘔と相似る。梔子厚朴湯の証の如きは、是 下後 胃氣 壅滯を兼ね、以て中滿を為す者なり。此の方 豉を用ゐざる者は、豈 其の泥恋 壅を助くるを畏れんや。梔子乾姜湯の証の如きは、是 丸薬にて大下し兼ねて中焦 寒を生ずる者なり。此の條 文略す。姑く方意に就いて之を攷ふ。当に是 他に胃寒の証候 有るべし。要するに邪 本劇しからず。故に誤治を被りても、大逆に至らず。故に煩既に微にして、胃寒も亦 輕し。是を以て僅に梔子乾姜を須めて足る。○王氏は丸薬を以て神丹 甘遂と為す。当に攷ふべし。比の二証は、即ち虚実の分に係る。枳実梔子湯の証の如きは、蓋し梔子厚朴湯の 一類ならん。

心下 熱結する者 有り、何ぞや。大黄酒運瀉心湯の証の如きが、是なり。此 邪熱 誤下の勢いに乗じて、入つて心下に著き、以て痞を為す者にて、唯 其の飲 無し。故に之を按じて濡なり。然し鬱結 稍 重し。故に芩連の涼に、兼ねて大黄を以てし、而して麻沸湯 泡用す。蓋し意は

疎泄に在つて、峻利には在らざらん。「脈浮にして緊、而して復た之を下さば、緊反つて裏入つて、則ち痞を作す。之を按じて自づから濡なるは、但氣痞するのみ」は、蓋し此の証を言はん。痞証の飲結に因る者は、必ず痞鞭と云ふ。此並に濡と云ひ、以て其の別と為す。且つ氣痞の称、但是熱結して、飲結に非ずと言ふ似し。方氏は本方の証を以て、彼の條後に次いで曰く、「此上條に申す、脈を言ひ以て其の治を出だす。脈関上に見る者は、痞心下に在るを以てなり。氣痞するを以て濡、浮なる所以なり。然し痞の濡なるは、熱聚に由つてなり。故に黃連を用ゐ之を上に清む。聚まらば氣なりと雖も、痞すれば則ち固し。故に大黃を用ゐ之を下に傾く」と。此の説稍允ふ。又成氏曰く、「麻沸湯を以て瀆服する者は、其の氣薄くして、虚熱を泄するに取る」と。尤氏曰く、「成氏謂ふ所の虚熱は、燥屎に対して言ふなり。陰虚陽虚の謂に非ず。蓋し熱邪裏に入つて、糟粕と相結ばば、則ち実熱を為し、糟粕と相結ばざれば、即ち虚熱を為さん。本方大黃黃連を以て劑を為して、枳朴芒消を用ゐざる者は、蓋し以て熱を泄し、以て実を蕩ふなり」と。周氏曰く、「麻沸湯を以て之を瀆くらば、其の氣味の出づること、軽くして且つ活く。大力の体を以て、輕清の用を為す。聖人に非ざれば其の孰くんぞ之を能くせんや」と。二説亦是の似し。○錢氏承氣陷胸十棗、及び此の湯の異を辨ず。當に併に攷ふべし。附子瀉心湯の証の如きは、是前証にして表陽虚を兼ねる者にて、其の病表裏情を異にす。故に治も亦凉温併行す。此の條、錢氏命門の虚を以て説を為す。

鑿ちに近し。尤氏曰く、「此上條に即して、其の説を引かば、謂ふに心下痞し之を按じて濡、
 関脈浮なる者は、当に大黃黄連瀉心湯を与へ、心下の虚熱を瀉すべし。若し其の人復た惡寒
 して汗出でて、証陽虚不足を兼ねる者は、又須く附子を加へ、以て表陽の氣を復すべし。
 乃ち寒熱並用、邪正兼治の法なり」と。又曰く、「此の証、邪熱余り有つて、正陽足らず。
 設し邪を治して正を遺さば、則ち惡寒益々甚だし。或いは陽を補ひて熱を遺さば、則ち痞滿
 愈々増す。此の方、寒熱補瀉、並投互治す。誠に已むを得ざるの苦心なり。然し法をして以
 て之を制すること無からしめども、混じて功無からざること鮮なし。方麻沸湯を以て寒藥を
 漬し、別に附子を煮て汁を取り、合和して与へ服すれば、則ち寒熱其の氣を異にし、生熱其
 の性を異にす。藥同行すと雖も、而し功は則ち各々奏す。乃ち先聖の妙用なり」と。此の解
 甚だ精暢を覺ゆ。又大黃附子湯、寒熱融和して、自づから温利を為す。宜しく分別して見る
 べし。○中西惟忠曰く、「此の方附子を煮るに、水率を言はず。疑ふらくは是脱文ならん。
 腸間熱壅る者有り、何ぞや。白頭翁湯の証の如きが、是なり。此熱壅下迫す。故に下重
 を為す。蓋し腸癖と同局なる者ならん。先兄曰く、「白頭翁湯、熱利下重を治す。意は下焦
 の熱を清し、其の窘迫を緩めるに在り。仍ほ白頭翁を以て、腸熱を涼し君と為す。秦皮も亦
 熱を清し竅を利す。俱に之を黄連檨皮に合して、清利し以て之を瀉す」と。蓋し熱毒の氣、
 下焦に客し、便せんと欲して能はず、重滯して以て後竅に迫らん。故に其の方下焦腸滑を治

するの比に非ず。而し注家 苦を以て之を堅くすの語に執る。昧と謂ふべし。

上熱 下冷の輕証の者 有り、何ぞや。蓋し上熱 下冷、実は厥陰の機なり。然し更に未だ其の甚だしきに至らず、猶ほ少陽の類変に属する者 有り。此に列する所 是のみ。梔子乾姜湯の証の如きが、是 誤下自りして変ずる者なり。説は上に見る。黄連湯の証の如きは、是 素有るの寒熱に従つて、隔胃 病を異にする者なり。此の方、半夏瀉心 自り変来す。然し彼は冷熱一位に在つて相結す。此は冷熱 其の位を異にす。故に彼は則ち薬性 温凉 混和を要す。再煎する所以なり。此は則ち温凉 各々別に功を立つ。淡煮して再煎せざる所以なり。尤氏曰く、「此 蓋し痞証の属ならん。多くは寒薬中を傷つて後に従つて之を得る。本文に言及せざると雖も、而し其の誤治の後の証 為るを知るべし。故に其の薬も亦 瀉心と相似て、桂枝を多くするのみ」と。此の説 是に非ず。○此の方、愚常に用ゐて霍乱 吐瀉 腹痛を治す。応効 神の如し。蓋し其の邪を逐ひ正を安んじ、能く陰陽を和するを以てならん。

飲邪搏聚

飲邪 搏聚は、水飲 蓄聚し、邪と相搏つ、是なり。大抵 其の人 宿水 有り。或いは邪に因つて発動し、或いは誤を以て勢長す。更に病を得て新たに成る者 有り。其の停滯 多くは心下

胃脘の分に在り。然し泛漫上下、一処に凝結せず。其の類凡そ四。上焦を犯す者有り。中焦を壅ぐ者有り。表分に属する者有り。陽虚を兼ねる者有り。就中節目も亦多く云ふ。上焦を犯す者有りとは、何ぞや。小青龍湯の証の如きが、是表実にして、宿飲鼓激を被り、以て其の肺を犯す者なり。柯氏曰く、「水気心下に蓄へ、尚未だ固結せず。故に或いは然りの証有り。若し誤下すれば、則ち硬満して結胸と成る。○徐大椿は小柴胡の加減法に於いて、五味子 乾姜 同用の理を辨ず。攷ふるに呉綬既に其の説有り。並に未だ覈たざる似し。又半夏は、湯洗して滑をして尽くさしむ。陶氏に詳説有り。曰く、「爾らざれば人をして咽喉を載さしむ」と。又曰く、「凡そ方に云ふ半夏一升とは、洗ひ畢つて秤り五両を正と為す。『医心方』に、蘇敬を引いて云ふ、「半夏一升は、八両を以て正と為す」と。小島尚質曰く、「葉升を以て之を平らかにするに、半夏一升は、今の二錢三分一釐四絲に当たる。五両は、今の一錢七分六釐に当たる」と。陶説優るる似し。喘家、及び桂枝加厚朴杏子湯の証の如きは、是表虚にして、飲邪相得る者なり。俱に太陽の病兼ねる所有る者に係る。麻黄湯 大青龍湯 及び葛根芩連湯の如きは、其の喘俱に派証と為す。邪散じて喘定まる。故に此の例在らず。麻黄杏人甘草石膏湯の証の如きは、是表既に解して、飲熱肺に迫る者なり。成氏は此の條を以て、葛根芩連湯と相對し、邪氣外に甚だしと為す。是に非ず。蓋し此汗出でて、殆ど裏熱外熏の致す所ならん。且つ其の方意を攷ふるに、小青龍加石膏 越婢加半夏 厚朴麻黄等

湯と、実に一轍に係る。則ち知る是 飲熱 相搏つの証なることを。注家 止 肺熱と為す者も、亦未だ是ならず。蓋し麻黄と石膏とを同用すれば、則ち相藉りて水壅を開疎す。○方後の、「本云ふ黄耳杯」汪説信じ難し。或いは曰く、「此 伝写に譌脱 有り。当に是 本云ふ麻黄湯、今桂枝を去つて、石膏を加ふべし」と。発汗の後 飲灌して喘するが如きは、是 新たに水の致す所なり。汪氏 又 麻黄湯主るとす。亦た確かならず。

中焦を壅ぐ者 有りとは、何ぞや。此の証之の水は、多くは宿昔 自りして、太陽を兼ねる所の者 有り。裏熱を挟む所の者 有り。表裏に熱 無き者 有り。太陽を兼ねる所は、更に差別 有り。桂枝加茯苓湯、今「去桂」及び「白」字を削る。茯苓甘草湯の二証の如きは、是 表に邪 有つて、裏に水 有り。然し両者 相搏たず。唯 飲邪の為に動ずる所の者にして、加茯苓の証は重しと為し、苓甘の証は軽しと為す。此の二証 俱に煩渴 無し。即ち裏に熱 無きの徴なり。其の軽重は、則ち本文を玩へば自づから知る。加茯苓の條の汗 無きの証は、『明理論』に、以て水飲 行らず、津液 内滲するの候と為す。五苓散の証の如きは、是 表に邪 有つて、熱 更に裏に入り、水と相得て、或いは下滯を為し、或いは上逆を為す。故に外に太陽の脈証 有つて、内に煩渴 有り。小便 利せず、及び水 入れば則ち吐す等の候は、然し裏 重くして表 軽し。故に治するに水を利するを専らにして、旁ら其の汗を発す。脈 浮にして微に熱し消渴すと、脈 浮にして数々煩渴す、及び水逆とは、自づから軽重 有り。然し其の機は相同じ。故

に其の治も則ち一なり。或いは曰く、「五苓散の証の方、亦猶ほ『金匱』に其の得る所に随つて、之を攻むるの義なり」と。柯氏は『金鑑』の注意然る似し。但未だ了ならずとす。又先兄曰く、「沢瀉は水を行らし、茯苓 猪苓と相類す。然し五苓散は、朮を二苓と用ゐるに、各十八銖なり。特に沢瀉に至つては、多きこと一十二銖なるは、何ぞや。蓋し其の質 輕清、性味 俱に薄し。故に多く之を用ゐん。二苓は其の力を藉り、更に能く水を行らす」と。此の説 確當なり。又『嶺南衛生方』に曰く、「五苓散に桂を用ゐるは、正に小柴胡に人参を用ゐ、大承氣湯に厚朴を用ゐ、備急丸に乾姜を用ゐるの類の如し。其の剛柔を相濟せんと欲して、亦攻守の意を存す。故に方書 謂ふ、五苓散 桂 無き、及び年を隔つる者は、俱に用ふべからず。近き者は舗家に、桂を去る五苓散 有り。知らざる者、其れを為す誤る所、如し桂を去つて参を入れれば、却つて之を春沢湯と謂ひ、燥渴を治して效 有り」と。此の説 非なり。但本方移して雑病を治すれば、則ち桂の用は、温散に在りて、能く滲利の力を助く。○陶隱居曰く、「方寸匕とは、匕を作つて正に方一寸、散を抄つて落ちざるを取るを度と為す」と。按ずるに中平三年の慮僂銅尺に拠つて、漢の一寸は、当に今の七分六釐なるべし。又先友 狩谷望之曰く、「白飲は、即ち煮米泔なり。『齊民要術』煮宜條に云ふ、「米を折り白煮して汁を取り、白飲と為す」と。此 以て証すべし」と。裏熱を挟む所の者は、猪苓湯の証の如きが、是なり。此邪氣裏に入り、飲と相併び、以て閏熱を為す。故に滲利の品、兼ねて涼潤を以てし、且つ

其の水併に下焦に停まる。特に中焦のみならず。蓋し是陽明の類証にして、其の水有るを以て、胃実を為さざらん。『金匱』に曰く、「諸病 藏に在つて、之を攻めんと欲せば、当に其の得る所に随つて之を攻むべし。渴する者の如きは、猪苓湯を与ふ。余は皆此に倣ふ」と。尤氏曰く、「形無きの邪、入つて藏に結すれば、必ず扞る所有り。水血痰食、皆邪藪なり。渴する者の如きは、水と熱とを得て、熱結水に在り。故に猪苓湯を与へて、其の水を利さば、熱亦除く。若し食有る者は、食と熱とを得て、熱結食に在り。則ち宜しく承氣湯にて、其の食を下して、熱亦去るべし。若し得る所無ければ、則ち形無きの邪、豈攻法の能く去る所ならんや」と。此の解極めて覈あきらかなり。仍ほ更に之を表す。又成氏は陽明篇の本方條に注して曰く、「此下後の客熱、下焦に客する者なり。邪氣表自り裏に入つて、下焦に客し、三焦俱に熱を帯ぶるなり。云云」と。蓋し此の証の水は、併しかし中下二焦に停まる。成氏の言は、当らずと為さず。若し後世の注家に在つては、専ら以て下焦の薬と為す。然し渴心煩。眠ることを得ず等の如きは、皆熱中焦に在つて、上熏するの候なれば、則ち其の説従ひ難し。表裏熱無き者は、汗を発して後水薬口に入ることを得ざる、及び厥陰の茯苓甘草湯の証の如きが、是なり。茯苓甘草湯は、一方二用なり。此の桂は但温散に取る。猶ほ雑病五苓散の意のごとし。又太陽中篇の末條の証は、此と同じなる似ごとし。然し冒するに太陽の病を以てす。必ずしも表裏熱無き者ならざる似し。

表分に属する者 有りととは、何ぞや。文蛤散の証の如きが、是冷水 潤灌して、水邪 表に鬱す。故に主に驅散の劑を以てす。此の條は、柯氏 従り文蛤湯に作つて、証方 始めて対す。且つ『金匱』の「渴して水を得んと欲して、飲を食る者」は、豈發散の宜しき所ならん。一味 文蛤は、自づから切當なる似し。蓋し其の方 互錯せん。牡蛎沢瀉散の証の如きは、是 水氣 外溢し、其の病 下に在り。故に治するに内 従りす。並に病を得て後に新たに成る者なり。

陽虚を兼ねる者 有りととは、何ぞや。此其人 素虚し飲 停む。今 誤治に因つて、陽 更に虚す。而して飲 亦動ず。其の証 軽重 同じからず。茯苓桂枝甘草大棗湯の証の如きは、其の病 軽くして、飲 下焦に停むる者なり。此の方の多く桂を用ゐる者は、奔豚の氣を洩らすを以てなり。甘爛水は、要するに水勢を助けざるに取る。『靈樞』半夏湯は、流水 千里以て外なる者 八升を以て、之を揚ぐるに万遍、其の清 五升を取つて之を煮るも、其の揅 一なり。茯苓桂枝朮甘草湯の証の如きは、其の病 重くして、飲 中焦に停まる者なり。方氏 曰く、「心下 逆滿し、伏飲 上溢し、膈に搏実するなり。氣 上つて胸を衝き、寒邪 上湧し、飲を挟んで逆を為すなり。經を動じて、經脈を傷動し、振振として奮動するなり。蓋し人の經脈は、津液を頼り以て滋養し、飲の物 為るは、津液の類ならん。静なれば則ち養を為し、動ずれば則ち病を為す。宜しく制して之に勝つべし。云云」と。尤氏 曰く、「此 傷寒の邪 解して飲 發するの証なり。飲中に停らば則ち滿し、上に逆すれば、則ち氣 冲つて頭眩す。經に入らば、則ち

身振振として動揺す。『金匱』に云ふ、「膈間の支飲、其の人喘滿し、心下痞堅し、其の脈沈緊」と。又云ふ、「心下に痰飲有つて、胸脇支滿し、目眩む」と。又云ふ、「其の人振振として身^{うごめ} 睪くこと劇しければ、必ず伏飲在り」と。是なり。汗を發すれば則ち経を動ずとは、邪發すべく無くして、反つて其の経氣を動ず。故に茯苓白朮を与へて、以て飲氣を^{のぞ} 蠲き、桂枝甘草は、以て陽氣を生ず。謂ふ所の痰飲を病む者は、当に温藥を以て之を和すべし」と。愚謂ふ此の條は止脈沈緊、即ち此の湯の主る所は、是若しくは吐し若しくは下して、胃虚し飲動じて之を致す。倘し更に汗を發して、其の表陽を傷らば、則ち變じて動経を為す。而して身振振として揺れるは、是身睪動し振振として地に擗れんと欲すと相同じ。即ち真武の主る所なり。蓋し此當に両截と為して看るべし。稍倒装法と類似す。又錢氏注するに、「傷寒は本當に麻黄を以て汗解すべし云云」と。然し此の証は、誤汗の變、遽に経を動ずるに至らば、則ち其の本は桂枝の証と為すも、亦未だ知るべからず。蓋し「傷寒」の二字は、須く拘執すべからざらん。又其の方専ら水を利用して以て胃を健にするに取る。甘棗湯と小異有り。『金鑑』は中焦下焦を以て辨を為す。其の説^{かな} 協ふと為す。太陽篇の真武湯の証の如きは、其の病最も重し。而して朮甘の証と、其の機相近き者なり。此の條は、唯尤氏以て水飲を兼ねると為す。然し其の説迂にして切ならず。愚謂ふ此の証虚陽外越す。故に發熱し、陽虚し飲動ず。故に心下悸す。飲清陽を阻む。故に頭眩す。経脈衰弱し、飲の為に動を

被る。故に身 調動し、振振として地に擗れんと欲す。其の此の方を用ふる者は、以て陽を扶
 け水を利すればなり。此の身 調動は、大青龍 変肉調と殆ど異ならんか。傷寒 吐下後 汗を発
 して、虚煩し脈 甚だ微に、久しくして痿と為る如きも、亦是 朮甘湯の証にして、日を経て
 治を失する者なり。方氏 曰く、「此 苓桂朮甘湯を申す。而して復た治せざるに失すれば、則
 ち痿を致すの意を言ふ。彼の條は脈 沈緊、未だ汗を発せざるを以て言ふなり。此の條は脈 甚
 だ微、已に汗を発するを以て言ふなり。経脈 動ずは、即ち経を動ずの変文なり。惕は、即ち
 振振として揺るるなり。大抵 兩つ相更互に發明するの詞なり。久は、既に八九日を経るを言
 ふ。若し猶ほ解することを得ずして、更に治せざるに失すれば、則ち津液 内に亡し、湿淫 外
 瀆し、必ず両足 痿軟を致して、相及ばざるなり」と。尤氏 曰く、「心下 痞硬し、脇下 痛み、
 氣 上つて咽喉を突き、眩冒する者は、邪氣 飲を搏ち、内聚して上逆するなり。内聚する者は、
 四布すること能はず。上逆する者は、以て下に逮おとぶこと無し。夫れ経脈なる者は、血液に資し
 て以て用を為す者なり。汗吐下の後、血液の存する所幾何ぞ。而して復た搏結して飲を為し、
 諸経に布散すること能はず。今 経脈 既に浸潤を前に失す。又後に長養すること能はず。必
 ず將に筋膜 乾急して攣すべし。或いは枢折 脛縦して、地に任せず。『内経』に云ふ所の脈痿
 筋痿の証の如し。故に曰く、久しくして痿と成る」と。両説 並に詳密なるを覚ゆ。蓋し虚煩
 は是 陽虚の致す所にして、建中の煩と相近くして、梔豉の虚煩と同じからざらん。○按ずる

に苓桂の二湯の証は、注家多く単に陽虚と為す。『輯義』は『金匱』を援いて、以て其の淡飲為るを確かにす。今又真武の証を以て、同一の情機を為す。特に牽湊の似し。然し反覆申熟すれば、理は然らざるを得ざるなり。

飲邪併結

飲邪併結なる者は、水飲邪と相併に頑結す、是なり。亦是素澀飲有り、或いは誤治に因つてして併び、或いは誤に因らずして併ぶ。其の結して胸中に在る者は、結胸有り、臈結有り、胸に寒有るもの有り。心下に在る者は、熱実有り、冷熱調はざるもの有り。要は皆凝固一処なる者なり。飲胸膈に在る者は、多くは是稠涎なり。心下に在る者は、多くは是水なり。治に緊慢有り、亦未だ此に由らざるべからず。

結胸とは、何ぞや。飲邪相結し、以て胸堂に盤踞し、遂に心下に及ぶ、是なり。『明理論』に曰く、「謂ふ所の結は、繫結の結の若し。分解すること能はざる者なり」と。蓋し陽明の病の類変ならん。而して其の証更に等差有り。大陷胸湯の主る所の如きは、膈内拒痛し、心中懊懐し、心下因つて鞭き者、其の正証なり。膈痛を拈む者は、僅に一條。然し既に結胸と名づければ、則ち其の義自づから寓とどまる。其の來たることの多くは太陽の病の誤下に因る。「病

陽に発して、反つて之を下し、熱入つて因つて結胸を作す」。及び大陷胸湯の條に、其の義見るべきのみ。但此に謂ふ所の陰陽は、殊に解し難しと為す。張氏既に之を疑ふ。秦氏『傷寒大白』は、以て表熱の軽重と為す。亦未だ鬯^ウびず。軒邨嘗て謂ふ、「此は蓋し虚実のみならん」と。当時其の説を詳にせず。今之の意を推すに、蓋し太陽中に就いて、其の人の虚実を分かつことを言はん。其の人実して飲有つて、邪の激甚だしければ、故に結胸を作す。其の人虚して飲有つて、邪の激微なれば、故に痞を作す。積する所是の如し。亦頗る穩貼なるを覺ゆ。○『金鑑』は、「数なれば則ち虚と為す」の句を以て剩文と為す。愚謂ふ、当に「動なれば則ち痛を為す」の句と併せ刪に従ふべし。動数の動は、宜しく泛く講ずべし。蓋し「脈数急なる者は伝ふと為す」の「急」字と一例ならん。亦誤下に因らざる者有り。心下痛み之を按じて石鞭し。其の証稍重し。「傷寒十余日、熱結裏に在る」の條、亦是なり。其の大柴胡を掲ぐる者は、彼の証も亦心下急痞鞭等有つて、結胸と相疑はるを以て、故に對待して辨を為す。往来寒熱は、大熱無しと相對し、結裏に在りは、水結胸脇に在り相對す。但頭汗出づるは、是柴胡の証に無き所にて、且つ水結の字を挙げて、以て結胸の必ず水飲由りなるを明らかにす。重ねて汗して復た下して自りなる者有り。心下従り少腹に至つて鞭満して、痛み近づくべからず。此胃実を兼ね。其の証最も重し。以上軽重なり。其の來路の如きは、当に意を互ひして看るべし。必ずしも拘らず。少陽の病誤治に自る者有り。半夏瀉心湯の條、特に二証と為して辨を立て

ず。亦少陽誤下して、猶ほ結胸及び痞を為す者有るを示す。又結胸は、太少の併病自りの者有り。然し大陷胸の主る所に非ざる似し。蓋し輕重 来路、俱に異有ると雖も、其の情は則ち一ならん。故に均しく此の方を用ゐ、以て水熱を驅除す。成氏謂ふ、「利葉中此を馱劑と為す。信に然らば、蓋し利葉生ならんと欲す。大承氣の主は大黃に在り。故に後に之を煮る。此の湯重ねて甘遂に在り。故に先づ大黃を煮て、後遂を内れる。彼は急にして此は緩なるに非ず」と。尤氏に承氣陷胸の辨有り。其の説新奇にして確かならず。仍ほ採入せず。大陷胸丸の証の如きは、是其の併結稍前証より軽く、然し勢い上に連甚する者なり。項強殊に甚だしく、其の状瘕の似し。但剛瘕の背反張の如きには非ず。故に柔瘕の状の如しと云ふ。喻氏曰く、「胸邪緊逼して、陷胸湯を以て之を下さば、恐らくは過ぎて留まらず。即ち大陷胸丸を以て之を下す。又恐らくは滯つて行かず。故に煮て滓を連ねて之を服す。然し邪と相当らば、而して戦勝攻取の略を施すべし。方中大黃芒消甘遂を用ゐるを觀るに、峻と謂ふべし。乃ち更に蒂蘼杏人を加へ、以て肺邪を射る。而して上行其の急なるは、煮時又白蜜を倍加し、以て留恋して之を潤導す。而して下行其の緩なるは、必ず此の意を識り、始めて方を用ゐるの妙を得る。○按ずるに陶氏曰く、「一方寸匕散を蜜に和し、梧子の如きを得ること、十丸を准とし度と為す。彈丸及び鷄子黃の如きは、十梧子を以て之を准ず」と。『唐本』注に云ふ、「方寸匕散を丸と為し、梧子の如き十六丸を得る。彈丸の如きは一枚。鷄

子黄の若きは、四十丸を准とす」と。今弾丸は鶏子黄と同じ。此甚だ同じからず。此に拠らば、弾丸大は、正しく十六 梧子を准とす。呉氏の説は、実に李時珍の陋に沿ふのみ。又「丸」字は、宋代に諱を避け「円」字に作る。異趣有るに非ず。詳しくは愚著『薬治通義』中に開く。茲に贅せず。小結胸の如きは、是病膈に及ばず。最も軽き証に属す。故に攻下を仮ず。然し亦是併結にて、猶ほ陷胸の法を須ゆる所以なり。程氏曰く、「痞証も亦心下鞭き者有り。但痛まざるのみ」と。寒実 結胸の如きは、蓋し太陰の類変に係らん。此膈間素々寒涎有り。邪氣内に陥つて、相化して実と為る。或いは是膈痛心下鞭等の証有り。其の勢以下に連及して、陽猶ほ持する者なり。故に此を峻利す。尤氏も亦小陷胸湯、及び亦服すべしの七字を疑ふ。然し猶ほ誤つて文蛤散の條に接す。○陶氏曰く、「巴豆は、打破し其の皮を剥ぎ、心を刮去す。爾らざれば人をして悶へしむ」と。本々寒分有つて、之を下して結胸を作す者の如きも、亦是寒実なり。然し陽素虚す。故に利薬に宜しからず。成氏曰く、「心下結満するを以て、臥すれば則ち氣壅つて愈々甚だし。故に臥すること能はずして、但起きんことを欲す」と。此に拠らば、則ち豈支飲倚息と機を同じふする者ならんや。心下必ず結するは、錢氏以て梔豉の類証と為す。愚謂ふ此は太陽の病に兼ねるに心下水有る者にて、殆ど桂枝加茯苓朮湯の類証なり。其の誤下して結胸を作すは、増損理中丸を須ゆべし。即ち胸痺に人参湯を用ゐるの意なり。

蔵結とは、何ぞや。陰実上結して、結胸の状の如き、是なり。汪氏は食を挟むか食無きかを以て、結胸蔵結を辨ず。亦未だ允あはず。尤氏曰く、「胸は高くして蔵下ひくし、胸は陽にして蔵陰なり。病の状同じと雖も、而し処る所の位は則ち同じからず」と。是汪氏の謬りを襲ふ。又汪氏謂ふ、「蔵結は之を按じて痛まず」と。尤氏は則ち以為く結胸の状の如き者とは、結胸の按じて痛む如きを謂ふと。是に近し。此亦太陰の類變なり。乃ち寒実結胸と、相似て異有り。蓋し深痼沈著にして、宗氣も亦衰へん。故に攻下に任せず。要するに錯惡の最極なる者なり。此の証僅に二條、其の義を精しくし難し。然し既に蔵結と名づけければ、則ち其の病深重なるを知るべし。且つ理を以て之を推さば、寒実結胸なり。痰涎有つて相得る。蔵結なれば則ち痰涎無き似し。唯是寒結にて、勢君主に逼る者か。然し明徵無し。姑く此に列す。○舌上白胎滑の者と、舌上胎滑の者、二者の字に就いて之を視るに、則ち蔵結は胎白滑ならずして、黄洪なる者有る似し。又陽証有つて、往来寒熱し、其の人躁く者有る似し。寒凝には豈此等の証状有らんや。然らば則ち二者の字は当に虚講なるべし。曰く治し難し、曰く攻むべからず。並に蔵結の治し難く攻むべからざるを謂ふ。特ひとり舌上白胎滑を為して言はざるなり。吳氏は「飲食故の如く、時時下利す」の八字を削る。蓋し「飲食故の如し」の一句は解し難し。攷を俟つ。○「太陰の病、之を下して胸下結鞭す」は、此と相近し。『金匱』に曰く、「病者萎黄し、燥して渴せず、胸中寒実して、利已まざる者は、

死す」も、亦類証なるのみ。病脇下素々痞有る如きは、是其の位稍殊なり。而して寒凝なるは則ち一なり。故に其の称を同じふす。

胸に寒有る者とは、何ぞや。瓜蒂散の証の如きが、是なり。此亦膈中頑涎、邪と相実す。蓋し誤下に自らざる者ならん。故に病勢上に甚だし。以て寸脈微浮、微浮、以て病位を驗す。曰く弦遅、曰く乍ち緊、曰く乍ち結とは、並に其の実を徵す。胸中痞鞭し、此病人自覚の情なり。氣喉咽を衝く等の候を為す。而し心下に及ばず。亦痛まず。厥陰篇の、心下滿ちは、当に心中滿を作すを是と為すべし。其の閉甚だしきに及んで、陽氣阻隔し、以て厥逆を致す。即ち是邪高く結甚だし。因つて之を越せざるを得ず。此の方の由つて設くる所なり。瓜蒂は至つて苦く、其の能味に存す。吐葉の最峻の者なり。豆の腥臭は、人をして悪心せしむ。鼓の腐臭は、必ず胸膈に泥む。俱に上涌の勢いを助くるに資す。王氏『選注』の言、蓋し当たると為さん。○吐の一法は、汗下と鼎峙す。誠に緊要と為す。然し本是六病の正対に非ず。且つ宜しく吐すべきの証は、本経に在つて特に三條。『金匱』も亦瘧黄宿食数き者に過ぎず。其の証極めて少なきを觀るべし。汗下の比する所に非ざるなり。

結心下に在つて、熱実する者有りと、何ぞや。十棗湯の証の如きが、是なり。亦陽明の類変に係る。其の病脇下に連なつて、水と邪と、其の勢い俱に猛し。此峻峻に非ざるに自りて、豈能く直に之を折る者ならんか。尤氏曰く、『金匱』に云ふ、「飲後水流脇下に在つ

て、欬吐し引痛す。之を懸飲と謂ふ」と。又云ふ、「病懸飲なる者は、十棗湯之を主る」と。此心下痞鞭満し、脇下に引き痛む。其の懸飲爲るを知る所以なり」と。方氏曰く、「此蓋し邪熱伏飲、胸脇に搏満し、結胸と近似に涉ると雖も、胃実とは則ち大いに相同じからず」と。喻氏曰く、「此の証結胸と頗る同じ。但結胸は、邪胸に結し、其の位高し。此は心下及に脇に在つて、其の位卑し」と。愚謂ふ結胸は、瓜帶散及び此の証と、相似て同じからず。病に臨むの際、宜しく精認体察すべし。○按ずるに『千金』の錢七の説は、陶隱居『肘後百一方』序に本づく。「平旦に服す」、諸家解無し。蓋し陰氣未だ動ぜず、飲食未だ進まざるの時は、藥力以て結を潰やし易からん。『本草經』に曰く、「病四肢の血脈に在る者は、宜しく空腹にして旦に在るべし」と。陶隱居曰く、「毒利藥は、皆空腹に須ゆ」と。孫真人曰く、「凡そ利湯を服すに、早を侵すことを得んと欲す」と。並に宜しく參商すべし。○『千金』の乾棗湯、腫及び支満、游飲を治すは、本方に、大黃 黃芩 甘草 薤花を加へ、水煮す。『本草圖經』に曰く、「胡洽は水腫、及び支飲、游飲を治す。大黃 甘草を加へ、並びに前五物を各一兩、棗十枚、同煮すること法の如し。一方、又芒消を加へ、湯成つて之を下す。『聖惠』の婦人血分、四肢浮腫、心腹氣滯、飲食を思はずざるを治す、芫花円は、本方に、大黃 青橘皮を加へ、細剉し、米醋一中盞を以て、旋し藥を銚子内に灑らし、慢火に炒め醋をして尽きさしめ、末と爲し、麪糊にて円にして梧子の大きいさの如きを、食前に温酒を以て七円下す。

結心下に在つて、冷熱調はざる者有りとは、何ぞや。此は其の人胃氣素々弱く、水液行かずして、誤治し更に虚し、胃に冷熱搏ち、以て痞鞭を為す者、是なり。大抵胃素々寒する者は、邪陥つて必ず化して寒と為る。今胃弱しと雖も、其の寒未だ甚だしからず。故に猶ほ此の証為り。喻氏は「病陰に発して、反つて之を下し、因つて痞を作す」を解して曰く、「是は「熱入る」の文を省くとし、以て意を見るなり」と。此錢氏と同じからずして、反つて允愜なる似し。「結胸と成る所以の者」の一句も、亦「痞と成る」の字を略して言ふ似し。經中に間々此の例有り。錢注は恐らく鑿ちならん。又其の痞を作すと云ふ者は、只飲邪併結の痞を指す。是氣痞を該言せず。錢氏以て三瀉心の証と為す者は、是なり。蓋し虚実相半す。汪氏に湿熱調はず、虚実相半ばすの語有り。故に病勢頗る緩し。実は少陽の類変に係る。其の治法の如きは、温涼並行し、以て之を調停す。但其の証に別有り。半夏瀉心湯の証の如きは、是飲盛んなる者なり。生姜瀉心湯の証の如きは、是寒勝る者なり。甘草瀉心湯の証の如きは、是虚勝る者なり。瀉心湯は、心火の熱を瀉すに非ず、心下の痞を瀉するなり。此本雲岐子の説なり。又『明理論』に曰く、「氣結して散ぜず、壅つて通ぜず、結胸を為さば、陷胸湯直達の剤と為す。塞つて通ぜず、否して分たず、痞と為さば、瀉心湯分解の剤と為す。之を瀉心と謂ふ所以の者は、心下の邪を瀉すを謂ふなり。痞と結胸とは、高下に有り。云云」と。愚諸注を攷ふるに、半夏の証は特り熱併つて、生姜甘草の二証は熱既に除

く似し。然し痞を成す所以の者は、恐らくは邪熱之に加へざるべからず。曰く、「傷寒汗出でて解して後、胃中 和せず」とは、大邪既に解すを言ふに過ぎず。曰く、「此熱結に非ず。但胃氣虚し、客氣 上逆するを以て」とは、亦是結胸 及び大黃 黃連の証に對して言ふ。必ずしも些かな熱も無きには非ず。「心煩し安きことを得ざる」を觀て、見るべし。如し移して雜病の痞鞭を治すれば、則ち芩 連と參 姜と俱に行き、其の苦は唯 痞を瀉するの用に存し、其の清涼を嫌わざるなり。○甘草瀉心の條に曰く、「穀化せず」と。『金匱』水氣篇に曰く、「小便利せず、水穀 化せず、面目 手足 浮腫す」と。即ち同義なり。更に二証の相類するもの有り。其の一は、柴胡桂枝乾姜湯の証の如きが、是なり。此の病 太少に涉つて、飲結を兼ね、亦 冷熱 共に有る者なり。此の條は、諸注 津 乏すと為して解す。然して今 驗すに飲を治するに甚だ效あり。因つて攷ふ。曰く「微結」、曰く、「小便利せず」、曰く「渴」とは、俱に水氣の徴しの似し。「嘔せざる」は、水 胸脇に在つて、胃を犯さざる故を以てなり。「但 頭汗出づる」も、亦 邪氣 上壅の候なり。蓋し乾姜は寒飲を温散し、牡蠣 括蕪根は、並に水飲を逐ふ。牡蠣 沢瀉散も、亦 此の二味 有り。其の理は一なり。先兄も亦 嘗て之を言ふ。仍ほ再び此に掲ぐ。或いは曰く「微結」の字 著落 無し」と。蓋し心下 微結の省文ならん。其の一は、旋復代赭湯の証の如きが、是なり。此は邪 解して、胃 弱く飲逆する者なり。

血熱瘀血

血熱は、邪熱内併し、以て血分に迫る、是なり。蓋し熱の血に迫らん。或いは血故道を失し、擾動外溢す。或いは熱氣燔灼し、血液内燼す。其の外溢るる者は、自ら衄して愈ゑるもの有り。麻黄湯を用ゐ衄して解するもの有り。此の條の「目瞑」は、蓋し目眩の義ならん。「瞑」と「眩」、古には相通用す。魏氏曰く、「陽薬を以て陽邪を治す。能く陽氣重劇を致して、衄を作す所以なり」と。衄して猶ほ麻黄を用ゐるもの有り。尤氏曰く、「必ず衄さんと欲して血流れず、衄すと雖も熱解せざる者は、乃ち法に合すと為す。然らざれば其の陰竭きざる者有る靡し。皆是表に属す者なり。鼻衄は固より表鬱の一証なり。之を兼変中に隸くは宜しからず。今其の亦血熱に係るを以て、故に因つて此に叙し、以て後段の諸証の参照に備ふ。熱上焦に壅つて、膿血を吐する有り。熱下焦に迫つて、血下つて愈ゆる有り。裏熱して衄する有り。周氏曰く、「邪血分に入り、熱経に甚だし。故に水に漱がんと欲す。未だ府に入らず。故に嘔むことを欲せず」と。按ずるに陽明篇の衄の二條と少陰篇の便血の條とは、『聖恵方』には、並に黄芩湯を擬す。熱陷つて裏に入る。及び陰陽に變じて、便血、如しくは便膿血する有り。此の諸証、數條下らずして、皆其の方無し。前注擬する所、或いは確かなること能はず。臨処の際、更に須く精思すべし。皆是裏に属す者なり。更に淋家誤汗して

便血する有り。火逆して衄し、如しくは吐血し、如しくは清血する有り。少陰誤汗して、血口鼻自り出づる有り。亦並に裏に属す。其の内鑱せる者は、衄家誤汗して、以て煎熬を増す有り。素虚せるを誤つて灸し、血脈中に散ずる有り。黄氏曰く、「宜しく陰を助け血を生じ火熱を徹すべし。炙甘草湯 小柴胡加括蕪実」と。按ずるに後方は疑ふべし。厥陰誤汗し、口傷れ爛赤す、及び熱氣余り有り癰膿を発する有り。皆是當血傷を受くる者なり。近今の傷寒、最も血分熱灼する者多し。大抵素稟陽臓にて、加ふるに液虧を以てし、或いは発汗過多にて、血脈を迫脅するに自りす。而して其の証治は、膈熱と出入、必ず清潤を要す。是深く経旨を求めて、之を變通するに在り。

瘀血は、血常度を失し、下焦に瘀畜す、是なり。『説文』に曰く、「瘀は、績血なり。疔に从ひ於声なり」と。然して瘀血の瘀は、瘀熱の瘀と、恐らくは其の義を同じふす。蓋し仲景の書、或いは説文に従ひ難き者有り。「痞痛するなり」の類の如し。蓋し邪熱血中に壅鬱すれば、則ち相搏つて瘀と為る。唯其の瘀たるや、血は即ち水の類なり。故に必ず下に就き、以て少腹に結せん。其の証に結日浅くして病勢劇しき者有り。結日深くして病勢慢ゆるき者有り。之を治するの法は、随つて別有り。結日浅くして病勢劇しき者は、挑核承氣の証、是なり。此は蓋し汗を失して従り、邪氣内併し致す所ならん。其の結未だ緊ならず。故に熱未だ斂おさまらずして、勢い殊に劇し。此の方亟すまやかに之を逐利す所以なり。膀胱は、猶ほ下焦を言ふ

ごとし。蓋し胃中燥屎有りと例を同じふせん。必ずしも深講せず。抵当湯の條に曰く、「熱下焦に有り」と。義は互いに相發す。程氏曰く、「此の條の小便に及ばざる者は、「血自ら下る」の三字有るを以てなり。然し「小腹急結」の処に、包かねて「小便自利」の句有り」と。愚謂ふ、此の証血結して、氣滯に非ず。是枳朴の氣を破るを用ゐずして、芒消甘草の堅を軟にし急を緩めるを取る所以なり。結日深くして病勢慢き者とは、抵当湯丸の証、是なり。大抵亦汗を失して自りして、其の結既にかた緊く、其の熱既におさ斂まる。故に勢い殆ど慢し。専ら之を破潰す所以なり。但更に輕重有り。是を以て湯丸の分有り。六七日表証仍ほ在る者とは、蓋し發汗徹せざるの故のみならん。「表証仍ほ在」の一句の内、外解せざる者、尙未だ攻むべからずの義有るを蘊む。宜しく桃核承氣の條と互いに看るべし。「脈微にして沈」、微は、謂ふ所の沈滯して起きざるの状にて、微弱の微に非ず。楊士瀛曰く、「血を挟む者は、脈来つて乍ち洩乍ち數、閃灼明滅す。或いは沈細にして隱伏、是なり」と。「反つて結胸せず」は、義未だ瑩らかならず。徐氏曰く、「表邪在らば、脈宜しく浮なるべくして沈。脈沈なれば、胸宜しく結すべくして、反つて結せず。証極めて疑ふべし。乃ち少腹鞭滿し、小便自利して、人反つて狂を發し、然る後上焦の表、証脈相反するを知る」と。程氏曰く、「微沈は、結胸の脈なり。脈沈にして結胸せざれば、邪已に入ること深くして、直ちに下焦の血分に結するを知る」と。二説稍通ず。姑く之に存す。○「狂の如し」の解は、

柯氏 是と為す。此の「如」字は、「舌上苔の如き」の「如」字と同語例なり。桃核の血は、多く病を得るの後に結す。抵当の血は、多く病を得るの先に結す。山田正珍曰く、「桃核承気は、邪下焦に結して、血之が為に行かず、滯つて瘀を為す者を治す。抵当湯丸は、素瘀血有つて、熱邪之に乗ずる者を治す。陽明篇の抵当湯の條に云ふ、本久瘀血有り」と。以て見るべし」と。徐大椿曰く、「桃核承気は、乃ち瘀血將に結すべきの時を治す。抵当は、乃ち瘀血已に結しての後を治す」と。按ずるに徐の説未だ切ならず。然し未だ一例にして論ずべからず。張兼善曰く、「或いは云ふ、桃核承気、及び抵当湯の証は、俱に下焦の畜血に係る。中間輕重有ると雖も、未だ何に縁つて此を致すか審ならず。此皆發汗未だ其の宜しきを得ず、或いは当に汗すべきを汗せず、或いは汗遅く、或いは脈盛んなるに汗微なく、或いは覆蓋し週らずして汗せず。其の太陽の邪、従つて出づること無し。故に經に随つて府に入り、膀胱に結す」と。按ずるに抵当湯の條は、既に表証仍ほ在りの語有つて、失汗蓄血す。『脈經』及び陳延之芍藥地黄湯主療に既に之を言ふ。巢氏諸家も、亦屢々其の説有り。且つ之を病者に驗すに、益々張氏の言誣らざるを知る。之を要すれば病下に在ると雖も、均しく是実に属す。乃ち陽明の類變なり。陽明篇、「病人表裏の証無し」の條、『明理論』に詳説有り。宜しく参ずべし。

熱入血室

熱 血室に入るとは、婦人 月事、邪と相適ゆき、熱 子戸に乗ず、是なり。適来 自りする者有り。適断 自りする者有り。曰く婦人 中風、曰く婦人 傷寒、俱に是 文を互へて意を見る。適来する者は、病を得るの際、月事 方に来る者なり。「婦人 傷寒 發熱」、是「惡寒」の字を省く。「經水 適来」の下、「之を得て七八日」の字を蘊む。適断する者は、未だ病を得ざる前に、月事 已に來りて、病を得て方に断つ者なり。「經水 適断」の四字は、当に「七八日」の上_上に在るべし。倘し「七八日」の後に適断する者なれば、則ち其の来るや必ず病を得るの初めに在り。是 適来と何をか別たん。志聡の説 恐らくは未だ当らず。唯 文勢 体有り、錯易を要せず。適来は血 結せず、適断は則ち結す。程氏 方氏の説 見るべし。之を治するの法、適来は、則ち曰く期門を指す。曰く胃氣 及び上二焦を犯すこと無くして、方薬を示さず。然し小柴胡を除いて、他に相当するもの無し。龐氏は「及二焦」の三字を刪つて、曰く、「先づ小柴胡湯に宜し。「愈ゆべし」は「期門を刺すべし」に。(愈ゆべしは、当に愈えざるべしなるべし)」と。郭氏 曰く、「常氏 云ふ、其の実するに随つて瀉す。鍼家は当に瀉法を行ふべしと。亦 小柴胡湯を用ゐるも可なり」と。又曰ふ、「上焦 中焦は、營衛の出づる所なり。自づから愈えざる者の如きは、小柴胡湯を服す」と。許氏『本事方』に、適来の証を治するに、小柴胡

加地黄湯を用ゐたる治驗有り。陳氏『婦人良方』に曰く、「胃氣を犯すこと無き者は、下すべからずと言ふなり。小柴胡湯之を主る。若し湯の行くこと遅ければ、則ち熱胃に入つて津を燥せしむ。中焦上焦榮へず、血結胸の状を成さば、須く当に期門に鍼すべし」と。並に以て徵すべし。且つ傷寒發熱の條に、汪氏曰く、「此汗吐下の三法、皆用ゐるべからざるを言ふなり。必ずや小柴胡湯を与へ、以て邪熱を和解す。斯に其の經調はずして、經血調ひ、讞語等の証、治せずして愈ゆ」と。錢氏徐大椿の説も亦同じ。是と為す。蓋し病讞語し鬼状を見る如きに至らば、未だ藥勿く自づから愈ゆる者有らざらん。必ず「自愈」の一句は、胃氣及び上二焦を犯すこと無しと為して發するなり。方氏は以て紅汗の類と為す。恐らくは然らず。又或いは曰く、二焦の二は、衍文なりと。胃氣を犯すとは、下を言ふ。上焦は、吐を言ふ。適断は、則ち血結に属すと雖も、而し敢へて之を攻めざる者は、僅に是血道邪の為に渋滞し、瘀畜有るに非ず。故に小柴胡湯にて、以て其の熱を清さば、則ち結自づから散ず。小柴胡は血熱を解すとの、楊士瀛の説は当ると為す。即ち『広要』中に拈ず。『医学読書記』にも亦曰く、「血結も亦能く寒熱を作す。柴胡亦能く血熱を去る。独り和解の謂のみならず。之を要すれば此の二証は、俱に邪血を遏ちて、遂に胸脇を拒む。実は少陽の類變なり。更に一証有り。陽明の病下血讞語する者、是なり。此胃実の熱、血に迫つて下奪し、血室随つて空に、邪随つて乗じて入る者にて、其の機稍前証と異なり。然も亦恐らくは

柴胡の宜しき所ならん。但胃実の軽重、須く加察すべき所ならん。

風湿

風湿は、太陽の病にして湿邪を兼ねる、是なり。風は中風の風に非ず。蓋し風寒を総括する詞ならん。病を得るの初め、両邪相合し、湿性濡滯するを以て、故に数日の間、猶ほ骨節に淹留して、其の衛虚し、其の寒亦甚だし。「八九日」の三字は、当に「風湿相搏」の句と位を易へて看るべし。「傷寒 五六日 中風」、及び「婦人 中風 七八日」云云、經水適断する者は、俱に同例なり。治するに宜しく温め発すべし。而して証に輕重有り。故に桂枝附子、甘草附子の二湯を設く。桂枝附子湯の証に、嘔せず渴せざるを挙げる者は、蓋し既に数日を経るを以て、人其の邪陥らんかと疑ひ、然し病猶ほ表に在る。故に此の二候を掲げ、以て裏に邪無きの徴と為す。甘草附子湯の証の短氣、前注に邪胸膈に在る者と為す。是に非ず。『金匱』歴節に、亦此の証有り。俱に是表邪遏を被り、裏氣暢びざるの致す所なり。如し裏に素熱有る者なれば、桂を去つて朮を加ふの法有り。桂を去り朮を加ふの義、尤氏の解稍妥る。『金匱注』と同じ。故に拈出せず。舒氏「大便堅」を改め、「大便溏」と為さんと欲す。誤りなり。蓋し裏に湿有る者は、大便滑洩し、小便利せず。此其の常ならん。今大

便堅く、小便自づから利する者は、是湿唯表に在つて、裏素熱有るを知る。因つて桂を去つて用ゐず。然し既に桂無ければ、則ち殊に外散の能少なし。故に之に易へるに朮を以てす。方後に曰く附子朮は併に皮内を走る。則ち此の方の朮は、是表湿を發すると爲して、脾を燥すと爲さざること明かなり。仲景の時、朮に蒼白の分無し。未だ其の用ゐる所何と爲すかを知らず。然し今の世に在らば、則ち二朮宜しきに随ひ妙と爲す。此の方、及び甘草附子湯は、並に蒼朮を用ゐて、正に其の効を見る。施氏『統易簡方』に辨ずる所甚だ精し。今左に拈む。曰く、「夫れ湿を去るに朮を以て主と爲す。古方及び『本經』に、止朮と言ふ。未だ嘗て蒼白の分有らず。陶隱居朮に兩種有ると言ふ自り、後人白き者得難きを以て、故に貴びて之を用ゆ。殊に知らず白朮肉厚くして味甘し。甘は脾に入り、能く緩して氣を養ふ。凡そ氣を養ひ中を調ふに、則ち相宜しきのみ。蒼朮は肉薄くして、味辛烈なり。辛烈なれば氣を走らせて外を發す。凡そ風を治し湿を去るに於いて、則ち相宜しきのみ」と。又中西惟忠も亦此の方の朮、之を發表に取つて論ず。文元にて録さず。○方後の、「法当に桂を加ふべき」以下五十二字は、『金匱』に無き所なり。風湿の病は、止是の証のみならず。其の詳は『雜病論』中に在り。此れ唯梗概を存すのみ。再び此の二條の証を詳にせば、俱に湿病の表虚寒に属する者にて、蓋し少陰直中と、其の情相似て、其の機は則ち同じからず。

湿熱寒湿

湿熱は、水湿 内に瘀し、熱氣 熏蒸し、相鬱し黄を発す、是なり。此猶ほ陽明の病にて、唯燥湿の分 有り。瘀熱は、唯 發黄 及に蓄血に於いて之を称す。錢説 信ずべし。徐氏 亦曰く、「凡そ瘀字を言ふは、湿を挾むの義 有り」と。瘀を攷ふるに、淤字は疔に从ふに係る。『説文』に曰く、「淤は、澱滓 濁泥にて、水に从ひ於声なり」と。蓋し其の人州都 通ぜず、内に水湿を蓄へて、病を得て後、胃熱 相釀し、以て重濁を為し、殆ど淤泥の黏滯の如し。是鬱 甚だしく黄を成す所以なり。故に茵陳蒿湯を以て、湿熱を逐除す。茵陳蒿湯の條 其の一に腹滿不大便を言はざる者は、省文なり。蓋し茵陳は清熱中の燥藥と為す。故に^ま的に湿熱を解す。又此の湯を用ゐて後、大便 必ず利し、胃熱 能く散じ、則ち湿 小便 自り去る。故に皂角汁の状の如きは、湿 即ち水の類なるを以てなり。○水 一斗二升、煮て三升到る。殊に過濃なるを覚ゆ。「二升」の二字、無き者は勝ると為す。更に二証 有り。其の一は、前証にして未だ内実せざる者にて、単に之を清涼す、梔子柏皮湯の証、是なり。『全嬰方論』の、柏皮湯、小兒衄血、一二勝に至り悶絶するを治すは、即ち本方なり。其の一、湿熱 外に迫る者にて、專ら之を発散す、麻黄連軹赤小豆湯の証、是なり。先教諭の弟子 西仲潜 曰く、「比の二條は、証方 互錯せり。瘀熱 裏に在らば、理は表を発するに宜しからず。必ず是 梔子柏湯の証なり。

身黄 發熱すれば、即ち表候と為す。殆ど即ち赤小豆湯の証なり」と。此 前人の未だ言はざる所にて、殊に理 有る似し。雲岐子は此の三湯を以て三陽に配す。亦 互いに徴するに足る。○先友 伊沢信恬 曰く、「連軛は、即ち連翹なり。『本草経』に載る所の物は、而し其の根に非ず。『千金』及び『翼』は、並に連翹に作る。『爾雅』に、「連は、異翹なり」と。郭璞 注して、一名 連苕なりと。皆 証を取るべし。且つ『詩』陳風に、「邛に旨苕 有り」を、陸璣 疏して、「苕は、苕饒なり。幽州人 之を翹饒と謂ふ」と。『漢書』礼楽志に、「兼ねて雲招給 南郊に祠す」を、『顔師古注』に、「招は、読翹と同じ」と。『文選』吳都賦に、「関を翹し鼎を扛」を、李善 注して、「列子 曰く、孔子 勁くして能く 国门の関を招く。而して 肯へて力を以て聞かず。此に 抛つて、翹、苕、軛、実は 一声なり」と。此の説 覈と為す。又『金鑑』に曰く、「梓皮 無からば、茵陳を以て之に代ふ」と。愚意ふに 李中梓の桑白皮を以て之に代ふに如かず。寒湿は、其の人 素胃 寒し湿 有り。邪氣 相鬱し黄を為し、穀瘿、及び寒湿 裏に有るの証の如きが、是なり。此 太陰の病の類変にして、寒も亦 黄を発する者にて、猶ほ是 鬱躓の致す所なり。此の証、後世 名づけて陰黄と為す。韓祗和の方説 殊に詳し。

傷寒論述義卷第四終

述霍乱

霍乱編 本経に在るも、未だ意の義審ならず。汪氏は以て『雑病論』の錯する所と為す。或いは曰く、「厥陰篇に吐利の諸條有り。後人霍乱も亦吐利有るを以て、仍ほ雑病中に^{ひら}摭ひ、以て其の後に附く。正に瘧湿 喝は俱に表証有り。故に掲ぐるに太陽の前に在ると其の例同じ。但彼は則ち『金匱』に具載し、此は則ち『金匱』に録さず。故に今の人其の雑病論の遺為るを知る者無し。且つ『脈経』霍乱転筋を叙すに、百合狐惑の後、中風歴節の前に在り。『外台』は本篇を引いて、曰く第十七巻中に出づ。並に徴すべきなり」と。此の説是の似し。

霍乱は、内に傷らるる所有り、外に感ずる所有り、揮霍の間、便ち撩乱を致す、是なり。霍乱の因る所は、『巢源』『千金』に、其の説明覈なり。蓋し諸々『肘後』に本づかん。之を要すれば内に飲食宿滞無ければ、何を以て腹痛吐瀉有らん。外に邪気感触すること無ければ、

ば、何を以て揮霍 撩乱 有らん。外内 相搏つて発するを知るべし。其の病 大抵 夏秋に多しと為し、或いは傷暑に因り、或いは覆を失して冷を受くるに因つて、然し春温 冬寒にも、亦間々之有り。蓋し其の邪 一ならずと雖も、唯 飲食 傷るれば、則ち均しく免れざる所を云ふ。○伊沢信恬 曰く、『易説』に、穀雨の氣 当に至るべくして至らざれば、則ち霍乱 多しと。『春秋考異郵』に、襄公 荊に朝し、士卒 歳に度し、愁悲 時を失す。泥雨 暑湿、霍乱の病 多しと。(並に『太平御覽』引く)『漢書』敞助伝に、「夏月 暑時、欧泄 霍乱の病、相随つて属すなり」と。此 霍乱の名、古書に見る者も、亦 以て霍乱 所因の攷証に資すべけん。其の証、内にして清濁 相干し、心腹 攪刺し、上に吐し下に瀉す。『靈枢』經脈篇、「足太陰の別、名づけて、公孫と曰く。云云。厥氣 上逆すれば則ち霍乱す」又 五乱篇、「清氣 陰に在り、濁氣 陽に在り。營氣 脈に順ひ、衛氣 逆行し、清濁 相干す。云云。腸胃を乱さば、則ち霍乱を為す」王肯堂 曰く、「巢氏 乃ち此の一條に因る」と。○霍乱 必ず腹痛 有り。經に言はざるは、蓋し文を省くならん。外は而し邪正 相搏ち、発熱し頭痛し身疼 惡寒す。成氏は此の諸証を以て、霍乱に傷寒を兼ねると為す。是に非ず。尤氏は「又利 止み復た更に発熱す」を注して曰く、「利 止み裏 和するに迨およばば則ち邪氣 復た還つて表に之きて、発熱を為す。今の人 吐利の後、往往 発熱し煩渴する者は、是なり」と。治を施すの法は、裏を以て急と為さば即ち先づ其の裏を温むの例なり。其の病 軽き者は、熱 多きと寒 多きの分 有り。俱に胃湿を去るを

以て要と為す。而して五苓 理中の別有り。寒熱分鬩、亦其の人胃氣強弱に在り。然し傷寒寒熱の異に比さず。俱に是中焦清濁相干す者なり。故に治方敢へて清涼温補上に在つて、分たず。唯胃湿を去るを以て第一義と為す。縦へば其の邪熱相得て、水を飲まんと欲する者も、亦水穀を分清し、以て之を治と為すに過ぎざるのみ。蓋し五苓散を用ゐ、水をして膀胱従り去らしむれば、則ち清濁自づから分れ、吐瀉自づから止みて、邪も亦従つて解す。如し其の胃虚寒すれば、則ち理中丸を以て寒を散じ胃を温むれば、則ち寒湿去つて、中焦和す。徐大椿謂ふ所の五苓の其の清濁を分かつ所以、理中の陽を壮んにす所以の者とは、深く其の理を得。『神農本草經疏』に曰く、「朮能く湿を燥し、湿去らば則ち脾健なり。故に補と曰く。寧ろ知る脾虚して湿邪無き者は、之を用ゆれば反つて脾家の津液を燥竭すること致す。是脾陰を損なふなり。何ぞ補の云に足らんや」と。亦篤論なり又『簡易方』理中円下に曰く、「其の円なる者は、蜜を得て潤にて、脾に入つて快と為す。温補に宜しと為す。若し以て寒邪を蕩滌せんと、冷積を祛逐せんとせば、則ち湯を捷と為す。且つ蜜の殢脾を免るなり」と。○理中丸、丸を為すに鶏子黄許りの大いさの如し。攷ふるに『本草序例』に、陶氏は以て十梧子を准と為し、『唐本草』は、以て四十梧子を准と為す。詳しくは大陥胸丸下に録す。○按ずるに『外台』に『仲景論』を引いて云ふ、「霍乱臍上築する者は、腎氣動ずるなり。先づ氣を療ず。理中湯より、朮を去つて桂を加ふ」と。凡そ方に朮を加ふる者は、内虚

するを以てなり。桂を加ふる者は、奔豚を作すを恐るるなり。理中湯方、人參は二兩、余は並に三兩なり。煮服 加減の法に、文少異有り。今具録せず。次いで一係、及び附子粳米湯方有り。並に本經 佚する所に係る。云ふ、又霍乱 臍上築する者は、吐すること多きを以ての故なり。若し吐多き者は、理中湯之を主る。方は前法の如く加減す。霍乱 四逆し、吐すること少なく嘔すること多き者は、附子粳米湯之を主る。方は、附子一枚、炮じ、皮を去つて、六片に破る。半夏半升、洗ひ、完て用ふ。甘草一兩、炙る。大棗十枚、擘く。粳米半升。右五味切り、水八升を以て、米を煮て熟せしめ滓を去り、一升を温服す。日に三たびす。『小品』『千金』同じ。第十七卷中に出づ。一方に、乾姜一兩有り。今詳に『千金』に乾姜有り。云ふ、仲景方無しと。其の重き者は、陽乏しく寒盛んなれば、則ち更に次第之を療ずるに、猶ほ少陰の例のごとし。一は陽を回するを以て主と為す。四逆湯、此の條の發熱も、恐らくは亦虚陽外越の熱ならん。又転筋の一証を、經に言はざるは、豈四肢拘急、即ち其の義を蘊むを以てならんや。通脈四逆湯、通脈の字今補ふ。此の條小便復た利す。厥陰篇、「嘔して脈弱、小便復た利す」と、其の機相同じ。及び加猪胆湯、錫駒の注は志聡に本づく。志聡の注、及び錫駒の明礬の説は、並に高世栻の言に係る。四逆加人參湯の如き、此の証之を通脈四逆に較ぶれば、殆ど寒彼より軽くして、液燥は則ち稍加ふる者なり。尤氏曰く、「此の條本々霍乱の証に非ず。仲景以て霍乱の後、多く、裏虚不足して、当に温養すべ

き者有ると為す。故に特に此に隸せんか」と。此の説誤りなり。是なり。其の裏和して表未だ和せざる者は、桂枝湯を用ゆ。即ち乃ち其の表を攻むの例なり。尤氏曰く、「消息と曰ひ、小しく之を和すと曰ふ者は、吐利の余、裏氣已に傷るるを以て、故に必ず其の汗すべきを消息して、後之を汗し、亦大汗すべからずして、小しく之を和すべきなり」と。消息の字は、『医賸』に説有り。又枚乗の「七発」に、「從容猗靡、陽陰を消息す」と。又古本『玉篇』の消息の下に曰く、『周易』に、消息盈虚を尚ぶは、天行なり。野王按ずるに、消息は、猶ほ斟酌のごとし」と。○『霍乱証治』は、実に此の数端に外ならず。唯許仁は則ち『乾霍乱論』に、能く仲景の未だ言はざるの秘を發す。故に『明理論』既に表して之を出す。

復勞後差述

陰陽易の一証は、無義、述ぶべし。仍ほ贅せず。

差後復勞は、大邪既に解し、陰陽未だ諧ととのはず、早く労働有り、余熱復た集る、是なり。此『巢源』に本づく。熱必ず内自り發す。故に枳実梔子湯。其の対治を為す。此の條は其の証を挙げず、想ふに心煩不眠等は、必ず有る所と為す。徐大椿曰く、「復勞は、病後氣虚

し、邪氣又上焦に結するに因る。其の症一ならず。故に其の病形を著けず。惟其上焦の邪を散ずれば足る。後人峻補の劑を以て勞復を治すれば、則ち病變「百出す」と。此の説汪氏と同じ。而して當を得る似し。蓋し此の方梔子厚朴湯の類に属すれば、則ち亦膈を清し滯を利すに外ならざらん。成氏は以て吐劑を為し、錢氏は以て發汗を為し、周氏は以て食復の治を為す如きは、皆未だ然らざる似し。方後の「覆令微似汗」の五字は、疑ふべし。或いは是發汗に豉を用ゐる者有るに因つて、誤つて之を附さん。○『説文』に、漿は、酢漿なり。水に从ひ將に省声。『本草』玉石部下品、新補に云ふ、「漿水は、味甘酸、微温にて毒無し」と。又云ふ、「粟米新熟白花の者佳し。煎じ醋にせしめて、嘔噦を止む」と。朱氏『本草衍義』補遺に曰く、「漿水は、味甘酸にして性涼。善く滯物を走化し、煩渴を解消す」と。又張氏『本經逢原』に曰く、「水を以て空煎し、熟極するを候ひ薬を煮る。清漿水と名づく。其の下趨上涌に至らざるを取る」と。謬なり。小柴胡湯の如きも、亦其の正治なり。此上方の証と、病位同じからず。然し其の熱内自り發するは則ち一なり。脈浮の者の如きは、病後新たに感ずるなり。脈沈実の者の如きは、熱胃に実す。此の証恐らくは必ずしも食復ならず。蓋し勞復も亦胃実を為す者有らん。且つ『巢源』傷寒勞復の候に曰く、「其の脈緊の者は、宜しく之を下すべし」と。是原注に云ふ所と相合す。又可下篇に曰く、「傷寒の後脈沈、沈なる者は内実す。之を下さば解す。大柴胡湯に宜し」と。並に証すべし。竹葉石膏湯の証の

如きは、胃液復せず、虚熱上逆する者なり。此の條成氏謂ふ、「津液足らずして、虚羸し、余熱未だ尽きず。熱すれば則ち氣を傷る。故に少氣し氣逆し吐さんと欲す」と。諸家概ね之に従ふ。然し愚竊に疑ふ虚羸し少氣し、氣逆し吐さんと欲するは、些熱無き似し。何を以て主るに清涼を以てせんや。又疑ふ『玉函』に載る所の、「勞復發熱する者は、麥門冬湯之を主る」も、亦証方協はざる似し。因つて以為く恐らくは是兩條其の方互錯せん。此の條の虚羸小氣の諸証は、蓋し麥門冬湯の主る所ならん。即ち『金匱』の「大逆上氣、咽喉利せず」の、逆を止め氣を下すに相類す。彼に謂ふ所の勞復發熱する者は、却つて是竹葉石膏湯の証なり。然し実に臆揣に係る。姑く録し識者を俟つ。○『外台』の、『古今錄驗』解五蒸湯は、本方に、半夏 麥門冬を去つて、茯苓 葛根 乾地黄 知母 黄芩を加ふ。枳椇の大黃を加ふるは、蓋し謂ふ所の食復ならん。熱論に曰く、「病勢少しく愈々、肉を食らへば則ち復す。多食すれば則ち遺る」と。此葛巢諸家に本づく所なり。○『医心方』に、『経心方』を引いて云ふ、「胡粉十二菥。博菥は、大小方寸、是なり」と。牡蛎沢瀉散の証の如きは、輪化りんか職しやくらず、水氣外溢する者なり。成氏曰く、『金匱要略』に云ふ、腰以下腫るるは、当に小便を利すべし。牡蛎沢瀉散を与ふれば、小便利して水を散ず」と。按ずるに此の方の括樓根は、蓋し淡滲に取り、其の生津を取らず。『金匱』に小便利せざるを治する者水氣有るに、括樓瞿麥丸を用ふ、以て相証すべし。而して『本草』には則ち曰く、小便利するを止むと。未だ

何の謂か審にせず。理中丸の証の如きは、胃虚し上焦に飲有る者なり。「胸上」は、諸注多く「胃上」に作る。然し他に此の称無し。愚意ふに喜唾了了たらずは、是胸上に寒有つて致す所にして、胸寒は必ず胃寒を生ず。故に理中を用ひ胃を温め、以て上焦に達す。膈上寒飲有らば、四逆を用ゆ。『金匱』に又曰く、「上焦に寒有らば、其の口涎多し」と。又曰く、「色黄なる者は、胸上寒有り」と。此の二証は、蓋し其の病後に係るを以て之を隸するに過ぎず。実は必ずしも労復ならず。病邪解除し、既に薬す勿きに至らば、則ち唯調養に任す。医の能事、是に畢る。是故結んで穀を損ずれば則ち愈ゆるを以て、亦百病を例とす所以なり。

附答問

問ふ。傷寒既に外感の総称と為さば、則ち後世仲景は専ら冬時の正傷寒を為して言を立つると謂ふ者は、其の謬り辨を待たずして知る。但其の以て外感の総称と為す。前人に更に此の説有りや否や。子和の意を審にするに、蓋し之を叔和に原づかん。温熱瘧痢等の疾、皆冬寒に傷れ、重ねて時氣に感ずるに因つて、故に傷寒を以て之を該ねて謂ふ。恐らく信を取り

難し。且つ仲景の書を命ずる所以の者は、果して風寒 温疫、暑湿 瘧痢等に至るを総括する詞ならんや。或いは又 仲景 温疫を略して言ふか。知らず実に然るや。

曰く。成氏 傷寒例の、「凡そ傷寒の病、多く風寒 従り之を得」を注して曰く、「凡そ中風と傷寒との病 為るは、古 自り通じて之を傷寒と謂ふ」と。又 劉河間『傷寒直格』に曰く、「寒邪 害を為すこと至大なり。故に一切の内 外 傷る所、俱に汗を受くるの熱病を為す者は、通じて之を傷寒と謂ふなり」と。此の二説は稍 近しと為す。張景岳の言も亦之に同じ。然し要は未だ明瞭を為さず。是を以て『輯義』も復た繁引せず。如し夫れ謂ふ所の外感 総称の者とせば、亦 豈 諸般の外邪を総括して云はんや。蓋し本経、拈げて之を充さん。猶ほ以て内傷 諸疾を療ずるに足る。而して況や外感に於いてをや。誠に其の理を該ね尽さざること莫からん。然し論を立つるの本旨は、則ち仍ほ風寒 二邪と、時氣 温疫とに過ぎず。何ぞ、暑の氣を傷り、湿の關節に流れ、及び痰癘 滯利の類、并に各々定証 有つて、薬も亦 各々其の宜しきを異にす。惟 病の変化 百端、状態 一ならざる者、風寒の如きこと莫からんや。時氣 温疫の如きも、本 自り一種の病 為り。晋 唐 諸家の言 徴すべきこと有り。但 其の証、邪焰 或いは勝ると雖も、其の病情 固より風寒と殊ならざれば、則ち治法も須く別に 処分を設くべきこと無し。仲 景 暑湿等の疾を以て、之を雜病中に掲げて、時氣 温疫は、更へざるを觀れば 標目を立つる、其の意を見るべきなり。唯 邪氣は必ず人に因つて化し、風寒 時氣 温疫上に在つて、其の証

候を區別することを得ず。故に仲景云ふ所の、中風 傷寒 温病等は、僅に是 其の名を仮て、以て其の病機を形容する者にして、述作の本旨は、仍ほ風寒 時氣 温疫を概ねて、之を称して傷寒と為すに非ずして何ぞや。倘し參ずるに『難經』の傷寒 幾く有るの語を以てすれば、則ち其の義 更に燦然たり。後世 吳又可の如きは、巧みに銜張を為すと雖も、而し其の歸する所を要すれば、則ち実に仲景 藩籬の外に出づること能はず。但是 事を踵ぎ精を加ふれば、則ち之有るなり。仲景 温疫を略すと謂ふは、奚ぞ可ならんか。『難經』は分ちて五証と爲し、傷寒例は傷寒 時行の異を論ず。巢源は傷寒 時氣 熱病 温病 疫癘の五類を立て、『外台』は傷寒 天行 温病の三門を立つ。今 諸家を熟審するに、風寒 時氣 温疫は、庶幾は之を概ねん。

問ふ。冒頭は、每章の発題にして、繋ぐ所 軽きに匪ず。閔氏曰く、「傷寒の二字を以て之に冠する者 有り。傷寒 一日、太陽之を受け、脈若し靜なる者は伝らずと為すの類の如きは、中風を兼ねて言ふ者なり。傷寒の病 為るは、多く風寒 従り之を得るを以て、故に或いは中風、或いは傷寒、総じて傷寒を以て称すなり。其中 専ら傷寒と称し、中風を兼ねざる者、傷寒 脈浮、汗を發せず因つて衄を致す者は、麻黄湯 之を主るの類の如きが、是なり。中風 傷寒の外、湿病 風湿の類の如きも、亦 論中に在る者 有り。以て傷寒を混称すべからざること明かなり。但 病人を称し、但 病を称し、厥を称し、嘔を称し、下利等の証を称し。明らかに傷

寒 中風 雜病と言はざる者 有り。大概 之を言ふなり」と。此の説 竅要を得る似し。然し更に但 太陽の病と冒する者 有り。表 虚して傷寒と冒する者 有り。表 実して中風を冒する者 有り。其の文法 一ならざる所以の者は、未だ其の義を審にせず。

曰く。冒頭は此を喚び彼を起こすの辞に過ぎず。或いは脈証を此に寓し、或いは来路を此に示す。固より定例 有ること能はず。蓋し病を識るの要は、其の名を立つるに在りて、施治の要は、脈証に就いて病を求むるに在り。脈証に就いて病を求むれば、則ち自然に情状 発露し、左右原に逢ひ、其の名も亦従つて定むべし。倘し徒らに名を立て病を充つるを事とせば、則ち遂に吾が成見を以て万変を律するを免れず。是故 各篇の提綱、及び太陽と風寒の分かちの類の如きは、此 名を掲げ病を示す所以なり。題するに傷寒を以て、而して或いは専ら稱し、或いは兼ねて稱す。題するに太陽の病を以て、而して或いは表虚を言ひ、或いは表実を言ひ、或いは虚実 該ぬるを言ふ。表実に中風を冒し、表虚に傷寒を冒す。此皆 文を互へて意を見る。人をして脈証に就いて病を求めしむる所以にして、円機の妙、此 自りして生ず。再び陽明 厥陰の多く傷寒を冒する者の如きは、其の来たること一ならざるを以て、而して大概 之を言ふの義なり。陽明の病を稱する如きは、姑く仮に起語と為す。而して之を類証に施す者も、亦多く之 有り。並に是 変例に属す。他に病と云ひ、病人と云ひ、某家と云ひ、発汗吐下の後と云ふの類、諸々病名を冒さざる者は、皆 宜しきに随つて文を構ふ者なるのみ。読者 冒頭

を以て全章と、参互之を思索し、過鑿を為すこと勿らば、則ち庶おほいに経意を得ん。

問ふ。諸家の注釈、條を逐つて更易し、『輯義』既に其の非を闢く。然らば則ち叔和の撰次、果して仲景の旨を得ると為すや否や。且つ其の叙次を何如に義を取るか。

曰く。仲景の旧本、隋唐間の人と雖も、猶ほ観ること能はずして、千百年の後に生ず。撰次の得失を議せんと欲し、亦慎れざらずや。然し姑く文義に依つて之を攷ふるに、仲景の意、唯是脈証に就いて病を示す。始め渺深測り難きの趣有るに非ず。叔和の撰次、大約事類を以て相従ふ。亦人をして証を辨じ治を措くの方を知り易からしめんと欲すれば、則ち悉く仲景の旧に非ずと雖も、亦大いに異同有るに匪ず。之を周易に譬ふれば、費氏以来、象象文言を割り、之を各卦の下に列す。尼山の真に非ずと雖も、亦道を恃む事無し。今事類相従の例を推すに、以て撰次の意を論じ、及に中間或いは後人錯する所に似き者、具列するに左の如し。太陽上篇は、則ち首章より第十二章に至つて、太陽綱領と、寒熱大要とを以て、錯綜を次と為す。第八章は、『玉函』以来、之を篇首に冠す。然し既に太陽の病を以て篇と為さば、則ち其の提綱を以て始と為す。理に於いて相協かなふ。第十三章より末章に至つては、皆表虚一類に係る。而して第二十七章は、上を承け以て大汗後更に一証有るを示す。中篇は、則ち首章より第十一章に至つては、表実一類に係る。第十二章より、第二十八章に至つては、発表

の余義を申明す。此以下篇末に至つては、俱に太陽伝変 諸候と為す。更に其の類を析かば、則ち第二十九章、第三十章は、是 汗吐下後 自ら愈ゆる者にて、第三十一二兩章は、是 下後 発汗の逆、第三十三章より、第四十一章に至つては、発汗 及び吐下後の虚証に係つて、結するに胃実を以てす。『宗印』に曰く、「本経 凡そ虚証を論じ、後 実証一條を結ぶ。正氣を論じて後、邪氣 一節を列す。此論を造るの章法なり」と。按ずるに此の説亦 未だ必ずしも然らず。第四十二章より、第四十五章に至つては、即ち五苓散の証なり。第四十六章は、未だ脈を持せざる時 師 歎をせしめ。其の義は前後に属さず。恐らくは前の汗後 虚証中の錯文ならん。第四十七章は、前の水を飲まんと欲する証を承く。第四十八章は、前の水逆を承け、以て胃虚の吐 有るを示す。第四十九章より、第五十四章に至つては、乃ち梔豉の諸証なり。第五十五章も、真武湯亦 当に前の汗後 虚証中に在るべきに似る。第五十六章より、第六十二章に至つては、汗を禁ずるの戒と為す。第六十三章より、第六十七章に至つては、病 表裏を兼ねる者を言ふ。第六十八章は、『玉函』等に拠つて、上篇の錯^{まじ}はるを知る。第六十九章より、第八十二章に至つては、柴胡 一類に係る。而して七十七章は、第七十四章を承け、第八十章は、其の証 上條と相似る。仍ほ対看に供ふ。第八十一章は、桃核承氣湯疑ふに後段 瘀血中に錯はる所にて、当に抵当湯の條の前に在るべきに似る。第八十三 四兩章は、縦横を論ず。第八十七章より、九十五章に至つては、火逆 一類に係る。第九十六章より、第九十九章に至つては、

誤吐と嘔吐との証を叙す。第一百章より、第一百二章に至つては、瘀血一類に係る。末章は、則ち上証を承け、小便利するは蓄に瘀血ならざるを示すなり。下篇は、亦皆太陽変ずる所の数証に属す。首章より第三章に至つては、結胸と臑結と痞との異を辨ず。第四章より、十五章に至つては、結胸の一類に係る。而して第十四章は、文蛤散中篇の五苓散の証中に錯る所なり。第十六章は、太少併病なり。第十七、八、九の三章は、熱血室に入る。第二十章より、二十二章に至つては、太少併病なり。蓋し十六章より此に至つて、結胸の状の如く、心下結し、胸脇滿等の証有るに因つて、而して類を連ね之に及ぶなり。第二十三章より、第四十一章に至つては、皆痞鞭に係る。而して第三十六章は、麻杏甘石湯疑ふに錯出と為さん。或いは次條に下後を論ずるを以て、連ね及ぶか。第四十二章より、四十四章に至つては、白虎加人參湯の証なり。第四十五、六の兩章は、太少合併なり。第四十七章は、其の上章の証の、是外内擾動なる故を承くるに上熱下冷を以てす。第四十八、九の兩章は、風湿相搏つ。第五十章は、白虎湯恐くは宜しく移して前項の加人參湯の類に在るべし。第五十一章は、是素虛証なり。末章は、即ち前章の義を申す。蓋し太陽の三篇は、每類必ず數條を具す。故に端緒尋ぬべきこと有り。其の他は則ち大抵各章類を殊にし、区画を易へず。陽明等の如きは、尤も淆糅を覚ふ。知らざる所を闕くも可なり。少陽太陰は、寥寥なる數章に過ぎず。少陰も亦類從し難きこと有り。然して斯の三篇は、約略し思ふて得べし。厥陰は、則ち正証厥利嘔噦に与り、

界限 截然たり。辨を待つて後知らず。夫れ各篇中、此の類 彼に接し、彼の類 此を承くの意の如し。則ち或いは推明すべき者 有ると雖も、而し亦 何ぞ六十四卦の序 有る如きならんや。愚亦妄りに牽強を為すことを欲せず。且つ有識の論定を待つのみ。

問ふ。林億等の序に、合せ三百九十七法と称す。未だ其の指すを知らず。

曰く。此 実に謂ふこと無きの言なり。故に王氏『溯源集』、反つて復た糾辨し、殊に確核を為す。而して後人 更に説を為す者 有り。竟に附湊を免れず。周自閑の如きは、趙氏 翻雕の宋本に拠つて、以て王氏を駁す。『呉医彙講』に見る。今 宋本を攷ふるに、每篇の首に、其の幾法を註する者は、通計三百八十七法を得る。是 王氏 疑ひを発する所以にして、周氏の檢攷密ならず、復た其の燼を吹く。晒ふべきこと甚だし。

問ふ。経中の脈位は、多く泛称に係る。而して問々某部を指す者 有り。称するに陰陽を以てする者 有り。其の義 何如。

曰く。本経の脈位は、実に『十八難』に本づく。寸口 関上 尺中を以て、之を三焦に配す。而して更に寸口を以て、表と衛とを候ひ、尺中 裏と營とを候ひ、趺陽 亦胃を候ひ、少陰は、辨脈 及び『金匱』を見るに、而して亦 下焦を候ふ。大抵 病邪 瀰漫する者は、各部 状を同

ふす。是を以て多く泛称に従ふ。病一処に在る者は、脈随つて変ず。是を以て或いは直に其の部を指す。然して亦互文にて意を見る処有り。此は則ち読者の活看に在るのみ。陰陽の名、其の以て尺寸と為す者は、恐らく未だ誤りと為すべからず。蓋し二難 尺寸を以て陰陽と為す。辨脈第三章も、亦陽脈陰脈を以て、寸尺と為す。又曰く、「寸口関上 尺中の三処、大小浮沈 遲数 同等、寒熱 解せざる者 有りと雖も、此の脈陰陽 和平と為す」と。『千金翼方』に亦曰く「寸口関上は陽と為す。尺中は陰と為す」と。皆以て見るべし。其の以て浮沈と為す者も、亦理は然るなり。然して陰陽俱に浮なるに至つては、竟に通ぜざるを覚ふ。則ち俱に未だ確實と為さず。宜しく之を闕如に附すべくして可なり。要は其の候ふ所、唯是表裏氣血の分に過ぎざるのみ。

問ふ。經中の脈状、其の名凡そ幾ばくぞ。而して子且つ常変有りと言ふ。常變の義は、未だ前聞せず。

曰く。脈の名凡そ二十有六。云く浮、云く沈、云く数、云く遲、云く緩、云く緊、云く弦、云く長、云く滑、云く瀉、云く大、云く洪、云く芤、云く実、云く小、云く細、云く微、云く弱、云く虚、云く短、云く促、云く疾、云く結、云く代、云く停、云く厥、是なり。停と厥とは、義晰らかならず。動数の動と、数急の急とは、俱に其の勢ひを言ふ。形状の謂に非ざる

なり。謂ふ所の常変なる者は、一脈に各常と変と有るなり。仮如ば病表に在つて、熱外に盛んなれば必ず浮脈を見る。豈浮脈の常に非ざらんや。更に裏熱外熏するもの有り、白虎の証、及び陽明太陰の傷寒脈浮緩、是なり。邪上焦に結するもの有り。結胸、及び瓜蒂散の証、是なり。血分灼熱するもの有り。陽明抵当の証、是なり。虚寒陽越するもの有り。四逆証、是なり。皆脈をして浮ならしむ。豈浮脈の変に非ざらんや。沈は裏と為し寒と為す。然して亦肌表寒壅と為し、麻附辛湯の証、是なり。裏熱結実と為し。陽明脈沈は裏に在ると為す。是なり。数は熱盛と為し、然して亦胃冷客熱と為し、病人脈數、是なり。虚寒陽踰と為す。少陰の病脈細沈數、是なり。遲は寒と為し虚と為す。然して亦熱結と為し、結胸、及び大承氣の証、是なり。弦は寒と為し、『金匱』に見る。然して亦熱盛と為す本經皆然り。の類の如きは、皆其の義なり。其の一脈に數候有る所以の者は、兼ねる所其の位に与つて、神の有無、固より宜しく意知すべし。夫れ緊の寒熱表裏を通じて、病実と為し、滑の水燥食尿を通じて、熱盛と為し、瀉の通じて血滯と為し、洪の通じて邪擾と為すの類の如きは、皆其の一定なる者なり。大は実大有り、虚大有り。細は微細あり、緊細有りの類の如きは、最も須く分看すべし。蓋し脈理は玄深にして、其の要を知るを貴ぶ。柯氏の体用を以て辨を為す若きは、其の言精と雖も、猶ほ未だ褻切ならず。学者経旨を熟釈し、參じて先人著す所の『脈学輯要』を以てすれば、則ち必ず思ひ半ばに過ぐる者あらん。

問ふ。韓祗和曰く、「傷寒の病を治するに、脈を以て先と為し、証は後と為す」と。朱奉議曰く、「傷寒 外証を看ること多しと為す。未だ診せざる先に問へば、最も准ずること有りとなす」と。二説適々相反す。今 經文を觀るに、大抵 証を詳にして脈を略す。是 仲景 証を重くして脈を重くせざるや。

曰く。傷寒を治するに須く脈証を互參すべし。偏重する所無く、經の脈を略す者は、多くは省文に係る。況や脈の類 為るをや。固より証の繁なるに如かず。更に脈を捨て証に従ふ者有り。傷寒 脈 浮緩にして、大青龍を用ふ、是なり。証を捨て脈に従ふ者有り。身体 疼痛して、四逆を用ふ、是なり。之を要すれば、病の虚実、邪の進退、及び生死の訣、皆脈に于いて驗せざるし。則ち韓氏の言、恐らくは經と錯らざるなり。

問ふ。本經 三陽に於いて甚だ詳しくして、三陰 殆ど略す。呂元膺は以て欠文 有ると為す。豈 其 然るや。

曰く。否。火動じ水静なるは、本是 定理なり。故に三陽は伝変 多くして、三陰は伝变 少なし。況や三陰 其の位 相同じなるをや。杜清碧曰く、「陽熱の証、変態 一ならず。三法 一たび差へば、死生 掌を反す。陰寒の邪、復た伝变せず、一定の治 有るの比に非ず」と。王安

道曰く、「若し薬を以て誤治して、変証と成らば、則ち惟太陽多しと為す。縦へば三陰の証をして、亦或いは寒薬にて誤治して、寒に変ずる者有らしむ。然して豈是の如きの衆きに应ぜんや。然らば則ち経の三陰を略すも、亦何ぞ怪しむに足らんや。且つ陰証の理、豈彼の三篇の外に有らんや」と。元膺の言、吾信ぜざるなり。

問ふ。中風の名は、経中頗る多し。皆一例とすべきや否や。

曰く。名同じくして義は異なり。此経の例なり。中風、太陽に在れば則ち寒と対して言ひ、表虚の目と為す。陽明に在つては、亦寒と対して言ひ、則ち裏熱の義と為し、陽明の中風と称せば、則ち裏熱に表を兼ねる者と為す。少陽に在つては、則ち其の熱殊に劇しき者と為す。三陰に在つては、則ち陽表に復す者と為す。其の義各々異なり。倘し風字を實講し、一義と為して解さんと欲せば。則ち必ず牽強を免れず。『金匱』の如きは、亦半身遂せざると為し、五蔵邪を受くと為し、発狂すと為す。是を以て互証とすべきのみ。

問ふ。仲景の方薬、其の類幾ばく有るや。湯散丸の別。其の理如何。

曰く。云く汗、云く清、云く下、云く温、此正証の治と為す。太陽の桂麻に於ける。少陽の柴胡に於ける。陽明の白虎承氣に於ける。三陰の姜附諸湯に於ける、是なり。云く吐、云

く消、云く補、云く渋、此兼麥の治と為す。膈痰の吐に於ける、停水の消に於ける、虚の補に於ける、脱の渋に於ける、是なり。汗清下温、兼麥亦施す。而して吐消補渋は、正証の須ひざる所なり。且つ此の八法中、細目頗る多し。審にせざるべからず。湯散丸は、則ち薬病各々宜しき所有り。此其の別有る所以なり。蓋し方劑の諸義は、愚著『薬治通義』に詳に之を論じて云ふ。

問ふ。古方の権量、諸説紛糾たりて、之を今の制に準なぞふに、孰れが能く当ると為すか。

曰く。吾が友小島学古尚質嘗て此に従事し、撰して一書を為し、云ふ、仲景の一銖は、今の一釐四毫五絲に当たり、一兩は、今の三分四釐八豪に当たり、一斤は、今の五錢五分六釐八毫に当たり、一斗は、今の量の一升一合零一撮強に当たる。升合皆此従り酌量す。凡そ薬称幾升なる者は、皆薬升之を平に係る。通用の升に非ざるなり」と。但粳米、豉は、此の例に在らず。薬升は、『本草』序例に見る。其の説皆確に根拠有り。以て定論と為すに足るなり。分の名の如きは、愚謂ふ是裁分の分にて、六銖の分に非ず。其の詳説に至つては、並んで『薬治通義』中に拈む。今復た贅せず。

問ふ。刺灸の法に、補瀉有ると聞く。仲景の施す所も、亦復た然るや否や。

曰く。鍼を用つて補瀉するは、詳に『靈樞』に見る。然し仲景の鍼は、唯是瀉のみ。謂ふ所の其の実に随つて之を取る者は、実の微甚に随つて、瀉するに輕重有るを言ふなり。灸艾は、大率陽を回し虚を補ふに在り。然し鍼処核起の灸は、殆ど瀉に属す者なり。孫真人脚氣に灸するに、以て風氣を洩らすと称す。或いはは一轍ならん。虞恒徳『医学或問』の言、宜しく併放すべし。

問ふ。桂枝湯の方、其の病重からざる者は、猶ほ又汗せざれば後服小しく其の間を促し、半日許に三服を尽くさしむと曰く。而して病重き者に至つては、則ち反つて一日一夜周時之を觀て、一劑を服し尽くし、病証猶ほ在る者は、更に服を作すと曰く。是病の輕重、薬の多少、錯る所有るに似る。義解すべからず。

曰く。此錯に非ず。傷寒例に甚だ明らかに、云ふ、「凡そ汗を發するに方薬を温服し、日に三服すと言ふと雖も、若し病劇しく解せざれば、当に其の間を促し、半日中に三服を尽くす。若し病と相阻み、句即し便ち病重きを覺ゆる所有る者は、句一日一夜、当に晬時に之を觀るべし」、是なり。此其の人中必ず奸有つて、薬と之と相格し、因つて煩鬱を致し、其をして病勢加重せると覺多しむ者は、須く従容として劑を施すべきを言ふ。以て其の安きに就くなり。楊仁斉曰く、「病人宿恙を挟み、痰飲癥癖の類の如きもの有り。又汗を隔てて出づ

ること能はざるは、即ち是なるのみ」と。謂ふ所 桂枝湯を服し、反つて煩し解せざるに、先づ風池 風府を刺す者は、殆ど此の類なり。蓋し止に桂枝の一証ならず。往往 此の如き者有り。切に須く熟察すべし。雜葉 乱投の弊 勿れ。褚氏 遺書に曰く、「当に之を験すべきに薬未だ験せざれば、切に亟投を戒む」と。亦此之の謂か。『金匱』耆芍桂酒湯の方後に曰く、「若し心煩 止まざる者は、苦酒阻むを以ての故なり」と。蓋し病と相阻むの阻にて、此の阻字と義を同じくす。

問ふ。五辛の名、『輯義』に引く所の外に出づる者 無きや、否や。

曰く。有り。『荆楚歲時記』に、五辛盤の称 有りて、其の品を著けず。『本草』菜部韭條に、『食医心鏡』を引いて云ふ、「正月の節、五辛を食し以て瘴氣を辟く。蒜 葱 韭 薤 姜、他に諸書載する所の如きは、皆 道家の五辛と、仏家の五辛とのみ。山田正珍 曰く、『玉函經』『千金翼』には、「生冷を禁ず云云」の十五字無し。是 後人の加ふる所なるを知る」と。其の言卓る。

問ふ。火逆 驚狂 煩躁、俱に桂枝を用ゆ。豈 是 表を発し、抑も且つ火熱を礙げざるや。

曰く。嘗て之を庭訓に聞くに、云く、傷風に誤つて灸して煩熱する、及び湯澆 火烧に、救逆

湯甚だ駿あり。湯火傷の重き者は必ず下利す。即ち陽虚の致す所なり。亦久しく之を服せば愈ゆ。切に清涼の剤を用ゆべからず。今此の意を推しはかれば、則ち火熱熏灼するに、遽に寒葉を用ゆれば、氷炭相い激ち、必ず煩擾を致す。猶ほ湯火傷の水洗を禁じ、喝死の冷を得せしむべからざるのごとし。桂の品為るは、辛と雖も燥ならず。温と雖も僭らず。是を以て能く火邪の内犯せる者をして、之を誘つて外越せしむ。殆ど謂ふ所従つて治するなり。蜀漆の火逆を治するは、正に茵陳の黄に於ける、黄耆の湿におけるが如し。徐大椿謂ふ所の薬専ら長するところ有る者か。

問ふ。呉茱萸湯の條にて、子以為く謂ふ所陽明に属する者とは、唯是中焦を指すの詞にして、其の实即ち寒実の証なりと。然らば則ち湯を得て反つて劇しき者は、上焦に属すなり云ふ者は、其の義果して何ぞ。汪氏は以て膈寒と為す。然して膈寒は必ず胃寒自り来る。而して此の方主る所なり。乾嘔涎沫を吐すと、嘔して胸満すとの如きは、何ぞ之を膈寒と謂はざる。魏氏の以て上熱下冷と為す者は、豈優ざらんや。

曰く。詳しく語氣を玩ふに、魏氏も亦太巧を失す。愚を以て之を觀ば、此は少陽の嘔を指して言ふなり。上焦は、蓋し胸脇の互辞なるのみ。「陽明の病、脇下鞭満し、大便せずして嘔し、舌上白胎なる者は、小柴胡湯を与ふべし。上焦通ずることを得て、津液下るを得、云云」

に、成氏曰く、「上焦通ずることを得れば則ち嘔止む」と。以て微すべし。上熱の嘔に、倘し温薬を施さば、両陽相激し、格拒し納れず。湯を得て反つて劇しき所以なり。蓋し此の條更に相反の証を挙げ、以て嘔に上下寒熱の別有るを示す。要するに法を設け變に備ふに過ぎざるのみ。赤石脂禹余糧湯に曰く、「復た止まざる者は、当に其の小便を利すべし」と。『金匱』甘草乾姜湯に曰く、「若し湯を服し已つて渴する者は、消渴に属す」は、均しく一例なり。大抵鹵莽の弊は、近きを略すに生ず、仲景の慮周、是を以て平淺知り易き処に於いて、往往反復して辨を致す。以て軽忽にすべからざるの戒と為す。故に言外に意を生ず。之を求め鑿ち過ぎば、則ち經旨を去ること遠し。樓氏曰く、「湯を得て反つて劇しき者は、火なり。当に生姜黄連を用ゐて之を治すべし」と。魏氏本づく所に似る。又前輩謂く小柴胡の証と為す者有り。然し徴を取るに確かならず。

問ふ。子既に邪に風寒時氣温疫有りと言ふ。而して又病の陰陽は、人に因つて化すと云ふ。其の理奈何。

曰く。請審して之を論ぜん。蓋し風寒は天の常氣と雖も、人如し体虚すれば、必ず感觸を被る。況や時令正しからざれば、最も害を為し易し。倘し非常の異氣有らば、則ち衆人同じく病む。此愚の約めて三等と為す所以なり。然し叔和節氣を實講し、以て類目を立つる如き

も、亦迂拘にて信じ難きに似る。前輩之を駁した尽くす。天行温疫に至つては、則ち其の行なり。每每証を異にす。孫真人謂ひて天地變化の一氣を、造化必然の理と為す。而して呉氏『雜氣論』は、殆ど其の秘を発す。蓋し其の氣為るや、猖狂癘烈、人偶々之に感ずれば、則ち氣血沸乱し、従つて相化す。猶ほ蠟膏を漆に投ずれば、漆化して水と為り、皂肉を竈に入れれば、突煙煤堅たるごとし。衆人の疾、大略相似る所以なり。且つ啻に温疫ならず、時氣病の如きも、未だ敢て一定ならずと雖も、今を以て之を驗す。二十年前は、人病まば陰多し、比歲以来、患者陽多し。豈是天地間の風氣、時有つて変遷せんや。或いは自ら陰勝ち、或いは自ら陽勝つ。而して人の体氣は、必ず随応和し、偏勝する所有る。故に其の病を得る。亦自ら相搏ち、仍ほ以て然るを致すや。地の南北に、其の病等有るも、理は則ち一なり。然らば則ち病皆邪に因つて変ぜざる無し。而して今人を以て論ずる者は何ぞや。寧ろ之を実求し、敢へて虚求せざるなり。夫れ温疫の劇易緩急有り。之を邪に軽重有りと謂ふも猶ほ可なり。然し更に虚実の分無きこと能はず。況や風寒時氣に至つて、則ち最も寒熱の更変多きをや。邪に豈此等の伎倆あらんや。邪輕しと雖も、其の人弱き者は病治し難し。邪重しと雖も、其の人強き者は病治し易し。是を以て病の必ず人に因つて化することを知るに足る。且つ邪の物為る、象観るべく無し。仮令ば鑿鑿として以て其の理を究れば、要は揣摩精度を免れずして、施治の際、果して何の益有らん。譬へば猶ほ沔燻のごとく然と

して、其の然る所以の故を茫昧の間に求め、遂に凶荒を補ふこと無きなり。是を以て病を医するの法は、其の脈証に就いて、而して寒熱 表裏 虚実の真を認得すれば、則ち左右原に逢ひ、病に遁情 無し。固より風寒 時氣 温疫の辨に拘わらざるなり。寒熱 表裏 虚実の分 有る所以に、必ず其の人体氣の如何に因るは、譬へば猶ほ田疇の涇澗 有る如し。高き者は早き、下き者は水す。必然の数なり。故に田を治むる者は、其の高下に因つて、以て之を防ぐことを為して足る。豈何ぞ須く彼 急ならざるの察をすべけんや。然らば則ち病人を以てして論ずるは、是 本を求むなり。是 実学なり。仲景 未だ嘗て邪に就いて病を分けず。而して一に傷寒を以て之を括む。意は其 此に有らん。

問ふ。子 病情を以て陰陽を釈す。然し蔵府 経絡は、經に其の文 有らば、則ち従前の注家の説、詎なくんぞ廢すべけんや。

曰く。蔵府 経絡を、仲景 豈 敢へて屏卻せん。唯 全經の主旨は、彼に在つて此に在らざるのみ。蓋し仲景は之を『内經』に仮り、以て標識と為す。而して各々義 有り。陰陽は、之を数ふるに干なるべく、之を推すに万なるべし。故に『内經』以て表裏を分かち、而して仲景は則ち寒熱の名と為す。太陽の如き、『内經』に在つては、則ち邪 初めて表を傷る者と為す。故に仲景 之を仮り、亦 以て表熱の名と為す。少陽は表の最も深き者と為す。故に之を仮り以て半

表半裏の名と為す。陽明は胃の經と為す。故に之を仮り以て裏熱の名と為す。太陰は脾の經と為す。故に以て裏寒の名と為す。少陰腎經は、陰中の陰と為す。而して腎は液を主る。故に以て虚寒して液脱するの名と為す。厥陰は陰の尽くる所と為す。物極まらば則ち變ず。故に以て寒熱相錯の名と為す。顧るに其の意義是の如きのみ。曰く陽明中に居り、土を主るなりと、曰く脾家実すれば腐穢当に去るべきを以ての故なりと、曰く下焦虚し寒有つて、水を制す能はざるの類の如きも、亦是姑く其の名を仮り、以て病位病情を示すに過ぎざるなり。經絡の説に至つては、則ち曰く太陽の病頭痛し、七日以上に至つて自ら愈ゆる者は、其の經を行き尽くすを以ての故なりと、曰く太陽の病過經と、曰く到經して解せずと、曰く太陽隨經瘀熱裏に在るを以ての故なりの類の如きは、僅僅數章を出でざれば、則ち明らかに自づから一義と為す。亦之を活看して可なり。注家或いは堅く其の文を執り、又諸証の中間に經絡と合する者有るに憑いて、遂に全經を律するに經絡藏府の義を以てす。然りと雖も尙し一に經絡を以て之を読まば、其の義往往にして窒がりて通ぜず。每病必ず經腑を分かつの類の如きは、則ち尤も之を支離牽強に失す。唯病情を以て之を読まば、之く所而して通ぜざる事無し。而して其の經絡と合す者は、亦煩説を庸つてすること無く、刃を迎へて解す。仮令ば頭項強痛の邪熱表に在るは、勢い必ず上浮して然らしむ如きなり。余は隅反とすべきなり。且つ陽明太陰の治は、但涼温の差にして、脾胃の分無く、少陰は専ら温中に任せて、

滋腎を事とせざる如きは、是其の必ずしも各蔵各府を分かつを要せざるなり。此經文の皆は蔵府經絡を主張せざる所以なり。抑も又此に由つて推すに、『内經』の經絡を以てすると、仲景の病情を以てするは、其の理一に王程二氏の言の如きを知る。故に今提綱自り勞復に至つて、一に病情を以て之を貫き、之を經文に徴すに、既に前後の牴牾無し。之を事為に驗し、亦此に切近すること莫し。是愚此の説を立つる所以にして、実に諸庭の間に本づきて云ふのみ。

傷寒論述義卷第五終

弟子邨田精 中玄校

傷寒論述義補

是の書刊布し年有り。頃又數解を得、因つて左に録し、以て子弟に示す。辛亥清明の日。

元堅

孫真人風論の義を演ぶるに、表虚表実の分は、病者の素稟に在りと辨ず。其の言諸風を為して発すと雖も、亦以て疾病の常理を該ぬ。學者宜しく參攷すべし。

其の蔵に寒有るか、下焦虚して寒有るかは、此太陰少陰の分別する処なり。蔵字は、蔵寒虬上つて膈に入るの蔵と義を同じふす。少陰にして下焦虚すると云はば、則ち太陰の下焦虚せざるを知るべし。腎は胃の関なり。今下焦に権有り。故に胃腸摂せずして、津液能く持す。此寒氣の内実を得る所以なり。少陰は則ち下焦衰ふ。故に胃腸摂せずして、津液下脱す。此寒氣の内実を得ざる所以なり。然らば則ち寒実寒虚の分有る所以の者は、正に其の人の腎氣の強弱に在るなり。然りと雖も少陰の病は、固より必ず其の中焦を併せて虚す。諸々其の諸証と、其の方薬とを觀て、見るべし。且つ下元の虚は、遽に復すべくに非ず。唯其れ中を温め寒を散ずれば、以て能く下焦に達す。此腎を補ふの劑を用ゐずして、特に四逆を取ること有る所以なり。前述、成氏太陰少陰を中焦下焦に分けるの説に於いて、以て恐らく誤りと為す。又少陰の病と謂ふは下虚を兼ねる者と為さず。俱に理を研くに未だ密な

らざるに由るのみ。

下利、腹脹滿、身体疼痛するは、此太陰に太陽を兼ねる者にて、其の裏証重し。故に裏を先にし表を後にす。太陰篇の桂枝湯の條は、其の裏証輕し。故に表を先にし裏を後にす。宜しく相對して看るべし。

『証治要訣』に、太陰の病を論じて曰く、「腹滿して痛めば、当に壅通ずるを得べし。桂枝湯加芍薬に宜し」と。復庵の此の言、先づ我が心を獲る。

苦酒湯の、半夏、棗核の十四枚の、十字は、疑ふに大字譌る。成本、『玉函』、核下に、大字有り。此を以て徵すべし。然し彼も亦十字を剩すなり。蓋し僅に是一鷄子殼、須く四枚を用ゆべし。適に其の量に協ふ。

厥陰篇第七條、尙し前述の或説を用ゐれば、則ち食するに索餅を以て発熱せざる者、調治し日を経て、厥利俱に止む者、誠に言を待たず。後日之を脈し、其の熱続いて在る者は、其の利止む、亦知るべきなり。又後日は、成本、『玉函』、後三日に作る。然らば則ち旦日を併せ四日と為して、熱厥に多きこと一日、仍ほ其の非を知る。

厥陰篇の、結胸せず腹濡、軒邨寧熙曰く、「前の病者手足厥冷の條に照らし、濡は、当に滿に作るべし。字の誤りなり。果して是腹濡なれば、則ち其れ下すべからざるは、誠に言を俟たず。此の証人をして疑誤せしむる処、正に虚燥腹滿に在り。禁を致す所以なり」と。此の

説当を覚ゆ。

三陽の合病、遺溺は、白虎の証に有る所に非ざるに似る。此の二字、疑ふに当に発汗すれば則ち讞語すの下に在るべし。風温下を被らば、則ち直視失溲す。其の汗下を殊にすと雖も、上盛下虚為るは則ち一なり。

風湿相搏二條、俱に表虚寒の証に係る。湿邪淹滯すと雖も、猶ほ少陰の直中と情を同じふして、其の三方、亦即ち麻黄附子の二湯、及び附子湯の例のみ。

揚雄方言ふ、「水中居すべく、洲と為る。三輔之を淤と謂ふ」と。郭璞曰く、「音血瘀、此古人音を以て義を載する者、瘀の淤為るを徴すべし」と。

『外台』引く所の、経文の異同、或いは『輯義』未だ採らざる者有り。今宋本に照らし、略数端を掲ぐ。白虎加人参湯、人参二両、枳ずるに経文は趙開美本にて、太陽上篇に於いて則ち三両、下篇に於いて則ち二両。粳米一升、注に曰く、『玉函経』に、糯米を用ゆと。枳ずるに今本『玉函』は。粳米を用ゆ。又『千金翼』を引き、亦一升到作る。枳ずるに今本『翼方』は、此の方を佚す。文蛤散の條、病陽に在るを、病太陽に在るに作る。柴胡桂枝乾姜湯の條、微結、微字無し。黄芩二両。半夏瀉心湯の條、発熱汗出でて解すを止卻し、別に傷寒日数病原を論ずる中に出づ。蓋し自づから一條と為すなり。

余嘗て『釈瘟』一篇を撰す。經義に非ずと雖も、姑く之を附し以て參攷に備ふ。曰く、瘟疫の瘟と、温病の温とは、其の義同じからず。何を以て之を言ふ。疫の行くや、四時を論ぜずして、其の証毎に異なり。何ぞ必ず冬寒に傷られて春病む者、発熱して渴し惡寒せざる者に与らんや。攷ふるに瘟の名爲るは、猶ほ疫のごとし。『肘後方』に曰く、「其の年歳中瘧氣有り。兼ねて鬼毒を挟み相注し、名づけて温病と爲す」と。又曰く、「道術の符刻に五温を言ひて、謂ふ所温を辟くるの諸方、亦疫を辟くの謂なり」と。楊玄操『五十八難』を注して曰く、「温病は則ち是疫癘の病にて、春病を爲すに非ざるなり」と。此の説經義に於いて則ち乖る。『集韻』に曰く、「瘟は、烏と昆の切。疫なり」と。此に拠つて則ち瘟は之を疫と爲す。其の徵甚だ確にして、天行熱多し。許仁に則ち既に其の言有り。此疫の亦名づけて温と爲す所以なり。瘟疫は重言なり。猶ほ疫癘重言の例なるのみ。『六韜』に云ふ、「故人主に好みて賦斂を重ね、宮室を大るにし、遊台を多くすれば、則ち民多く温を病む」と。此文、今本逸する所にて、『群書治要』之を引く。茲に孫同元輯本自り録す。『後漢書』五行志注に、亦此の語有り。温を、瘟に作る。『論衡』命義篇に曰く、「饑饉の歳、餓ゆる者道に満つ。温氣疫癘、千戸門を滅す」と。又治期篇に曰く、「人の瘟病にして死するや、先づ凶色有り、面部に見る」と。並んで以て瘟の疫爲るを徴すべし。但し瘟は、本温に作る。其の疔に从ふ者は、蓋し後人改め写する所なるのみ。又傷寒例に、謂ふ所更に温氣に遇ひ、

變じて温疫と為る者は、即ち寒疫に對して言ふ。亦是一種の病なり。之を要するに温の名義は一ならず。亦猶ほ傷寒の寒氣中る所と謂ふ者有り、邪氣の表実と謂ふ者有り、外邪の総称と謂ふ者有りの類のごとし。學者知らずして、牽混して言を為す者、誤りなり。蔡邕『独断』に、瘟鬼の文有り。然し抱經堂校本は、瘧鬼の譌りと為す。『論衡』訂鬼篇も、亦瘧鬼に作る。又『広雅』に、殭字有り。蓋し瘟の異構ならん。

復寒論述義補終

我が蒞庭先生嚮むかひに『傷寒論述義』を著す。既已に大いに世に播はく。頃ころ又發明する所有り、更に補義を課す。將に附して以て行はん。熙庸劣にて又復た何をか言はん。先生常に熙輩おしに誨おしへて曰く、「医經を読むは他書と異り。若し是の經を読まば、当に心を虚しくして氣を平らかにし、其の至平 至易の処に就いて、性命の理を研し、文義と治術とをして、吻合して符契の如くせしむべきなり。然し之を為すに本有り。必ずや博く諸々の載籍を徴し、多く諸疾病の実を驗し、諸々本經に会萃し、優柔厭厭し、浸潤 涵泳し、真積力久し、始めて以て變を窮むること無きに応ず。此を之善く読む者と謂ふ。世 或いは穿鑿 拘泥し、固より偏見を執る者有り、膚淺浮疎にて、自ら心得を誇る者有り、徒に論辨に驚めて、証治の要を察せざる者有り、専ら字訓に拘つて、微意の在る所を究めざる者有り。此皆善く読まざるの過なり。世又一種 固陋の弊有り。其の人本学識 無く、徒に臆測 懸揣し、以て經旨を得ると爲し、倘し己意に合はざる者 有らば、概ね之を後人の攙入と謂ひ、肆然として之を刪改す。此直に夏虫の氷を疑ひ、越犬の雪に吠ゆるの類なるのみ。蓋し經に拠つて以て病を察する者ならざらん。此其の常矩、亦病に驗するに由つて經義を悟る者有り。此の理 察せざるべからず」と。又曰く、「書を読むの法は、務めて古人に遵ふ。古人の言は既に妥く、固より贅説 無くして、亦且つ博きを鬪ひ多きを誇る。更に意見を生じ、左伝右会し、渫渫眩曜し、之を無用の辨と謂ふ。吾 取らざるなり」と。又曰く、「凡そ医經を読み、訓義に確拠 有るに遇は

ば、則ち其の一二を挙げて足るなり。必ずしも繁冗を取らざるなり」と。又曰く、「訓詁精に似ると雖も、而し其の義治に於いて切ならざる者は、未だ可ならず。訓詁或いは精ならずと雖も、而し之を術に施し、必ず実效有る者は、乃ち経意を得たりと為すのみ。凡そ説を立つる者は、全経を通貫するに非ざれば、則ち之を理蘊を尽くすと謂ふべからず。万理を該尽するに非ざれば、則ち之を経意を得ると謂ふべからず。矧た乃ち変を以て常を律せんと欲し、及び常に拘りて、変に通ぜざる者も、皆善く読まざるの過なり」と。此の數言は、其れ皆医経を講ずるの宝筏なり。先生の書を読む者は、先づ此の理を了知す。其の可なるに庶ちかからん。蓋し先生 蚤つとに家学を承け、最も此の経を湛思す。凡そ義理の聚訟 決し難き、及び治術の同異得失、必ず之を古人に徴し、之を病者に驗し、考拠 精確、剖析 明白、一毫も門戸のに張ること無く、一言も實際に益せざること無し。其の従前の未だ速ばざるを闢いて、張子の微意を発する者は、奚に熙輩の賛揚を俟つ。熙や門下の瑣材にて、進んで其の道を恢ひろめ以て世に裨たすふこと能はず。退いて未だ其の教を淑くし以て人に仁あたつること能はず。仍ほ樛こ味を揣からず、特り其の聞く所を掲げ、以て其の後を書す。亦庶幾は学者嚮方する所有つて云はん。嘉永四年 辛亥 六月、筑前 稻葉元熙 謹んで識す。